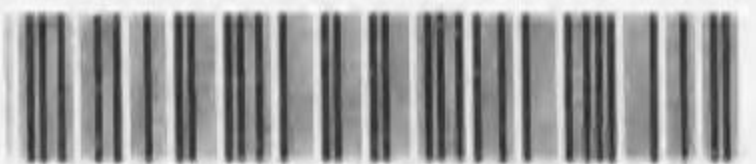




F83-Tu5-3aウ



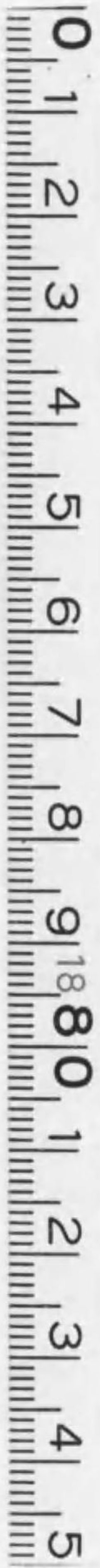
1200500765432

3

5

Ja

獵 狐
ツルゲーネフ 著
米川正夫 訳



始





F83
Tu 5
3a

獵人日記

サルターネラ著
米川正夫譯



第三書房





目次

ホーリとカリーヌイチ	七頁
エルモライと粉屋の女房	三三
マリーナの泉	五八
田舎醫者	七九
私の隣人ラヂーロフ	一〇一
郷士のオフシヤニコフ	一二七
リゴフ	一五七
ペーシンの草野	一八一
クラシーワヤ・メーチのカシヤン	三三四

解題

『獵人日記』は、一饒獵家が獲物を追つて野や森を跋渉する間に見聞した農村の生活の種々相を敘するといふ形式によつて統一せられた、長ささまざまの二十五篇の物語の一聯をさすもので、ツルゲーネフとしては初期の作品ではあるけれど、この高い天分を有する藝術家のあらゆる特質や傾向を残りなく示した名作で、單に露西亞文學の中に極めて高い特殊な位置を與へられてゐるばかりでなく、農奴制度廢止のために間接に大きな影響を與へた點で、露西亞社會史に於ても重要な一頁を占めてゐるのである。

とは云へこの名作が世に出たのは、單なる偶然の助けに依つたのである。ツルゲーネフは一八四三年讀文物語『パラーシヤ』を發表して、當時の批評界の權威であり露西亞文學全體の號令者であつたメリンスキイの注目を惹き、温い同情と鼓舞の言葉を贈られたのであつたけれど、その後の作品はメリンスキイの好意に充ちた期待を満足させることも出来なければ、作者自身の意にも満たぬやうなものばかりであつた。遂にツルゲーネフは自己の才能に絶望し、文學を抛つてしまはうとさへ決心した。けれど一八四七年、偶々友人バナエフの懇請に任せて、その編輯する雑誌『現代人』に與へた短篇『ホーリとカリイマイチ』が、作者の決心を翻へさせ、その將來の運命を決定する使命を帯びてゐたのである。この渺たる一小篇が實に露西亞の文學のみならず、社會生活にまで偉大な役割を演ずるに至らうとは、作者も無論豫期してゐなかつたが、編輯者バナエフも夢にも考へなかつたので、この作品を雑誌の創作欄でなく雜俎欄へ編入した。しかしそれにも拘らず、『ホーリとカリイマイチ』は今ま

2
での如何なる作家にも見られなかつた新鮮さと眞摯さに依つて、忽ち讀者に驚嘆の目を眩らせ、全讀者階級の興味を中心となつたのである。然らば、なぜこの小篇がかくまで一世の注目を喚起したか？ ほかでもない、その中に現はれた農村と民衆に對する態度である。

當時の露西亞農民はたゞ無聊蒙昧な醜い滑稽な半野獸的存在のやうに見做されてゐて、文學の對象となり得るなどとは殆ど考へられない位であつた。ところが、ツルゲーネフは初めて農村の民衆の中に潜んでゐる勝れた睿智と才能と、優にやさしい感情と、純な魂を開いて見せたのである。現實的、實際的頭腦の發達した賢い處世家のホーリにしても、自然を友としてその中の詩趣を享樂することに依つて満足してゐる、柔和で謙抑なカリメイチにしても、彼らの領有者である貴族の地主に比べて、人間的に些かも劣るところがないばかりでなく、却つて自然の性情を歪められたり傷つけられたりしない純眞さに於いては、寧ろ遙かに優れてゐるくらゐなのである。この事は當代の露西亞にとつて、驚異すべき新発見であつた。

ツルゲーネフはこの一作の成功に勵まされて、勇氣と希望を奮ひ起こし、幼い頃から母の莊園で書へた豊富な知識と觀察を傾けつゝ、農民と地主を主題とする小説のシリーズを續け、遂に一八五一年、巴里近郊のブジワールで最終篇を書き上げ、『獵人日記』と題して二巻の集に纏めて出版した。この書の出現はすべての心ある露西亞人をして、今さらのやうに農奴制度なるものの恐ろしく、忌はしい本質を痛感せしめたのみならず、長い間解決し難い懸案として殘されてゐた農奴解放を實現する一つの有力な動機とさへもなつたのである。一八六一年二月十九日の勅令によつて、この歴史的な大事業を完成した皇帝アレクサンドル二世は、また皇太子として『獵人日記』を読んだが、それ以來農奴解放の急務を思ふ心は夢寐にも腦裡を離れなかつたと告白してゐる。この書物

が一つの社會問題の提唱として當時の露西亞知識階級に投げかけた衝動は、想像することも出来ないほど大きなもので、その頃峻烈を極めたニコライ一世治下の検閲をどうして無事に通過したかといふ事が、多くの人々に取つて不思議な謎のやうに考へられたほどである。現にこの書物に對して當面の責任者であつた莫斯科檢閲局長のリツフが、一時それとなく職を罷免されたといふ事實も傳へられてゐる。ラストーブチ伯爵夫人がチャアダエフに向かう時、『Voilà un livre incendiaire (これは人の心に火を点けるやうな本だ)』と云つたのは、當時の露西亞社會に對する『獵人日記』の意識を雄辯に語るものである。

然し、今日の讀者の眼から見ると、この『獵人日記』一巻に現はれてゐる作者ツルゲーネフは、それほど熱烈情激な社會改革の闘士ではない。勿論、彼は極めて高い教養を有するインテリゲンツトであり、敏感な魂をもつた正義の士であつたから、醜惡な農奴所有の制度を衷心から憎み呪はずにゐられなかつた。で、後年彼自身その追憶の中で語つてゐるやうに、この制度を敵として最後まで争闘を續け、決してこれと和解しまいと決心し、所謂「ハンニバルの誓ひ」を立てたほどであるが、然しツルゲーネフは人となり温良柔和な藝術家であつたために、正面から破邪顯正の剣を取り、政治的立場に立つて戦ふなどといふことは到底なし得るところでなかつた。成程、『獵人日記』の中には奴隸の状態に置かれた農民たちの悲惨な苦しい生活が、さまざまの形と状況に於いて物語られ描寫されてゐるけれど、敢然たる激しい抗議の聲は殆どどこにも見られない。たゞそこには地主やその側近者達の横暴と、氣紛れと我愆のために、人間としての權利も自由も幸福も蹂躪されて、貧困と苦惱の中に呻吟しながら、あるひは宗教に、あるひは自然に、あるひは藝術に、あるひは傳統の權威に、慰安や是認を見出してゐるいぢらしくも痛ましい農民たちと、長い世紀に亘つて濫用された過當の權利のために良心を痙攣さ

せられ、皮相の文化と奢侈のために無爲無能の遊民となり切つて、健全な良識を失つてしまつた貴族地主のもろの型が、嚴正なレアリズムの精神をもつて純客觀的に描き出されてゐるのみである。しかもそこにはこの作者の特色である一抹の憂愁を帯びた音樂的、抒情詩的な氣分が漂つてゐて、なほさら社會的抗議の書としての本筋の調子を和らげてゐるのである。

元來ツルゲーネフは、十九世紀前半の露西亞文學を二分してゐた大きな思潮的對立たる西歐派と汎スラヴ派の中で、前者に屬してゐた作家なのであるから、従つて露西亞の過去を零と見て、新しい西歐的文化の基礎の上に將來の露西亞を建設すべしといふ思想の共鳴者であつたが、それにも拘らず人間として藝術家としては、自分を育て養つてくれた環境である莊園的露西亞に深い本能的な愛情を持つて生まれたのである。彼は農奴制度そのものを憎み呪ひながら、農奴制度の上に築き上げられた特殊な文化や傳統に對して限りなき懐かしみを感じ、かつこの世界に根を下ろしてゐる農民たちと、彼らの思念や感情や信仰を温い氣持で受入れ、抱擁せずにはゐられないのである。この意味に於いて西歐派であるツルゲーネフには、その對立者たる汎スラヴ派と極めて密接な共通點が認められる。この女性的なほど緻細優美な魂を賦與されてゐる藝術家にとつては、粗々しく嚴しい反抗や鬭争の叫びよりも、やさしい空想的な氣分や、つましい謙抑の精神や、農民獨特の宗教的な人生觀などを對象とする方が、より多くびつたりとした相應はしいものに感じられたに違ひない。

彼は不思議な神祕と憧憬を感した露西亞の野や森の廣表の間に、滲てしなく擴がつた莊嚴な大空の下に、祖国の農民の内部生命をなしてゐる偉大な謙抑の詩味を感得し、これを言葉に傳へて見せたばかりでなく、その豊かな詩味の湧き出る源を深く究めて、數々の美しい驚嘆すべき典型を創造したのである。自己否定の中に徳行と幸

福との哲學を體得したルケリヤ(『生きた御遺骸』)、自然を愛し自然と同化することに依つて独自の世界觀、宇宙觀に悟入した空想家のカシヤン(『クラシワヤ・メーチのカシヤン』)、素朴な民謡の中に露西亞民衆も力も、憧憬も、悲しみも残りなく表現して見せた自然の藝術家ヤイコフ(『歌うたひ』)、冷酷で一徹な表皮の下に暖い人情味を隠してゐる陰鬱なピリュク(『狼』)、露西亞農民の中に秘められてゐる豊かな本能的力を暗示するやうな『ページンの草野』の少年たち、これらはすべて一連の美しい寶玉として、世界の文學に永く傳へられるのであらう。しかしツルゲーネフが單に社會的風潮や所謂進歩的思想のみに指導されて、その奴隷となることなく、藝術家としての自己の天分と素質を十分に生かして、彼の最高傑作たる内部的自由を創作の根本に置いたがために、この『獵人日記』は眞實味に充ちた輝かしい農村の敘事詩となつて現はれたのである。そのために、専ら社會組織の不正を指摘し暴露せんとする仰々しい興奮した叫喚や叱咤にもまして、農村の現實に對する世人の眼を開かせ、民衆に對する正しい同情を呼び醒まし、ツルゲーネフの「ハンニバル的誓ひ」を成就させることになつた。

とは云へ、この書が我々にとつて貴く懐かしいのは、その社會的意義や功績のためではなくて、とくに描かれた自然と人間が眞實と美の融合した永遠の世界を開いて見せたからである。また單に形式・手法の點から見ても、ツルゲーネフは『獵人日記』によつて文學上の新しいジャンルを創造したのであつて、この自然と人事を交錯させたスケッチ風の短篇の領域に於いては、何人にも凌駕されることのないやうな高い完成味を示した。特にその自然描寫に至つては、これは單なる作の背景や裝飾ではなくて、高いハーモニーに充ちたツルゲーネフの魂そのものの發現であり、その優婉な内部生命を奏で出づるいみじき交響樂である。

ホーリとカリーヌイチ

ボルホフ郡からジーズドラ郡へ越して来たことのある人は、オリョール縣とカルーガ縣の住民の型に、際立つて相違があるのに、一驚を吃したことだらう。オリョール縣の百姓は、あまり背丈が大きくなく、や、猫背氣味で、いかにも氣難しさうに上眼づかひに人の顔を見る癖があり、泥楊でつくつたやくざな小屋に住んでゐて、地主の畑へ出てお務めの仕事をするばかりで、商賣などする者はなく、粗末なものを食べて、靴の代はりに樹の皮沓を穿いてゐる。ところが、カルーガ縣の小作百姓は、廣々とした松の木造りの小屋を住み家とし、背も高く、陽氣な惡びれない眼つきをしてゐて、顔なども小ざつぱりとして色が白く、牛酪や木脂を商つて、日曜祭日には長靴を穿いて歩き廻る。オリョールの村は（私はオリョール縣の東部のことを云つてゐるので）、じく／＼した窪地をやつとこさで直して拵へた泥池の近くにあつて、多くは隅から隅まで耕された畑の眞ん中に當たつてゐる。いつでも直ぐ間に合ふ少しばかりの楊の木と、二、三本の瘦せひよろけた白樺を除けると、木らしい木は、一里四方があひだ眼にも當たらぬ。百姓家は互ひにくつ、き合つてゐて、屋根は

腐つた麥藁でぞんざいに葺いてあるばかり……カールガの村はその反対で、多くは森に囲まれてゐる。百姓家もゆつくり間隔を置いて並んでゐる上に、立ちもしつかりして屋根は板葺きになつてゐる。門の締りも嚴重で、背戸の編み垣も壊れかゝつたり、外の方へのめつたりしてゐないから、通りすがりの豚に踏み込まれるやうな恐れもない……で、銃獵家にとつてはカールガ縣の方が有難いのである。オリョール縣では、いま五年もたつと、僅かばかり残つてゐる森も藪地も、悉く跡を斷つてしまふに相違ない。沼などは藥りにしたくもないのである。カールガ縣の方はそれどころか、禁伐林が何百露里となく續いてゐるし、沼地も何十露里かに亘つて繋がり、あの上品な鳥——松鶏も未だに跡を斷たず、お人好しの田鶏も棲んでゐる。それに何時も氣忙しない鶉がけた、ましく飛び立つて、鐵砲打ちや獵犬を浮き浮きもさせるし、驚かせもするのである。

私は銃獵家としてジーズドラ郡を訪れてゐる中に、原中でポルトゥイキンといふカールガ縣の或る小地主と近づきになつた。これは熱心な銃獵家だつたから、勢ひ立派な人間と云はなくてはならない。尤も、この人にも二三の弱點はあつた。例へば縣内の裕福な年頃の娘といふ娘に縁談を持ちかけては、その方の話をもとより出入りまで斷られた揚句、傷ついた心を抱きながら、ありたけの親友や知人にその悲しみを打ち明ける癖があつた。それでゐて、娘の両親には相變はらず酸っぱい

桃だとか、その他自分の家の畑でとれる果物類を贈物にするのであつた。それから、いつも同じ輕口話を好んで繰返したが、當のポルトゥイキン氏は大いに面白つもりでゐるにも拘らず、一向誰もをかしがらないのである。アキーム・ナヒーモフの作品を褒め立て、「ピンナ」と題する小説に隨喜してゐる始末だし、それに吃りの癖まであつた。自分の獵犬を天文學者と呼び、「けれど」といふ代はりに、「けんど」と云ふ。自分の家では佛蘭西料理と稱するものをやつてゐるが、その秘訣は抱への料理人に云はせると、あらゆる食品の自然の味をすつかり變へてしまふことなのであつた。この藝術家の手にかゝると、肉はふんと魚臭くなるし、魚は茸の香ひを立てるし、マカロニーは火薬臭くなるのが落ちであつた。その代はりたとへ一切れの人蔘でも、菱形か四邊形にしななければ、決してスープの實に使はないのである。しかし、これ等の僅かつまらない缺點を除けば、ポルトゥイキン氏は前にも云つたとほり、立派な人物なのであつた。

私が初めてポルトゥイキン氏と近附きになつた時、彼は早速その日に私を自分の家へ招いて、一晩泊まつて行くやうに勧めた。

「私の家までは、かれこれ五露里もありますので、」と彼は云ひ添へた。「歩いて行つたら、中々容易なことぢやありません。そこで先づホーリの家へ寄ることによませう。」（私はこの男の吃りを一

々寫さないことにするから、その點讀者の寛恕を乞ふ。

「そのホーリといふのは何者です？」

「私の領地の百姓でして……ここから極く近い所にゐるんです……」

私たちはホーリの住居へ向かつて行つた。とある森の真ん中に、すつかり伐り開いて綺麗に垣らした空地があつて、其處にホーリの住居がたつた一軒だけ高く聳えてゐる。住居と云つても、松の丸太で作つた小屋二三軒に分かれてゐて、それを板圍ひで繋いだものである。母屋の前には、細い柱で突つ支ひをした片庇が續いてゐる。私たちは入つて行つた。年の頃二十歳ばかりの、背の高い綺麗な若者が、私たちを出迎へた。

「あゝ、フェーチャー！ ホーリは家かい？」とボルトウイキン氏は訊ねた。

「留守ですが。ホーリは市へ行きましたんで。」若者はにつこり笑ふ拍子に、雪のやうに白い齒並びを見せながら答へた。「馬車の用意をするんですか？」

「あゝ、さうだ、馬車だ。それからクワスを持つて來て貰はう。」

私たちは家の中へ入つた。少しの汚れ目もない丸太組みの壁には、安つほい木版畫などは一枚も貼りつけてなく、銀造りのどつしりした聖像の前には、ちやんと燈明が點つてゐるし、菩提樹の卓

はつい近頃匏をかけて、きれいに洗ひ上げてあつた。丸太の間や窓柱にも、いたづら者のごきぶりもちよろ／＼してゐないし、分別臭い様子をした油蟲もかくれてゐない。若者は間もなく、上等のクワスをなみ／＼と注いだ大きな白い水呑みコップと、小麦パンの大きな切れと鹽漬の胡瓜を十二本ばかりのせた木皿を持つて、姿を現はした。彼はこれだけの物を卓の上に置くと、戸口に凭れかかつて、にこ／＼しながら私たちを見廻はし始めた。私たちがこのランチを食べ終らない中に、もう入口の階段の邊りで馬車の轍が鳴り始めた。私たちは表へ出た。髪を房々と渦卷かした、頬の赤い十五歳ばかりの少年が、ちやんと馭者臺に腰かけて、よく肥えたまだら馬をやつとのこととで制してゐた。馬車の周りには六人ばかりの逞ましい若者が立つてゐるが、みんなお互ひ同志似でもあるし、フェーチャーにもそつくりであつた。「みんなホーリの倅なんで！」とボルトウイキンが教へてくれた。「みんな仔奥猫でさ」後から入口の階段へ出て來たフェーチャーが、かう合槌を打つた。「おまけにこれでもまだみんな揃つちやあねえんですよ。ボタープは森へ行つてるし、シードルは老父と一緒に市へ出掛けたし……いゝか、プーシャ。」と彼は馭者の方へ向いて言葉を續けた。「一息にかつ飛ばすんだぞ。旦那様のお伴だかな。だけど、道でこぼこした所は、氣いつけてそろつとやれや。でねえと、車を壊した上に、旦那の腸をでんぐり返さすからな！」ほかの仔奥猫どもはフェーチャー

「の軽口を聞いて、にやりと笑つた。「天文學者アストロノミヤを乗せてくれ！」とポルトゥイキン氏は物々しい調子で叫んだ。フェーチャは自分も面白さうな様子で、わざとらしくにや／＼笑つてゐる犬を宙にさし上げて、馬車の底へ下ろした。グーシャは馬の手綱を捌いた。馬車は走り出した。「そら、あれが私の事務所です。」不意にポルトゥイキン氏は一軒の小さな低い家を指さしながら、私に向かつてかう云つた。「寄つて御覽になりますか?」「結構ですな。」「今ではもう使つてゐないんですが、」と彼は入りながら説明した。「それでも一見の價値はありますでな。」「事務所はがらんとした部屋が二間きりだつた。めつかちの年とつた番人が、裏庭の方から走つて來た。「今日は、ミニャトイッチ。」とポルトゥイキン氏が口を切つた。「だが、水は一體どうした?」めつかちの老人は姿をかくしたと思ふと、すぐ水を一杯入れた瓶にコップを二つ添へて、引返して來た。「二つ味をきいてみて下さい。」とポルトゥイキンは私にすゝめた。「これは私の自慢の素晴らしい清水しみずなんです。」私たちはコップに一杯づゝ飲んだ。すると、老人は小腰を屈めてお辭儀をした。「さあ、これでいよく出かけても好きさうですな。」と私の新しい友人が云つた。「この事務所で、私は商人のフリルーフに、五丁歩の森をいゝ値で賣つたものですよ。」私たちはまた馬車に乗りこんで、三十分ばかり経つた時にはもう地主邸の門内へ乗りつけた。

「ねえ、一つ伺ひたいものですが、」と私は夜食の時にポルトゥイキンに訊ねた。「どうしてホーリはあなたの領地内でも、ほかの百姓たちとは別に離れて住んでゐるんでせう?」

「實はかういふわけなんですよ。あれはなか／＼分別のある百姓でしてな、二十五年ばかり前にあれの家が焼けてしまつた時、亡くなつた親父の所へやつて來て「どうか、ニコライ・クジミッチ、あの沼地んとこの森に家を建てさせて下さいませんか、さうすれば、年貢も前よりか餘計にお納めしますから、」とかう云ふぢやありませんか。「一體なんのために沼地へ越して行きたいんだ?」「いいな、なぜといふわけはありませんので。たゞ、旦那様、ニコライ・クジミッチ、どうかお邸の細仕事や何かは、一切御免にして頂き度うござります。その代はり年貢の方は、なんとも思召し通りにお決め下さるやうに。」「では、年に五十ルーブリだ!」「よろしうござります。」「だが、滞りのないやうに氣をつけないと、承知せんぞ!」「とんでもない、決して滞るやうなことは致しませんとも……」まあ、かう云つたやうなわけで、あの男は沼地に住むやうになつた。それ以來やつには臭猫かみねこといふ綽名がついたんで。」

「は、あ、そしてうんと身代を太らせたんですね?」

「太らしましたよ。今では現金で百ルーブリの年貢を納めてをりますけれど、もつと値上げしてや

らうかと思つてゐる位なんです。私はもう幾度となくあの男に「おい、ホーリ、身抜きしろよ、女當に身抜きして自由になれよ」と云つたものですが、あの男もさる者で、ない袖は振られん、金がないなんて、まことしやかに云ひ張るんでしてね……ふむ、そんな馬鹿なことがあつていゝものか……」

翌日、私たちは茶を飲むと直ぐ、またも獵に出かけた。村を通り抜けながら、ポルトゥイキン氏は、軒の低い百姓家の傍らで、馭者に命じて車を止めさせ、よく透る聲で、「カリーマイチー」と呼んだ。「たゝいま、旦那様、たゝ今。」といふ聲が背戸の方から聞こえた。「いま草靴の紐を結んで居りますで。」私たちはそろ／＼馬車を進めて行つた。村はづれの所で、四十ばかりの男が追ひついた。瘦せて背が高く、小さな頭を後ろへ反らしてゐる。これがカリーマイチチなのであつた。ところ／＼痘痕おぼたの見える、色の淺黒い、人の好きさうな彼の顔は、一眼見ただけで私の氣に入つた。カリーマイチは（あとで知つた事だけれど）、毎日旦那のお伴をして獵に出かけ、獲物袋を持ち歩いたり、時には鐵砲をかついだり、鳥の止まる所を見付けたり、水を汲んで來たり、蕈を摘み集めたり、掛け小屋を作つたり、馬車の跡からついて走つたりした。かういふわけで、ポルトゥイキン氏はこの男がゐないと、まるで手も足も出ないのであつた。カリーマイチは極く陽氣な、しかもこの上なく温

順しい性質の男で、のべつ小聲に鼻唄を歌ひながら、暢氣さうに四方八方を見廻はしてゐるのであつた。ものを云ふ時は少し鼻にかゝつて、にこ／＼しながら薄青い眼を細め、楔形をした疎らな顎鬚をのべつしごく癖がある。歩き方は早くはないけれど、細長い棒に軽く凭れるやうにしながら、大股にさつきと足を運ぶ。その日一んちのあひだに、彼は再三私に話しかけて、厭味のない物腰で何くれと世話をしてくれたが、主人の面倒を見る様子といつたら、まるで子供扱ひであつた。焼きつくやうな眞晝の暑さに堪へかねて物蔭を求めずに居られないやうな時など、彼は森の一番奥まつた所にある自分の養蜂場へ案内して行つた。カリーマイチは香りの高い乾草の束をかけ連ねた小屋の戸を開けて、私たちをすが／＼しい乾草の上に臥させてくれた。さうしておいて、自分は網のついた囊みたいなものを頭に被り、小刀と壺と燃えてゐる薪を持つて、私たちのために蜜の房を切り出かけて行つた。私たちはまだ暖い透き通つた蜜を清水で飲んで、單調な蜂の唸り聲と、うるさい木の葉の囁きに耳を騁らせながら、うと／＼と假睡なげんだ。——微かなそよ風のざわめきが、私の眼を覺ました……眼を開けて見ると、そこにカリーマイチがゐる。彼は半ば開いた戸口の闕に坐つて、小刀で木匙をこしらへてゐる。私は長い間、夕空のやうに明るく慎ましいその顔を、あかす見惚れてゐた。ポルトゥイキン氏もやはり眼を覺ました。私たちは急には起き上がらうとしなかつ

た。長く歩き廻はつた揚句、ぐつすり寝込んだ後で、ちつと乾草の上に臥てゐるのが、いゝ氣持ちなのであつた。身體は甘く萎えたやうにぐつたりして、顔はかるく上氣し、心よいもの憂さに眼が自然にふさがる。そのうちにやつと起き上がつて、また夕方までぶらつきに出かける。夜食の時に私はまたしても、ホーリとカリメイチの話始めた。「カリメイチはいゝ百姓ですよ。」と、ボルトウイキン氏は云つた。「こまめによく働く男でしてな。けど、きちんと世帯を張つて行くことが出来ないですよ。なにしろ私が始終ひつ張り出すので、毎日私のお伴をして獵にばかり出かけるもんですから……全く世帯どころぢやありませんよ——考へても見て下さい。」私はそれに同感の意を表した。やがて私たちは床についた。

翌日、ボルトウイキン氏は用事があつて、隣り村のビチュコフといふ地主と一緒に、市へ行かなければならなかつた。隣り村のビチュコフはボルトウイキン氏の地所に鋤を入れた上、その地所で、ボルトウイキン氏の抱へてゐる百姓女を鞭で折檻したのである。で、私は一人で獵に出かけた。日暮れ前に、ちよつとホーリの家へ寄つてみた。家の隣で一人の老人に出あつた——頭の禿けた、背の低い、肩幅の廣い、肉付きのいい男で——これが主人のホーリであつた。私は好奇の念を抱きながら、暫らくこのホーリをみつめてゐた。彼の顔のつくりはソクラテズを聯想させた。同じやう

にでこぼこした高い額、同じやうに小さな眼、同じやうな獅子鼻。私たちは一緒に家の中へ入つた。例のフェーデヤが牛乳と黒パンを持つて來てくれた。ホーリは床几に腰を下ろして、縮れた頰を悠然と撫でながら、徐ろに話を始めたものである。彼は自分の尊嚴を感じてゐるらしく、もの云ひ方も身のこなしも、ゆつたりとして、時々長い口髭の間から、にや／＼笑ひを洩らすのであつた。

私たちは時きつけのことや、收穫のことや、百姓の暮らし向きのことなどを話し合つた……彼はなんでも私の話に同意するやうな風だつたけれど、後で私は妙に氣がさして來た。自分が見當ちがひな話をしてゐるやうな感じがするのであつた……とに角、なんだか變てこな調子なのである。ホーリはどうかすると、やゝこしいものの云ひ方をした。きつと大事をとるためだらう……一つ私たちの會話の見本をお目にかけてよう。

「ときにホーリ、」と私は彼に云つた。「なぜお前は旦那に身の代金を拂つて、自由にならないんだねえ？」

「わしが自由になつてどうするのでござえますか？ 現在わしは自分の旦那様の氣性もよく吞み込んでゐるし、年貢の事だつてちゃんと分つて居りますでな……うちの旦那は結構なお方でござえます

「よ。」

「それだつて、やはり自由の身になつた方がいゝだらうに。」と私が注意した。

ホーリはじろりと私を横目に眺めた。

「そりやもう分かりきつたこんで。」と彼は云つた。

「ぢや、一體どうして自分の身拔きをしないんだい？」

ホーリは首を一捻りした。

「だつて、旦那様、身拔きをする金がどこにありませうぞ？」

「ふむ、空つ惚けるのは澤山だよ、爺さん……」

「ホーリなんか自由な乗の仲間入りをしたら、」と彼は獨言のやうに小聲で續けた。「そしたら、鬻のない人間みんなホーリの旦那になつてしまひませうて。」

「ぢや、お前も鬻を剃つてしまつたらいいだらう。」

「鬻なんかなんでもござえませせん。鬻は草も同じこんだから、刈つたつて構やあいたしません。」

●鬻鬻を蓄へるのは殆ど農夫に限られてゐたところから、農奴である間は地主が主人であるが、たゞの平民となれば、中産階級階級に属するものと云ふ意味が出て来る。(譯者)

「へえ、それぢや一體どうすると云ふんだ？」

「それはつまり、ホーリがやんがて商人にならうといふわけなので。商人はいゝ暮らしをして、おまけに鬻もちやんと生やして居りますでな。」

「なんだつて、ぢやお前は商賣の方もやつてるのかい？」と私は訊ねた。

「ほち／＼商ひをやつてをりますよ、牛酪だの樹脂だの……ときに、旦那、如何でござえます、馬車の支度をいたしませうか？」

「こいつ、口も達者だし、腹にも一物ある男だな。」と私は考へた。

「いや、」と私は口に出して云つた。「馬車は要らない。明日はお前の家の周りをうろつくことにするから。もし構はなけりや、お前んとこの乾草小屋に泊まらして貰ひたいんだが。」

「さあ／＼、よろしうござえますとも。だけど、納屋の中なんぞで、ゆつくりお出来になれますかね？ 女どもに云ひ付けて、敷布でものべさしたり、枕の一つも置かせませうわい——おい、女ども！」彼は腰を持ち上げながら、かう叫んだ。「こつちだ、こつちだ……それからフェーチャ、お前も一緒にやつて来う。なんせ、女どもは氣の利かねえもんだでな。」

十五分ばかり経つてから、フェーチャは角燈を提げて、私を納屋へ案内した。私は香りの高い乾

草の上に身を投げ出した。犬が足もとに丸まつて臥た。フェーチャは私におやすみと云つて出て行つた。戸がぎいと軋んで、ばたんと閉まる。私はかなり長い間、寝つかれなかつた。牝牛が一頭戸の傍へ来て、二度ばかり騒々しく鼻息を洩らした。犬は聲に威嚇を響かせながら、戸口の方を向いて、うゝと唸つた。豚が物思はし氣にぶう／＼云ひながら、傍を通り過ぎて行く。どこか近くで、馬が乾草を嚙んでは鼻を鳴らしはじめる……私はやつとのことで、うと／＼した。

夜のひき明けに、フェーチャが起こしに来た。この陽気で元氣のいゝ若者は、すつかり私の氣に入つてしまつた。それに、私の觀察した範圍では、彼はホーリ老人の秘蔵つ子でもあるらしかつた。彼ら親子は優しい愛情の籠もつた調子で、お互ひ同志からかひ合つてゐた。老人が私を迎ひにやつて来た。私わが家の屋根の下で一夜を過ごしたためか、それとも何かほかのわけがあるのか、とにかく、ホーリの態度は昨日よりすつと愛想がよくなつた。

「サモワールの用意が出来て居ります。」と彼はにこ／＼しながら云つた。「お茶を飲みに来てください。」

私たちは卓の傍に腰を下ろした。嫁の一人の丈夫さうな女が、牛乳を入れた壺を持つて来た。息子たちもみんな順々に、家の中へ入つて来た。

「お前んとこの若い衆達は、實にいゝ身體をしてゐるなあ！」と私は老人に自分の感じを云つた。

「さよで。」砂糖の塊りを小さく噛み砕きながら、老人は云つた。「悴どもにしても、わしや婆さんに苦情を云ふ種は、何もない筈でございますよ。」

「みんなお前と一つ家に暮らしてゐるのかい？」

「みんな一緒でございます。自分からさうしてえといふから、こんな風に暮らしてゐるんで。」

「みんな女房持ちかね？」

「ほれ、あすこに一人いたづら小僧が、まだ嫁を買はねえでゐますよ。」相變はらず戸に凭れかゝつてゐるフェーチャを指さしながら、彼はかう答へた。「末のグーシカ、あれはまだ年がいかねえからも少し持つてもよろしいんで。」

「おらが嫁なんか貰つて何にするだ？」とフェーチャが口を入れた。「このまゝでも何不足はありやしねえ、女房なんか何になるんだ？ 夫婦で唾み合ひでもしろつてのいかい？」

「ちよつ、この野郎……俺はもうちゃんとしてゐるぞ！ 銀の指環なんか彼込みやがつて……てめえは何時までお邸の女中共といちやついてゐたいんだらう……」およしつてばさ、この助平！ 老人は小間使ひの口眞似をしながら、言葉を續けた。「俺はもうてめえの腹ん中ちゃんと見抜いてゐる

「だぞ、こののらくら奴……」

「なら、女房なんて一體どこがい、んだ？」

「女房は働き手だ。」とホーリは物をしげに云つた。「女房は男の片腕だかな。」

「なんだつておらに働き手が要るだよー」

「それ、それ、てめえは他人の權で角力をとるのが好きな奴だ。てめえ達のやうな人間の氣持ちは知れ切つてゐるわさ。」

「ふん、そんなら嫁貰つてくんろ、え？ どうした？ なに黙り込んでるだ？」

「いや、もう澤山だ、澤山だよ、口のへらねえ野郎だ。みる、旦那に御迷惑ぢやねえか。まあ、今に貰つてやるよ……もし旦那様、どうかお腹立ちのないやうに。御覽のとほりの孩兒で、まだねつから分別がついて居りませんでな。」

「フエーヂャは不足らしく頭をふつた……」

「ホーリは家かね？」といふ耳に覺えのある聲が、戸の外で聞こえた。——と、カリィメイチが家の中へ入つて来た。仲よしのホーリのために捕んで来た野毒を一束手に持つてゐる。老人は愛想よく出迎へた。私はびつくりしてカリィメイチをみつめた。正直なところ、私は百姓にこんな「細や

かな心づかひ」があらうとは、思ひもかけなかつたのである。

私はその日いつもより四時間ばかり遅れて、獵に出かけた。それから續けて三日間、私はホーリの家で暮らした。新しく知り合つたこの一家の人々が、私の興味を唆つたのである。どういふわけで彼等の信用を博したのか知らないが、みんな他意なく私と話をしてくれた。私はいゝ氣持ちで彼等の話を聞き、その言行を観察した。二人の友達は互ひに少しも似た所がなかつた。ホーリは堅實な實際家肌の人間で、政治的な頭を持つた合理派であつたが、カリィメイチはその反對に理想家で、浪漫派で、感激し易い空想家の部類に屬してゐた。ホーリは現實といふものを呑み込んでゐた。といふのは、立派に世帯も張るし、小金も溜めるし、主人や土地のお役人方ともうまくばつを合はせて行つたのである。カリィメイチは木の皮靴を穿いて歩く始末で、その日暮らしもやつとこさであつた。ホーリは大人數の家族を生み出して、それを従へ和合させる腕があつた。カリィメイチの方はいつか女房を持つたこともあるけれども、その女房を飾がつてばかりゐたので、子供もたうとら出來ずじまひであつた。ホーリはポルトゥイケン氏を、腹の底まで見抜いてゐたが、カリィメイチは主人の前で唯々諾々としてゐるばかりだつた。ホーリはカリィメイチを可愛がつて、保護者然とした態度をとつてゐるが、カリィメイチはホーリを愛してゐるばかりでなく、尊敬してゐるので

あつた。ホーリは餘り口齒を利かないで、にや／＼笑ひながら、何事も腹の中で含黙してゐた。カリーメイチは熱のある話しぶりをしたけれど、それかと云つて威勢のいゝ工場職人のやうに、圓轉自在な洒落を飛ばすわけでもない……けれども、カリーメイチはホーリでさへも認めらるゝな、生まれつきの長所を持つてゐた。例へば出血や、驚風や、氣狂ひを呪文で癒したり、蟲を下したりするし、蜜蜂を飼つても必ずうまく行つた。つまり當たり屋なのであつた。現に私の見てゐる目の前で、ホーリが新しく買った馬を既に引き入れてくれと頼んだ時、カリーメイチは人の好い勿體ぶつた様子をしながら、老懷疑家の頼みを實行した。カリーメイチは自然の方に親しんでゐたし、ホーリの方は人間や社會により多く接してゐた。カリーメイチは理窟をこね廻すのが嫌ひで、何事も盲目的に信する性質であつたが、ホーリは一段高い所に立つて、皮肉な眼で世の中を見下ろしてゐるほどであつた。彼は廣く見、廣く知つてゐたので、私などもいろ／＼彼に啓發されるところがあつた。例へば、毎年乾草刈りの前に一風變はつた恰好の小さな車が、村々に現はれるなどといふことも、彼の話から知つたのである。その車には、長上衣を着た男が乗り込んでゐて、草刈りの大鎌を賣るのである。現金ならば、一留二十五哥、紙幣ならば一留五十哥、附けて買へば紙幣で三留と、銀貨で一留なのである。百姓はみんな云ふまでもなく、附けて買ふものばかりである。二

三週間たつと、又この男が姿を現はして、資金の取り立てをする。百姓はつい燕麦を刈つたばかりなので、従つて拂ふ者もあるといふわけである。で、商人と一緒に居酒屋へ出かけて、そこで勘定を済ますことにしてゐる。地主の中には、自分で鎌を現金で仕込み、それを同じ値段で百姓たちにつけ賣りにしよう、とかういふ考へを起こした者もあるけれど、百姓は反つてそれを不平がつて、情氣かへつてしまつた位である。といふのは、大鎌の刃を爪で弾いてその音に耳を澄ましてみたり、両手に持つて引つくり返してみたり、油断のならない顔付きをした町の商人を掴まへて、「どうだ、お前、この鎌はどうも大したものぢやなさうだな？」などと、十べんも二十べんも訊ねたりする楽しみをふいにされてしまつたからである。小鎌を買ふ時にも、やはり同じやうな仕草がくり返されるのだが、たゞ違ふところは、女房どもが話に口を出すことで、餘りうるさ／＼に、どうかすると商人の方が仕方なしに女房どもを撲りつけて、懲らしめなければならぬこともある。しかし、女房どもが一番ひどい目に逢はされるのは、先づ次のやうな場合であらう。製紙工場へ材料を納める請負人が、ある郡では「魁」と呼ばれてゐる一種特別な連中に、ほろの買ひ集めを頼むのである。かういつた風車「魁」は、請負人から二百留ばかりの紙幣を預つて、獲物を集めに出かけてゆく。けれども、その名に負ふ高潔な鳥とは反對に、彼等は公然と大膽に飛びかゝつて行かうとしな

それどころか、「驚」どもは奸策と狡智を應用するのである。先づどこか村近くの繁みの中に車をかくしておいて、自分は通行人か、それともたゞののらくら者の風を装ひながら、背戸や裏口傳ひに廻つて歩く。女どもは彼等の近づいて来るのを感じて嗅ぎつけて、こつそりとその方へ忍んで行く。かうして、賣買の取り引きがまゝくさと、大急ぎに済まされてしまふ。僅かばかりの赤錢と引き替へに、女房は要らないほろ切ればかりでなく、亭主の褌衣や自分の腰巻までこの「驚」に賣り拂つてしまふことも、珍らしくないのである。近頃では自分で自分の麻、取り分け大麻を盗んで、同じやうな手順で賣り飛ばしてしまふのを、うまい儲けのやうに考へることが流行つて来た。——これなどは「驚」連中にとつて、商賣の發展でもあり、大した進歩でもある。その代はり、百姓はまた百姓で警戒を始め、「驚」が現はれたといふ噂をうすく聞き傳へたばかりで、ほんの少しでも怪しいと覗んだが最後、いきなり容赦なく匡正と豫防の方法を講ずるのであつた。じつさい彼等としては、癩に障るのも尤もである。麻を賣るのは男連の仕事であつて——又たしかに男連が賣つてゐる——それも町でなく——町へは自分でわざ／＼行かなければならないから、村廻りの小商人に賣るのである。この連中は秤を持つてゐないので、麻を四十廻摺んで、それを一ブード(四匁)と勘定する。——ところが、一掴みがどんなものか、露西亞人の掌がどんなに大きいか、殊に「一生懸命に

なつた時」どれだけ掘めるか、それは御想像に任せて置く！ 私は世上のことに疎く、田舎に来ると「とろくせえ」(このオリョール縣ではこんな云ひ方をする)人間ではあつたが、こんな話をふんだんに聞かされたものだ。けれども、ホーリはいつも自分で話をするばかりでなく、私にもいろいろなことを訊ねた。私が外國に行つたといふことを知ると、彼の好奇心は急にはつと燃え上がった……「カリメイチも負けてはゐなかつた。けれど、カリメイチの方はどちらかと云ふと、自然だとか、山だとか、瀧だとか、素晴らしい建物だとか、大きな町だとか、さういつた風の話に餘計感心するのであつた。ホーリの方は行政だとか、國家とかいふ問題に興味を持つてゐた。彼は何事も順序だつて訊ねる癖があつた。」で、どうですか、これは向かうでもこちらと同じ風でござえますか、それとも違つて居りますか……さあ、旦那、聞かせて下せえ——どうでござんすか……」「へー！ほんにまあ、魂消たもんだ！」とカリメイチは、私の話してゐる間中、こんな叫び聲を立てる。ホーリは無言のまま、濃い眉をひそめて、ほんの時々、「これはこつちいや、向かねえでござえますよ。だが、この方なら結構でがす。——それなら、ちやんと筋が通つて居りますでな、彼の質問を殘らず讀者に傳へすることは出来もしないし、また必要もないことである。けれど、私達の話の中から、恐らく讀者諸君が夢にも想像されないやうな一つの信念を、私は獲得したのである。——

それは他でもない、ビートル大帝は主として露西亞人である。しかもその改革の仕方が露西亞的なのである。露西亞人は自分の力と粘り強さを信じ切つてゐるので、自分で自分の身體を壊すのさへ敢へて辭さない。露西亞人は餘り自分の過去にこだはらないで、大膽に前の方を見つめてゐる。なんでも善いものだったら氣に入るし、道理に叶つたものならさつさと取り入れる。それがどんな所から出てゐるかといふことは——一向にお構ひなしである。露西亞人の常識は、好んで獨逸人の無味乾燥な理窟せめを嘲弄するのであるが、ホーリに云はせると、獨逸人は面白い國民で、彼等に物事を學ぶのは自分も賛成だといふのである。ホーリは、自分が特殊の立場にあつて、實際的に獨立の位置を占めてゐたおかげで、私と話をしている間にも、ほかの百姓なら金輪際いはないやうなこゝと——百姓の言葉をかりると、挽白にかけても押り出せないやうなことを、いろいろと聞かせてくれた。彼は全く自分の位置をちやんと了解してゐた。ホーリと喋つてゐる中に、私は初めて露西亞の百姓の、單純でしかも賢い言葉を聞いたのである。彼の知識は自己流のものであつたけれど、可成り廣かつた。そのくせ眼に一丁字もないのである。ところが、カリメイチは字が讀めた。「こののらくら者にはちやんと讀み書きが授かつたんです。」とホーリは云つた。「こいつの手にかゝると、筆跡までが一度も死んだことがないんで。」とところで、お前は自分の子供に讀み書きを習はしたかね？」ホーリは暫らく黙つてゐた。「フェーヂャは知つて居りますよ。」と、ほかのは？」「はかの奴等は知らねえでがす。」

「それはどうしたもんだね？」と問ひ返すと、老人は返事をしないで、話頭を轉じてしまつた。尤も彼は惻かな男ではあつたけれど、それでもいろんな偏見や我執を持つてゐた。例へば、女といふ者を心底から輕蔑して、機嫌のいゝ時には、女どもをからかつたり、慰みものにしたたりする。彼の女房は口やかましい婆さんで、一日煖爐から下りようとしないうで、のべつづくさ云つたり、惡態を吐いたりしてゐた。息子たちはてんで相手にしなかつたが、嫁どもはまるで祟り神さまのやうに恐れて、しつかり抑へつけられてゐた。よく露西亞の民謡に、姑が「お前はわしの息子でもなし家の主人とも云はれぬぞ！自分の女房をよう撲たぬ、若い女房をよう撲たぬ……」と唄つてゐるのも止むを得ぬ次第と云はなければならぬ。私は一度、嫁どもの肩を持つてやらうと考へて、ホーリの同情心を呼び覺まさうと試みた。けれども、彼は落ちつき拂つて、「且那樣、そんな……つまんねえことにかゝらふなんて、いゝ物好きでござえますよ——女どもは勝手に喧嘩させとくが、いゝんでさ……やつ等を引き分けると、却つていけねえでがす。それに何もいらぬお節介をして、自分の手を汚すたあござえませんよ。」と抗議を唱へたことである。どうかすると、この意地悪な婆さ

んが煙爐から這ひおりて、入口の廊下から番犬を呼び出し、「こい、こい、しろ、来い！」と云ひながら、その瘦せた背中を火かきで撲りつけるか、でなければ、庇の下に立つて、傍を通るもの一人一人を相手に、ホーリの云ひ草をかりると、「嘘み合ひ」を始める。それでも、自分の亭主は怖がつてゐたので、結局その云ひ付けで仕方なしに、また煙爐の上に引つ込んでしまふ。けれど、何かの拍子でポルトウイキン氏の話が出た時、ホーリとカリーメイチの二人が争論するのを傍で聞いていると格別面白かつた。「おい、ホーリ、旦那のことだけはとやかく云ふでねえ。」とカリーメイチが云つた。「そりやまたなんで、旦那がお前に長靴を拵らへてくれるわけでもあるめえし。」と、こちらはやりこめた。「えつ、長靴だつて……なんだつて、俺に長靴なんか要るだ？俺、百姓でねえか……」「ほら、俺だつてやつぱり百姓だけんど、みろ……」かう云ひながら、ホーリは片足を上げて、カリーメイチに靴を見せびらかした。恐らく、マンモスの皮でも造つたものだらう。「なあにお前と俺とは一つ話に行くもんけえ！」とカリーメイチは答へた。「ふむ、それでもせめて草靴代でもくれたらよさきうなもんだに。だつて、お前は旦那の獵のお伴をするだから、きつと草靴も一日に一足は穿き潰すだらうに。」「草靴代はちやんと下さるだよ。」「さうだ、去年十哥玉を頂戴したつけな。」カリーメイチは忌々しうに外方を向いてしまふ。すると、ホーリは面白さうに聲を立て

て笑ふ。彼の小さな眼はすっかり見えなくなつてしまふのであつた。

カリーメイチは中々い、聲で歌を唄ふし、バラライカも少しは弾けた。ホーリはぢつとそれに聞き入つてゐたが、やがて不意に首をかしげて、情けない聲で唄ひ出すのであつた。「あ、運命、わが運命！」といふ歌が殊に好きだつた。フェーチャはかういふ時には必ず機會を逃さないで、「おい父つあん、何をそんなにめそくやつてるんだい？」とからかふのである。けれども、ホーリは片手で頬杖をついて、眼を閉ぢたまゝ、自分の運命を訴へ続ける……しかし、その代はりほかの時には、この男ほどの活動家はいくらもあつた。いつも何か小まめに動き廻つて——荷車を直したり、塀に突つかひ棒をしたり、馬具を調べてみたりしてゐる。それかと云つて、彼は格別漢辭な方でもなかつた。あるとき私が注意したら、「家だつて人間の住居らしい匂ひがしなけりやなりませんわい。」といふ返事だつた。

「見るがい。」と私は云ひ返した。「カリーメイチの養蜂場なんか、實に綺麗になつてゐるよ。」「だつて綺麗にして置かなけりや、蜜蜂が居ついてくれませんでな、旦那様。」と彼は溜め息を吐きながら云つた。

「ときに、」あるとき彼は私にかう訊ねた。「旦那には御先祖代々の持ち村がお有りですがすかな？」

「あるよ。」「こゝから遠うござえますか?」「百露里ばかりだ。」それで、旦那様、あなたはその村に暮らしておいでになりますか?」「暮らしてゐるよ。」それでも主に鐵砲のお慰みで日を暮らしておいでなんでがせう?」「正直なところ、まあさうだな。」そりや結構でござえますよ、旦那様、まあせいぐ、松雞でも撃つて、お楽しみになるがよろしいけれど、でも、百姓頭は成る可くしよつちう替へたがよろしうがすよ。」

四日目の晩に、ポルトゥイキン氏が迎ひをよこした。私は、老人と別れるのが名残り惜しかつた。私はカリーメイチと一緒に馬車に乗つた。「ぢやさよなら、ホーリ、達者で暮らすがい。」と私は云つた……。「さよなら、フェーチャ。」「さよなら、旦那様、御免なされませ。どうぞ私どもをお忘れにならねえで。」馬車が動き出した。丁度、夕焼けがかつと燃え立つたばかりの頃だつた。「明日は上天気だな。」明るい空を眺めながら、私は云つた。「いんえ、雨が降りますだよ。」とカリーメイチが云ひ返した。「ほれ、あすこで家鴨どもがばちやく、水を浴びてるし、それに草がどぎつく匂ひますだから、馬車は藪の中へ乗り入つた。カリーメイチは馭者臺の上で躍り上がるやうに揺られながら、小聲に何か唄ひ出した。そして、夕焼け空を一心不亂に見つめてゐるのであつた……翌日、私はポルトゥイキン氏の手厚い款待の家を辭した。

エルモライと粉屋の女房

夕方、わたしは獵師のエルモライをつれて、「渡り」に出かけた……しかし、讀者の中には「渡り」といふのが何をさすのか、ご存じない方もあるかも知れない。一つ聞いて頂くとうしよう。

春、日の入る十五分ばかり前に、獵銃をかついで犬を連れずに、林の中へ分け入つて行くとする。どこか林の縁に恰好な場所を見つけて、あたりの様子を見まはし、ピストンを検め、仲間と目くばせする。さうしてゐる間に十五分くらゐ経つと、太陽は西に没してしまふ。けれど、林の中はまだ明るく、空気は清らかに澄み切つてゐる。小鳥どもはさもお喋りらしく囀り交はし、若草は楽しげにエメラルド色の輝きを放つ……その間ちつと待つてゐるのだ。林の中は次第に暗くなつて行く。夕焼けの赤々とした光りは、木々の根や幹をおもむろに沁つて、じり／＼と高く登つて行き、まだ殆ど眞裸かな下枝から、ちつと息を潜めて睡りに入りか、つてゐる梢に移つて行く……やがて、一ばん高い梢も動すんで、赤かつた空も蒼みが、つて来る。林の匂ひがいよ／＼強くなつて、生

い濕り気が微かに肌に感じられる。外から吹き込んで来た風も、身のまはりで鳴りをひそめる。小鳥どもも眠りにつくが——みんな一時ではなくて——それらの種類によつて順が違ふ。まづ花鶏が鳴りを静めると、やゝあつて紅鳥、ついで鶺鴒といふ順である。林の中は刻一刻と暗さを増して行く。木立ちは大きな黒い塊りに溶け合つて、蒼い空には早い星がおつくと光り始める。小鳥どもはすつかり腹しづまつた。たゞ紅襟鳥や小さな啄木鳥だけが、まだ睡さうな叫び聲を立ててゐる……やがて、それさへ聲を収めてしまふ。と、もう一度頭の上で田鼠の聲が高らかに響き渡つたかと思ふと、どこかで高麗鶯がもの悲しげな叫びを立てる。夜鶯も初めて囀りを一聲きかせる。獵人の心は期待の念に疼き始める。と、その時ふいに——これは獵銃家でなければ分からない氣持ちだが——不意に深いしゝまの中で、一種特別な「かあく」といふ啼き聲と、しゆうと唸るやうな響きがしたと思ふと、はしつこさうな翼を規則正しく搏つ音が聞こえて来る——やがて一羽の山鶯が長い嘴を優美な恰好に傾けながら、暗い白樺の蔭から、眞つすぐ銃口へ向けて、ふはり飛び出して来る。

つまりこれを「渡り場で待つ」といふのである。

そこで、私はエルモライと二人で「渡り」を狙ひに出かけた。しかし、諸君、勝手ながら、私は

まづエルモライをご紹介しなければならぬ。

一つかういふ男を想像して頂きたい。年の頃は四十五くらゐ、瘦せて背が高く、細長い鼻をして、額は狭く、目は灰いろで、髪は蓬々に亂れ、廣い唇には嘲るやうな表情を浮かべてゐる。この男は冬でも夏でも、狎逸風に仕立てた黄色つほい南京木綿の長上衣を着て歩いてゐるが、帯だけはロシヤ風にちやんと締めてゐるのである。青いだぶくの小ロシヤすほんを穿き、頭には羊皮のついた帽子を被つてゐる。これは身代限りをした地主が機嫌のいい時にくれたもので、帯には袋が二つ縛りつけてあつた——一つは前の方にあつて、火薬を入れるところと、ばら丸を入れるところと、巧く二つに捻ぢ分けられてゐるし、いま一つ後ろの方のは、獲物の鳥を入れるやうになつてゐる。綿は、どうやら自分の帽子から、無盡蔵に取り出してゐるらしかつた。そんな事をしないでも、獲物を賣つた金で樂に彈藥盒でも、獲物賣でも買へた筈なのであるが、彼はそんな買ひものの事など夢にも考へたことがない。そして、相變はらず自己流に鐵砲の裝填を續けて、巧みに危険を避けながら、火薬と散彈をこぼしたり混ぜ合はしたりする手際で、見る人を感嘆させるのであつた。彼の鐵砲は燧石つきの單身銃で、おまけにこつびどく「はね返す」悪い癖があつた。そのために、エルモライの右の頬は、いつも左の頬より腫れてゐた。どうしてこんな鐵砲で彈丸が當たるのやら、器

用な人間でもちよつと考へがつかないほどだつたが、とにかく當たる。彼はそのほかに、ワレトカといふセッター種の獵犬を飼つてゐたが、これが實に驚くべき代物しろものなのである。エルモライは一度もこの犬に餌をやつたことがない。「犬なんかには喰べものをくれて堪るもんけえ。」といふのが彼の理窟なのであつた。「おまけに、犬は剛巧な生き物だから、自分で勝手に食ひものを見つけてのだ。」また本當にその通りで、ワレトカは通りが、りの冷淡な人間でさへびつくりするほど、瘦せひよろけてゐたけれど、それでもちやんと生きてゐた。しかも長生きをしたものである。それどころか、慘憺たる境涯に置かれながらも、かつて一度も姿を晦ましたこともなければ、主人を振り棄てようなどといふ氣配けいすら見せたことがない。たゞ一度まだ若い時分、戀ひに憂き身をやつして、二日ばかり行くへ知れずになつたことがあるけれど、その馬鹿な了見もやがて消え失せた。ワレトカの最も著しい特色と云へば、この世のあらゆるものに對する不可解な無關心の態度である……もし、これが犬の話でなかつたら、私は「幻滅」といふ言葉を遣つたところである。彼は大抵いつも短い尾を尻の下に巻き込んで、撃めつ面をしたきり、時々ぶるぶるつと身慄ひするばかり、にっこりともしない（犬が微笑する、しかもなか／＼可愛い笑ひ方をする能を持つてゐるのは、周知の事實である）度はずれに見つともない顔をしてゐるので、邸奉公をしてゐる下男は、誰でも彼でも

暇な時など折さへあれば、この犬の纏まとを口汚くからかふのがお決まりになつてゐた。かうして、からかはれるばかりか、時には棒で殴られるやうな目にあつても、ワレトカは驚くばかり冷静な態度でそれに耐へて行つた。犬のみには限らない弱味のために、暖いうまさうな匂ひに誘はれて、さも空腹じさうな鼻づらを半ば開いた臺所の戸口へ突つ込みでもしようものなら、それこそ料理人どもに格別な慰みを提供するわけで、彼らは一齊に仕事の手を放し、どつとばかり罵りわめきながら、犬を追つかけて廻はすのである。獵に出たときは根氣のいゝのが特色で、感じも相當鋭敏であつた。けれどその代はり、もし何かの拍子で手傷を負つた鬼にでも追ひつかうものなら、大満悦で骨も残さず綺麗に食ひつくしてしまふ。それも、人に分かうと分かるまいとお構ひなしに、ありつたけの怪しげな方言で悪態をついてゐるエルモライを、いゝ加減の距離に敬遠して置いて、どこか青々とした灌木の涼しい小蔭でゆつくり平らけるのである。

37
エルモライは私の隣人の一人で、昔風の地主に抱へられてゐた。昔氣質の地主は「山禽類」を噴たまず、家禽一點ばりなのである。たゞ非常の場合、例へば誕生日だとか、命名日だとか、選挙日だとかいふ時には、昔氣質の地主にしつけられてゐる料理人達も、長嘴ながはなものの料理に取りかゝるのだが、自分の仕事がよく分からない時に、ロシヤ人が陥り易い興奮に驅られて、とてつもない味のつ

け方を工夫する。そこで、客人たちは大抵もの珍らしさうに、出された料理を丹念にじろく見まはすけれど、思ひきつて手をつけるものがないのである。エルモライは月に一度だけ松鷄まつどりに鷓鴣せうこを二羽づつ、お邸の臺所へ納めるやうに云ひつけられてゐたが、それでも自分の好きなところで、勝手なことをして暮らすお許しを得てゐるのであつた。彼は何の役にも立たない人間——私たちのオリ・ールの方言に従へば、「しがねえやつ」として、人から相手にされなくなつてゐた。火薬も散ば弾だまもひろん給與たまされなかつた。それは彼が自分の飼ひ犬に餌をやらなかつたのと、同じで、んなのである。エルモライはまことに奇妙な質たの人間であつた。空とぶ鳥のやうに暢氣で、かなり口數が多おほく、見たところはほんやりして、無器用らしいのである。非常な酒好きで、一ところ永く尻を落ちつけてゐることが出来ない。歩くときには足を小刻みにちよこ／＼やつて、體を左右にゆら／＼と搖するやうな恰好をする——それでゐて、ちよこ／＼ゆら／＼やりながら、一晝夜に五十露里くらゐは歩いてのける。この男は實に思ひ切つて風變はりな冒險をいろ／＼やつて來た。沼地の中や、木の上や、屋根の上や、橋の下で夜を明かしたこともあれば、屋根裏や、穴倉や、物置小屋へ閉ぢ籠められたことも一度や二度でなく、鐵砲や犬や、どうしてもなくてはならぬ着物までなくしたこともあり、こつびどく長い間ぶたれた事もある——けれど暫らくすると、ちやんと着物もつけ、鐵

砲も持ち、犬もつれて、家へ歸つて來るのであつた。大抵いつもかなりいゝご機嫌ではゐたけれど陽氣な人間といふわけには行かない。むしろ全體に變はりものといつたやうな感じである。エルモライはいゝ話し相手があれば、ひと喋りするのが好きな方で、殊に一ぱいやつてゐる時だと、尙更なのであつた。けれども、それも永いことではなく、すぐ立ち上がつて、どこかへ出かけて行きさうにする。「おい、この野郎、どこへ行くんだい？ 外はもうすつかり夜の闇ぢやないか。」「チャープリノへさ。」「何だつてチャープリノなんかへ出かけて行くんだ。十露里アルスライもある道をよら。」「あそこにあるソフロンで百姓のところで泊まらうと思つてな。」「なに、こゝで泊まつたらいいぢやないか。」「うんにや、そりやいけねえ。」「かう云つて、エルモライは例のワレットカをつれて、眞暗な夜道をもものともせず、藪をくゞり、水溜まりを涉りながら歩いて行く。そのくせ、百姓のソフロンは内へ入れてくれもしないかも知れない。それどころか、運が悪かつたら、「まともに暮らしてゐる人間に迷惑をかけるでねえ。」と云ふので、うんとどやしつける位が落ちかも知れないのである。その代はり、春の出水の時に魚を釣つたり、手探りで蝦を捕まへたり、勘で山の禽を捜し出したり、鶉をおびき寄せたり、「木精まごの笛」とか「郭公かくこうの飛び移り」とかいふ啼き聲の鶯を手に入れたりする業に

かけては、誰もエルモライに肩を並らべるものがなかつた……たゞ一つ出来ないのは、犬を仕込むことであつた。辛抱が足りないのである。彼には女房もあつた。週に一度くらゐは會ひに行つてゐた。女房は半分くづれかゝつたやくざ小屋を住まひとして、どうやらかうやらその日暮らしをしてゐた。明日が日満足に腹を膨らすことが出来るかどうか、前の日に分かつてゐたやうなことは嘗てない。およそ辛い悲しい運命を擔つてゐるのであつた。暢氣で人のいゝこのエルモライが、女房には亂暴な惨たらしい當たり方をして、自分の家では怖い氣むづかしい顔をしてゐた。——で、可哀さうな女房はどうして亭主の機嫌を取つたらいいか分からなくて、ちよつと睨まれてもおろ／＼しながら、なけなしの金で酒を買つて來たり、亭主が大威張りで煖爐の上にふんぞり返つて、昔嘶の豪傑のやうな軒をかいて寝入つてしまふと、まるで奴隸のやうに、自分の毛皮外套をかけてやつたりするのであつた。私自身も一再ならず、この男の氣むづかしい兇暴性がふと我しらず現はれるのに氣づく事がある。例へば、この男が手を負つた鳥の喉を、齒で食ひ切る時などの表情が好きでならなかつた。けれど、エルモライは決して一日以上わが家に足を止めようとしなかつた。そして、よその村へ行つては、また「椀帽子」になり濟ますのであつた。これは百露里四方に通つてゐる緯名でもあるし、彼自身もとき／＼自分のことをさう云つてゐた。どんな下つ端の下男でも、この浮

浪漢に對しては優越を感じてゐた——ことによつたら、つまりそのために、みんなが彼に隔てのない態度を見せるのかも知れない。百姓たちも初めのうちは面白がつて、まるで野の中で兎でも追ふやうに、彼を追ひ廻しては、ふんづかまへてゐたけれど、後では勝手にしろと放してやるのであつた。そして、この男が變はり者だといふことを知ると、もう構はずに打つちやつておくばかりか、時にはパンをやつたり、世間話を始めたりするほどであつた……つまり、この男を私は自分の獵師に雇つて、これと一緒にイスタ川の端にある大きな白樺の林へ、渡り鳥うちに出かけたのである。

ロシアの川の多くは、丁度あのヴォルガと同じやうに、一方の岸は山の感じで、いま一方は草地になつてゐる。イスタ川もそれと同様であつた。この小さな川は、恐ろしく氣紛れな蛇り方をして、蛇のやうに這ひ廻り、たゞの半露里もまづすぐに流れない。で、場所によると、急な丘の頂きから十露里ばかりも流れの見渡せるところがあつて、兩岸の堤や、池や、水車場や、楊の林に圍まれた菜園や、厚く繁つた果樹園などが指摘される。魚はイスタ川にはふんだんにゐて、とり分け鱒魚が多い（百姓たちは日盛りを狙つて、葦蔭に潜んでゐるところを手掴みにする）。小さな川鵜がちいちいと鳴きながら、冷たい透明な清水が方々に湧き出してゐる岩だらけの岸に沿うて飛びかはしてゐる。野鴨は池のまん中にひよつこり浮き上がつて、用心深くあたりを見廻し、蒼鷺は崖の下になつ

た入り江の蔭に、ほつねんと立つてゐる……わたし達は一時間ばかり渡り場に立つて、山鷓を四羽うちとめた後、まだ日の出前にもう一度運だめしをしようと思つて（渡り鳥うちには朝でも出かけるるので）、最寄りの水車場で夜を明かすことにした。私たちは森を出て、丘をくだつた。川は紺碧の波を立てて走つてゐた。空気が夜露の濡り氣を帯びて、しつとりと濃くなつて行く。私たちは門の戸を叩いた。犬どもが庭で一齊に吠え出した。「誰だね、そこにゐるのは？」といふしやがれた寝ほけ聲が聞こえた。「獵をする者なんだよ。泊めて貰ひたいんだが、通してくれないか。」返事がなかつた。「金は拂ふよ。」なら、行つて親方にさう云ひますべえ……しいつ、こん畜生めが……！……くたばつちまへ！」雇ひ男が家へ入つて行く物音が聞こえた。やがて間もなく門の傍へひつ返して云つた。「だめだあ、親方が通しちやなんねえて云ふだ。」「なぜいけないんだい？」「なに、心算だつて云ふだよ。お前さんたち獵人だもんで、ひよつと水車場を焼かやしねえかつてね。だつて、お前さんたち火薬や彈丸もつてゐるさるだべ。」「なんて馬鹿なことを！」「うちぢやそんなでなくても、一昨年水車場を焼かれただかな。牛買ひが泊まつてつてね、それで、何かの拍子に火い出しちまつただよ。」「そんなことを云つたつて、お前、おれたち外で寝るわけにゆかないぢやないか！」「そりやおらの知つたこんでねえ……！」と云ひ棄てて、長靴の音をこつ／＼立てながら、向かうへ行つてしまつた。

エルモライは、腹さん／＼悪態をついたが、結局、溜め息をつきながら、「村まで行きますべえ。」と云つた。けれど、村まではかれこれ二露里もあつた……「こゝで泊まることにしよう。」と私は云つた。「今夜は外でも暖いから、金を拂つたら粉屋も敷いて寝る薬くらゐ寄越すだらうよ。」エルモライは一も二もなく同意した。——わたし達は又もや戸を敲き始めた。「一體お前さんがた何ご用だね？」といふ雇ひ男の聲が聞こえた。「いけねえつたらいけねえだよ。」わたし達はこちらの望みを、よく納得のゆくやうに話してやつた。男は主人のところへ相談に行つたが、やがて二人づれで引つ返して来た。木戸がぎいと軋んで、粉屋が姿を現はした。背の高い、脂ぎつた顔をした男で、頸筋は牡牛のやうに逞ましく、大きな腹はまる／＼としてゐる。彼は私の申し出を承知してくれた。水車場から百歩ほど離れたところに、四方あけつ放しになつた差し掛け小屋があつた。そこへ私たちのために、麥藁や乾草が運ばれた。雇ひ男は川のほとりの草の上にサモワールを据ゑて、その前に膝みながら、せつせと煙突を吹きはじめ……炭火がかつかと熾つて来て、その若々しい顔を照らし出す。粉屋は女房を起こしに駈け出した。そして、たうとう自分の方からわたしに家の中で寝るやうにと云ひ出した。けれど、私はこのまゝ、外でゐる方が結局いゝ氣持ちだつた。粉屋の女房が牛

乳と、卵と、馬鈴薯と、パンを持って来てくれた。間もなくサモワールが沸いたので、わたし達は茶を飲みにかゝつた。川のおもてから水蒸気が立ち昇つて来た。風はなかつた。あたりでは水雞が啼きしきる。水車の邊で弱々しい物音が聞こえて来た。それは水斗から響がこぼれるのと、堤の水門から水が洩れる音なのである。私たちは少しばかり火をおこした。エルモライが熱灰の中で馬鈴薯を焼いてゐる間に、私はついうとうとして来た……しめやかな控へめの囁き聲に、私はふと目を醒ました。頭をもち上げて見ると、火の前に桶を逆さにして、その上に粉屋の女房が腰をかけ、私の獵師と話をしてゐるのであつた。私はすつと前から、この女の着ものや、身のこなしや、話しぶりなどで、これは百姓女でもなければ、町人の生まれでもなく、お邸に奉公してゐた女だなと察した。けれど、今はじめてその顔かたちを、しげく／＼と見たためたのである。年の頃は、見たところ三十前後らしかつた。瘠せた蒼白い顔は、水際だつて美しかつた昔の俤を残してゐる。わけても、大きな愁ひを含んだ目が私の心を惹いた。彼女は兩肘を膝に突いて、顔を掌の上に載せてゐた。エルモライは私に背中を向けて、木つばを火にくべ添へてゐた。

「ジェルトゥーヒナではまたはやりまじ黙夜が始まつてね。」と粉屋の女房は云つた。「教父のイヴンさまのところで、牝牛が二匹ともやられてしまつたのよ……大變なことだねえ！」

「ちや、お前さんとこの豚はどうだね？」エルモライは暫らく無言の後に、かう訊ねた。

「みんな無事だよ。」

「せめて仔豚の一匹くれえ、おらにくれたつてよかりさうなもんだに。」

粉屋の女房は暫らく黙つてゐたが、やがてほつと溜息をついた。

「お前さん誰と一緒に来たの？」

と彼女は訊いた。

「旦那だよ——コストマーロフの。」

エルモライは樵の枝を幾本か火にくべた。すると、枝は忽ち一齊にぱち／＼と音を立てて、濃い白い煙をまともに彼の顔へ吹きつけた。

「何だつてお前の亭主はおら達を家の中へ入れてくれなかつたんだい？」

「心配なのよ。」

「へん、あのどん腹野郎め……おい、フリーナ・チモフェーヴナ、いゝ子だから、おらに酒を一杯もつて来てくんねえかよ。」

粉屋の女房は立ち上がったと思ふと、闇の中に姿を消した。エルモライは小聲に鼻聲をうたひ出

可愛い女に通ひつめ

靴といふ靴がすり切れた。

フリーナは小さな瓶とコップを持って、引返して来た。エルモライは身を起こし、十字を切つて、ぐつと一息に飲み干した。「どうも堪えられねえ！」と彼は云ひ添へた。

粉屋の女房はまた桶に腰をおろした。

「ときに、どうだね、フリーナ・チモフェーヅナ、やつぱり按配が悪いのかね？」

「悪いんだよ。」

「どんな風に悪いんだね？」

「毎晩せきがひどくつてさ。」

「旦那はどうやらお腰みになつたやうだ。」暫らく黙つてゐたが、やがてエルモライが口を切つた。

「よう、フリーナ、お前賢者なんかにかゝるでねえだよ。却つて悪くなるばかりだから。」

「だから、かゝつてやしないぢやないか。」

「でも、おらんとこへは遊びに来てくんろよ。」

フリーナはさし俯向いた。

「さうしたら、おら嬢のやつなんか叩き出してしまふだ。」とエルモライは言葉を續けた。「ほんのこつたよ。」

「エルモライ・ペトロギーチ、お前さん旦那を起こした方がいゝわ。ご覧よ、馬鈴薯がからくに焼けてしまつたぢやないか。」

「勝手にぐうたら寝かしたときやいゝだよ。」と私の忠僕は無雑作に云つた。「さんぐん駈けすり廻つたもんだから、すつかり寝込んでしまつたのよ。」

私は乾草の上でもぞ／＼身を動かした。エルモライは立ち上がつて、私の傍へ寄つた。「馬鈴薯が出来ました。おあがんなして。」

私は差し掛け屋根の下から出て行つた。粉屋の女房は桶から立ち上がつて、歸つて行かうとした。私は彼女に話しかけた。

「お前さんところぢや、もう前からこの水車場をやつてるのかね？」

「三位一體の日で、丁度二年めになりました。」

「お前の亭主はどこ者だね？」

「フリーナは私の開ひがよく聞き取れなかつた。」

「お前の亭主はどこから出たんだい？」とエルモライは聲を高めて、もう一度くり返した。

「ペーレフのもんでございます。ペーレフの町人なので。」

「ちや、お前さんもやはりペーレフのものかね？」

「い、え、わたしは邸づとめの者で……お邸に勤めてをりました。」

「どの？」

「ズエルコフ様の。今では自由を頂いてをりますけれど。」

「ズエルコフといふと？」

「アレクサンドル・シールイチ。」

「ちや、お前は奥さんの小間使ひをしてやしなかつたかね？」

「まあ、どうしてご存じでいらつしやいますか？——はい、いたしてをりました。」

私は前にも増した好奇心と同情を抱きながら、フリーナの顔を眺めた。

「おれはお前のご主人を知つてゐるよ。」と私は言葉をつれた。

「ご存じでいらつしやいますか？」と彼女は小聲に答へて顔を伏せた。

なぜ私がこれほどの同情をもつてフリーナを眺めたか、その譯を讀者にお話ししなければならぬ。私はベアルブルタに滞在中、ふとした機會でズエルコフ氏と知り合ひになつた。彼はかなり重要な位置を占めて、博識な敏腕家として聞こえてゐた。その細君といふのはぶよぶよとした、感じ易くて涙つぽい、そのくせ意地の悪い——その邊にざらにあるやうな、厄介千萬な代物であつた。それに一人の息子があつたが、これまた本當のお坊つちやんで、甘やかされた薄のろなのである。當のズエルコフ氏の風采も餘りばつとしない方で、幅の廣い殆ど眞四角な顔の中から、鼠のやうな目が狡さうに覗いて、鼻の穴まる見えの大きな尖つた鼻が聳えてゐる。短く刈り込んだ胡麻鹽の髪が、鐵の深い額の上に針のやうに突つ立つて、薄い唇はのべつびく／＼動き、甘つたるい微笑を浮かべてゐるのであつた。ズエルコフ氏は大抵いつも兩足を踏み開き、肥えた手をポケットの中へ入れて立つてゐた。あるとき私はこの人と一緒に、馬車で郊外へ出かけたことがある。二人は色々話し込んだ。ズエルコフ氏は世故に長けた事務家らしく、私に「眞理の道」を諭してくれたものである。「差し出がましいやうで失禮ですが、」と彼はしまひに滔々と辯じ立てた。「あなたがた若い人とい

ふものは、すべて物事を行き当たりばつたり判断したり、議論したりなさる癖があります。あなた方は自分の祖國をよくご存じない。諸君にはロシアといふものが分かつてゐない——さうなんですよ！……あなた方はいつも獨逸の本ばかり讀んでいらつしやるからな。現に早い話が、今もあなたは、あれはあゝだ、これはかうだつて、つまり、その、何ですな、郵勤めをしてゐる百姓の事などかれこれ仰しやる……なに、よろしい、私は敢て議論しますまい。それはみんな結構としても、しかしですな、あなたは彼らをご存じない、彼らがどんな人間かといふことをご存じないです。(ここでズエルコフ氏は大きく鼻をかんで、喫き煙草をかいだ。) まあ、一例としてちよつとした逸話を持ち出さして頂ませう。恐らくあなたにも興味があるだらうと思ひますでな。(ズエルコフはえへんと咳拂ひをした。) あなたは私の家内がどんな人間かご存じの筈ですが、あれ以上やさしい女はちよつと類がないくらゐで、それにはご異存ないでせうな。あれについてゐる小間使ひなどの暮らして云つたら、それこそ天國が目の前に現はれたやうなものですからな……けれど、家内は原則として、亭主のある女を小間使ひに置かないことにしてゐるのです。それは全く困りますからな。子供が次ぎ次ぎと生まれるし、やれ何だ、それかんだと云ふことになるから、どうしたつて奥さまのご用をちやん／＼と足して行つて、細かい癖まで吞み込むなんて、それどころぢやなくなりますよ。

そんな事はもう上の空で、まるで念頭にありやしません。そりやもう人情から云つても、自然な話です。そこで、あるとき私たちは自分の持ち村へ、通りすがりに寄つたことがあります、あれは何年前でしたかなあ——出たらめを云つちや申し譯がない——さう、たしか十五年前でしたつて。ふと見ると、百姓頭のところを綺麗な女の子がゐるぢやありませんか。娘なんです。そのものごしにも、何ですよ、恐ろしくしとやかなところがあるんですよ。で、家内が私にさう云ふのです。「ねえ、ココー」といふのは、實のところ、家内が私のことをごんな風と呼んでゐますのでね。「この娘をベナルブルグへつれて行きませうよ。わたしすつかり氣に入つちやつたわ、ココー……」で私も「つれて行かうとも、結構だ。」と云つたわけです。百姓頭はもちろん手を突いて拜まないばかりです。こんな仕合はせがやつて來ようとは、思ひも寄らなかつたんでね、さうぢやありませんか……いや、勿論、娘は世間知らずだもんですから、いゝ加減おい／＼泣きましたよ。そりや全く、初めの間は無氣味なもんですからな。何しろ生まれ落ちた家を見すてるつてやつは……誰にしても……何も不思議なことはありません。しかし、娘は間もなく私たちに馴つて來ました。まづ最初女中部屋へ入れて、仕込ましてやりましたよ。勿論。ところで、あなたどうお思ひになります。娘は何でもびつくりするほどよく覺えましてな。家内などはもうすつかり惚れ込んでしまつて、特

別に目をかけてやるやうになり、遂には外のものをさし置いて、自分のお附きの小間使ひに取り立ててやつたのです……大したものぢやありませんか！……それに全くの話が、今まであれだけの小間使ひは家にゐませんでしたよ。絶対にゐませんでしたとも。まめくしくつて、おとなしくつて、素直で——何もかもすつかり条件が備はつてゐる。その代はり、正直なところ、家内もその娘を甘やかし過ぎたくらゐです。りゆうとした身なりをさせて、主人と同じものを喰へさせて、一緒にお茶を飲ませるといふ有様でしてね……いや、もう殆ど想像のほかでしたよ！ かういふ風にして、その娘は十年ばかりも家内の手もとで奉公しました。ところが、どうでせう、ある日とつぜんアリナが——その娘はアリナといふ名前だつたので——取り次ぎも頼まないで、私の書齋へ入つて来て——いきなり私の足もとへ身を投げ出すぢやありませんか……忌憚なく申しますが、私はかういふことが大嫌ひなのです。人間といふものは、決して自分の品位を忘れぢやありませんからね、さうぢやありませんか？」「一體なに用だ？」「旦那さま、アレクサンドル・シールイチ、お慈悲を願ひに参りました。」「なんだ？」「お嫁にやつて頂きたいのでございます。」「私は正直に申しますが、面くらつてしまひましたよ。」「ばか、奥さんに代はりの小間使ひがないのは、お前も知つてゐるぢやないか。」「わたくし今まで通り奥さまにご奉公申します。」「ばかな事を云ふな！ ばかな事を！

奥さんは亭主もちの小間使ひなんかお置きになりやせんよ。」「マラーニヤなら、わたくしの代はり勤まりますけど。」「指し圖がましいことはやめて貰はう！」「なんともお意のま、でございますが……」私は、正直なところ、ほうつとなつてしまひましたよ。烏滸がましいやゑですが、私はかういふ人間ですから、忘恩といふやつほど腹の立つことはありません。敢へて申しますが、これほど心から腹の立つことはありませんよ……今更らしく申し上げるまでもなく、私の家内がどんな人間かといふことは、あなたもよくご承知です。あれは現身の天使、言葉につくせぬ善良の權化でしてね……どんな悪人だつて、あれには手を下すことが出来まいと思はれるほどですかね。私はアリナを追ひ返しました。いづれその中に目が醒めるだらうと思ひましてな。何にしても、人間が忘恩などといふ悪徳を持つてゐることを、信じたくなかつたわけなのです。ところが、まあどうでせう？ 半年ばかりたつと、またぞろ私のところへやつて来て、同じことを頼むぢやありませんか。そのとき私は、正直、むつとして追つ拂つたばかりか、奥さんに云ひつけてやゑぞと、脅かしてやつたくらゐです。私は憤慨させられたほどなんで……けれど、どうでせう、又びつくりするやうな事が起こつたんです。暫らくたつてから、家内が私の部屋へ入つて來ましたが、見ると、目に涙を浮かべて、おそろしくわく／＼してゐるので、私は思はずぎよつとしました。「何ごとが持ち上がった

「たんだね？」「アリーナが……」あなたお分かりでせう……私はかういふ言葉を口にすることを恥ぢとします。「そんな事があつてよいものか……相手は誰だ？」「下男のペトルーシカです。」私はたうとう肝癪玉を破裂さしてしまつた。私はかういふ人間ですから……中途半端なことが大嫌ひでしてね……ペトルーシカ……は別に悪くない。罰を食はしてやつていゝが、しかし私の見込みでは、あいつが悪いのぢやないらしい。つまり、アリーナが……いや、どうも、いやはや、かうなつてから今さら何を云ふことがありませう？ 私は無論、即座にアリーナの髪の毛を切らせ、棒槌の粗末な麻の着物をきせて、田舎へ送り返してしまひました。家内は大切な小間使ひをなくした譯ですが、どうも致し方がない。何しろ、家の中の不しだらを差し置くわけに行きませんからな。腐つた指は一思ひに切つて棄てた方がいゝのです……さて、こゝで一つ判断を願ひたいもので……え、あなたは私の家内をさ存じなんです、實際あれは、あれは……全くもつて天使ですよ……だつて、あれはアリーナに愛着さへ持つてゐたのです……ところが、アリーナはそれを承知しながら、恥ぢを知らぬ振舞ひをしたんですからな……え？ 本當にどうです、ご意見は……え？ だが、これなんかもう、とやかく云ふがものはありません！ いづれにしても、ほかに仕様がなかつたんです。私一個に關しては、私はながい間、その娘の忘恩の行爲に、悲しみもすれば腹も立てまし

たよ。何と云つても……あゝいふ連中に心情とか感じとかいふものを求め得るのは間違つてゐます！ 狼はどんなに大切に育ててやつても、やつぱり森の方ばかり眺めてゐるものです……將來のいゝ教訓です！ しかし、私はたゞほんの例證としてあなたに……」

こゝでズエルコフ氏は言葉を云ひさしにして、頭をめぐらしてしまつた。そして、我ともなしに興奮する心を男々しくも抑へながら、尙もびつたりとマントに包まつた。

讀者も今こそは、わたしが同情の目をもつてアリーナを眺めたわけを、恐らく分かつて下すつたことと思ふ。

「お前はもうだいたい前から粉屋と一緒になつてゐるのかね？」

「二年になります。」

「それにしても、一たい旦那はお許しを出してくれたのかい？」

「お金で身抜きをしてくれましたので。」

「誰が？」

「サエーリイ・アレクセイイチが。」

「それは何者だね？」

「わたくしの配偶つないだりでございます。(エルモライは獨りでにやりと笑つた。)では、旦那さまがわたくしのことを、あなたにお話しになりましたのでせうか？」や、暫らく黙つてゐた後に、アリーナはかう云ひ足した。

私はこの問ひに何と答へていゝか分からなかつた。「アリーナ！」と遠くの方で粉屋の呼ぶ聲が聞こえた。彼女は立ち上がつて、行つてしまつた。

「あれの亭主といふのはいゝ人間かい？」と私はエルモライに訊ねた。

「別にどうといふこともねえですよ。」

「二人の間に子供はあるかね。」

「一人ありましたが、おつ死んでしまひました。」

「何かね、あの女が粉屋の氣に入つた、とでもいふのかね？ 身の代金は、大分出したのだからか？」

「知りません。あの女は讀み書きが出来るので、この商賣をしてると、そりや……なんでさあ……都合のいゝことがありますからね。だから、氣に入つたに違ちがえねえでさ。」

「ときに、お前はあの女と以前から知り合ひだつたのかい？」

「さうなんで。もとあれが奉公してゐた時分に、そのお邸へよく出入りしたものでね。お邸といふのは、こゝから餘り遠くねえでがす。」

「ベートルーシカといふ下男も知つてゐるかい？」

「ベートルム・ヴシーリッチですかね？ そりやもう知つて居りますとも。」

「いまだこゝにゐるんだね？」

「兵隊にやられやしたよ。」

私たちは暫らく口を噤んでゐた。

「どうもあの女は身體がよくないらしいね？」たうとう私はエルモライにかう訊ねた。

「身體のいゝわけがねえでさ……ところで、明日はどうやら、いゝ獵うまがありさうでござえますね。」

旦那もそろくお腹はらみになつたら？」

野鴨の一群れが口笛のやうな鳴き聲を立てながら、私たちの頭の上を飛び過ぎたが、やがて程遠からぬ河へ下りる氣配が、私たちの耳に入つた。もうすつかり暗くなつて、底冷えがするやうになつて來た。森の中では鶯うぐいすが朗かに啼つてゐる。私たちは乾草の中にもぐり込んで、そのまゝ、眠りに

落ちた。

マリーナの泉

八月の初めには、よく堪らない暑さが続く。その頃は十二時から三時頃までといふもの、どんなに勇敢で熱心な人でも、獵などする元氣がなくなるし、どんなに忠實な犬でも、「銃獵家の拍車の掃除」を始める。といふのは、惱まし氣に眼を細め、仰山らしく舌を吐き出しながら、のろ／＼と御主人の後をついて廻るのである。主人に叱られても、その應へには意氣地なく尾を振つて、顔には當惑らしい表情を浮かべるばかりで、一向に前へ出ようとしない。私は何かの拍子で、丁度こんな日に獵に出たことがある。私はほんのちよつとでも、どこか物蔭に身を横たへたいといふ誘惑を、長いあひだ追ひ退け追ひ退けしてゐた。疲れるといふことを知らない私の犬は、何時までも繁みの間を駆けずり廻つてゐたが、自分でもこの熱に浮かされたやうな大活躍が、結局大した効果もなしに終るといふことを、承知してゐるやうな風つきだつた。けれど、息もつまりさうなむし暑さに、私もたうとう最後の氣力と技能を貯へておかねばならぬ、といふことを考へさせられてしまつた。寛大に私のものを愛讀して下さる方々には、もう近附きになつてゐるイスタの小川まで、私はやつ

とのこととで辿りついた。切り岸を下りて、黄色い濡つた砂地を踏みながら、この界限で一般に「マリーナの泉」といふ名で知られてゐる清水の方へ向かつて行つた。この清水は川岸の割れ目から湧き出して、それから段々と、小さいけれど深い谷へ流れて行き、そこから二十歩ばかり隔てた所で、楽しいなお喋りめく音を立てながら川へ落ち込んでゐるのであつた。谷を挟んでゐる兩側の傾斜には若い樹の林が繁つて、泉のほとりには短い天鵞絨のやうな若草が青々してゐた。太陽の光線は殆ど朝から晩まで冷たい銀色の水にさし込むことがない。私は泉のほとりまで辿りついた。草の上には、通りが、りの百姓がみんなのために残しておいた木の皮造りの柄杓が置いてある。私は腹いっぱい水を飲んで、木蔭に身を横たへ、四邊を見廻した。泉の水が流れ落ちて、自然に出来上がった入江は、絶えず一面に小波を立ててゐたが、そこに二人の老人が、私に背を向けて坐つてゐた。一人は可成り肉付きがよく、背の高い男で、小ざつぱりした暗緑色の長上衣を着こみ、目庇つきの柔かい帽子を被つて、釣りを垂れてゐた。いま一人は瘦せた小柄な男で、補布の當たつたバラ織の上着を纏ひ、帽子も被らずに、み／＼の入つた壺を膝に抱へたまゝ、とき／＼胡麻鹽頭を撫でてゐる様子は、日光を遮らうとでもしてゐるやうな具合であつた。私はこの男をつく／＼と眺めてゐる中に、シュミーヒノ村のステューブシカだと氣が附いた。こゝで讀者の許しを得て、この人物を紹介

介させて貰ふことにする。

私の持村から三四露里離れたところに、シュミーヒノといふ大きな村がある。そこにはゴジマ、ダミアン兩聖者のために建てられた、石造りの教會が聳えてゐる。この教會の眞向かひには、會て宏壯な地主邸が輪奐の美を誇つてゐた。邸の周りには様々な建増しの棟や、下女下男の住居や、仕事場や、厩や、植木の霧除け庇や、馬車小屋や、湯殿や、臨時の炊事場や、來客と支配人たちの用に當てられた離れや、花卉栽培用の溫室や、下々のために設けられた鞆や、その他多少とも要り用な建物が取り巻いてゐた。この邸には、金持ちの地主が住んでゐて、萬事きまつた仕來り通りに暮らしてゐたが——或る時、一朝にして祝融氏に見舞はれ、これだけの大身上もすつかり灰になつてしまつた。地主一家は外の所に巢を求めて、屋敷は荒廢してしまつた。廣い焼け跡は菜園となつて、ところ／＼に元の土臺の煉瓦が山のやうに積み上げられてゐた。焼け残りの丸太を利用して粗末な小屋を組み、十年ばかり前にゴシック風の涼亭を建てるために買ひ込んであつた絆板で屋根を葺いた。そして、そこには庭師のミトロファンと女房のアクシーニヤ、それに七人の子供が住はされることになつた。ミトロファンは、百五十露里も離れた主人のところへ、食糧の野菜類を届ける役を云ひつかつた。アクシーニヤはチロール種の牝牛の世話を命ぜられたが、この牝牛はモスクワ

で大金を出して買はれたのだけれど、残念ながらまるで生産能力がなかつたので、手に入れて以來一滴の乳も出さなかつた。同じくこのアクシーニヤは、この一羽だけ生き残つた「お邸の鳥」となつてゐる、冠毛のある灰色の家鴨の世話も任された。子供らはまだ年端が行かぬといふので、何も決まつた仕事を當てがはれなかつた。そのために子供らはすつかり怠け者になり濟ました。私もこの庭師のところへ二度ばかり泊まつたこともあるし、通りすがりに胡瓜を買つたこともあるが、これはどういふわけか、夏でさへも無暗に大きく、いやな水っぽい味がして、皮が黄色くて厚ほつたいのが特色であつた。この男のところへ、私は初めてスチョーブシカに逢つたのである。ミトロファンの一家と、目つかちの兵隊の女房のお情けで、ちつほけな部屋において貰つてゐる、年寄で驢のゲラーシムといふ教會の世話役を除けると、シュミーヒノには一人もお邸勤めの者が残つてゐなかつた。といふのは、私が讀者に紹介しようと思つてゐるスチョーブシカは、およそ人間扱ひにすることも出来なかつたし、邸勤めの男と見做すことなどは、尙更もつての外の話だつたからである。

すべて人間といふものは、たとへどんなものでも社會上の位置を持ち、多少の縁戚とか知人とかを持つてゐるものである。どんな人間でも邸に勤めてゐる者なら、よしんば給金を貰はないまでも、

少くとも所謂「扶持米」くらゐは頂戴する筈である。ところが、スチョーブシカはまるつきりなんの補助も受けないし、誰ひとり縁邊に當たる者もなく、彼といふ人間の存在さへ知つてゐる者がなかつた。この男には過去といふものすらなかつた。彼のことは誰の噂にも上らないし、戸籍にも入つてゐるかどうかが覺束ない程である。かつてどこかの従僕を勤めてゐたとかいふ曖昧な噂はあつたけれど、彼が何者で何處から來たのか、誰の倅か、どうしてシユミーロノの農奴になつたのか、どういふ譯でいつの昔からか始終着てゐるブハラ織の長上衣カフタを手に入れたのか、どこで暮らしてゐるのか、何で口すぎしてゐるのか——これ等のことについては、誰もてんで見當がつかなかつたし、また正直な話、誰もそんな問題に興味を持つ者がなかつた。ありとあらゆる下女下男の系圖を、四代まで溯つて知り抜いてゐるトロフイムイチ爺さんでさへ、たつた一度だけこんな話をしたばかりである。それによると、なんでもスチェベンは、亡くなつた先代の領主で旅團長を勤めてゐたアレクセイ・ロマーヌイチが、戦争から凱旋のとき、荷物車に乗せて連れて歸つた或る土耳其女の親類に當たるとのことであつた。よく祭りの日など、露西亞の舊い習慣で、村中の百姓にものを恵んだり、蕎麥饅頭や綠酒を御馳走する日——かういふ日にさへもスチョーブシカは庭に並べられた食卓や、酒樽の傍へ姿を見せないし、御主人たちにお辭儀をしたり、その手に近づいて接吻するや

うなこともなく、御主人の見てゐる前で、番頭の脂切つた手でなみ／＼と注がれた盃を取り、御主人の健康を祝しながら、一息に飲むといふこともなかつた。たゞ時たま、親切氣のある人間が通りすがりにこの可哀さうな男を見て、食べさしの饅頭を分けてやるくらゐなものであつた。復活祭の當日には、彼も人から接吻して貰つたけれど、當人は油じみた袖口を折り返して、後のかくしから赤く染めた卵を取り出し、息をはずませて眼をばちくりさせながら、若主人夫婦や大奥様に捧げるやうなこともしなかつた。夏は島小屋の後ろにある小さな小屋の中に暮らし、冬は湯殿の脱衣場に寝起きして、凍ての厳しい日には、乾草小屋で夜を明かすのであつた。人々は彼を見馴れて、時には足蹴にすることさへもあつたけれど、誰ひとり彼に言葉をかけるものはなかつた。また彼自身も生まれ落ちてからこの方、一度も口を開いたことがないかと思はれるほどであつた。例の火事の後で、この風來者は庭師のミトロフアの所へ身を寄せた。つまり、オリョール縣の言葉で云へば、「垂れこんだ」のである。庭師は一切構はないでおいた。俺の所で暮らすがいゝとも云はないし、また別に追ひ立てようともしなかつた。それにスチョーブシカも、庭師の家に寝起きしてゐたのではない。つまり菜園を棲家として、その邊をうろ／＼してゐたのである。彼は歩くのにも動くのにも、まるで音を立てないし、嘔みや咳をする時には、幾らかおつかな吃驚で、手で口に蓋をする。

何時も蟻のやうにこつそりと小まめに働いたり、動き廻つたりしてゐた。それといふのも、みんな食ふため、たゞ／＼食ふためなのであつた。それもその筈、もし朝から晩まで口すぎの心配をしなかつたら、我がスチョーブシカは干乾しになつたに違ひない。どうしたら夕方までに腹を膨らすことが出来るか、それが朝の中に分らないといふのも、まことに情けない話である！ スチョーブシカは垣根の下に坐つて、大根を嚼つたり、人蔘をしやぶつたり、泥だらけな玉菜の玉を剥んだりしてゐるかと思ふと、時には水を入れた桶を、うん／＼唸りながらどこかへ提けて行つてゐる。それかと思へば、素焼きの壺の下に覺束ない火を起こして、懐ろから何か黒いものを取り出して、壺の中へ抛りこんでゐることもある。また時には、自分の小屋の中で、木切れで釘をこつ／＼打ちつけながら、パンをのせる棚を作つてゐることもある。すべてかういふことを、まるで人目を盗むやうに、黙々とやつてゐるので、誰かちよつとも見ようものなら、すぐにかくれてしまふのである。かと思へば、急に二日ばかり姿を晦ますことがあるけれど、彼のゐないことに氣のつく者などは、無論だれもないのである……ところが、又ふと見ると、何時の間にかやら姿を現はして、どこか垣根の下あたりに五徳を据ゑて、こつそりと木つばをくべてゐる。彼の顔は小さくて、眼は黄がかつた色合ひを帯び、髪は眉の邊まで被さり、鼻は尖つて、耳は蝙蝠のやうに大きく透きとほつてゐる。

頭鬚はまるで二週間ばかり前に剃り落としたと云つたあんばいで、それより長くもなければ、短くもならない。このスチョーブシカが、もう一人の老人と一緒に、イスタ川のほとりにゐるところを、私は圖らず見付けたのである。

私はその傍によつて挨拶をすると、竝らんで腰を下ろした。スチョーブシカの件れも、やはり私の知り合ひだといふことが分かつた。これはもと、ビョートル・イリッチ***伯爵の農奴で、いまは自由な身體にしてもらつてゐるマハイロ・サゼーリエフといふ男で、綽名を「鷲」といふ。この男の瘦起きしてゐるところは、私が可成り始終足を止める旅籠屋の亭主で、肺病を患つてゐるボルボフ出の町人の所であつた。オリョール街道を往來する若い役人や、その他の閑人連中は（縞の羽毛布圍にぬく／＼と埋まつてゐる商人などは、そんなことに用はないのだが）——今でもトロイツキイの大村から餘り遠からぬ所に、すつかり荒れ果てて、屋根も崩れ落ち、窓といふ窓を釘付けにした大きな木造の二階屋が、街道へのり出すやうに聳えてゐるのを見るであらう。よく晴れた眞昼の太陽の輝やかしい光りを浴びたこの廢屋ほど物哀れな姿は、想像すること出来なほどである。かつてこゝには客好きで有名な、前時代の裕福な貴族で、ビョートル・イリッチ伯爵が住まつてゐた。よく縣内の地主たちが残らずこの家へ集まつて、邸で養成した音楽隊の奏する、耳を聳する

ばかりの樂の音や、打ち上げ花火や仕掛け花火の音につれて、思ふ存分踊り戯れたものである。で今この荒れ果てた地主郎の傍を通りかゝりながら、過ぎし昔や、華やかなりし青春時代を追想して、溜め息を漏らす老婆なども、恐らく一人や二人ではないであらう。伯爵はいつまでも饗宴を續けて、卑屈なくらゐる慇懃な客の群がる中を、愛想よく微笑みながら、永い間歩き廻つたものである。けれど彼の財産は、不幸にして、一生淫慾を盡すのには足りなかつた。身代を根こそぎ棒にふつてしまつて、伯爵は就職を探しにベテルブルグに出かけて行つたが、話が決まるのを待たないで、宿の一室で死んでしまつた。霧はこの人の従僕をしてゐたが、まだ伯爵の存命中に自由な身にしてもらつた。それは整つた氣持のいい、顔をしてゐる、七十ばかりの老人であつた。彼は殆ど絶え間なく微笑を浮かべてゐたが、今ではエカチェリーナ女帝時代の人のみが見せるやうな微笑、つまり優しくて、しかも氣品のある笑ひ方なのである。話をする時には、唇をゆつくり開いたり閉ぢたりして、眼を優しく細め、言葉を少し鼻にかけて發音する。鼻をかんだり煙草を喫いだりするの、やはり何か大事なこともするやうに、同じく悠々と急がずにやるのである。

「おい、どうだ、ミハイロ・サーリッチ。」と私はきり出した。「魚は大分釣れたかい？」
「まあ、ちよつと魚籠の中を覗いて御覽なせえまし。鱈が二尾と、もろこが五尾ばかり取れまして

よ……スチョーブシカ、お目にかけて。」

スチョ、ブシカは私の方へ魚籠を突きつけた。

「お前どんな具合にやつて行つてゐるね、スチェバン？」と私は訊ねた。

「へ……へ……へ……べつに……別に變はつたこともござえませんが、旦那、ほつ／＼やつて居りますよ。」まるで尊貴といふ重いものを舌で轉がして、もゐるやうに、スチェバンは吃り吃り答へた。

「ところで、ミトロファンも達者かね？」

「達者でござえますとも、そ……そりやもう、旦那。」

可哀想な男はそつほをひいてしまつた。

「だが、どうも食ひつきが悪いぞ。」と霧は云ひ出した。「やけに暑いもんだで、魚の奴みんな萩の根にもぐりこんぢまつて、晝寝をしてやがるんだから……み、すをつけてくれよ、スチョーバ(スチョーブシカはみ、すを一匹取り出して、掌にのせると、二度ばかり叩きつけて、針につけ、ぶつと唾を吹きかけて、霧に渡した。)有難うよ、スチョーバ……ところで旦那様、」と彼は私の方に振り向きながら、言葉を續けた。「獵の方は相變はらずやつていらつしやいますか？」

「御覽の通りだ。」

「成る程……ときに、あなたの連れてゐらつしやる犬はなんでござえますね？ 英吉利種か、それともフリヤンド種とでも云ひますので？」

老人は折さへあれば、自分の知識をひけらかすのが好きであつた。私達はちやんと人並みの暮らしをして來ましたからね！ とでもいつたやうな氣持ちなので。

「何種か知らないけれど、良い犬だよ。」

「成る程……いつも犬を連れてお歩きになりますかね？」

「二番ひばかり飼つてゐるよ。」

霧はにやりと笑つて、首を振つた。

「そりやさうでござえますよ。犬が好きで堪らないといふ人があるかと思へば、中には只でも厭だといふ人もありますからな。私なんぞは一向なにも分かりませんが、こんな風に考へてみますよ。犬なんてものは、云つてみりや、お體裁に飼つて置くべきものなんで……何も彼もきちんとしてゐるのが本當で、馬もきちんとしてゐなければ、獵犬係りもきちんと揃つてゐなければならぬ。何も彼もさういつたあんばいでござえますよ。お瘦なりなされた伯爵さまは——何と

ぞ天国に安らはせ給へ——實のところ、生まれついでに獵好きではいらつしやいませんでしたが、それでも犬はちやんと飼つてお置きになつて、年に一度は獵にお出かけになつたものでございませぬ。金モールの附いた赤い長上衣を着た獵犬係りが、お庭に集まつて角笛を吹き立てると、御前様がお出ましになる。そこへ馬が引いて來られて、御前様がその背にお乗りになると、勢子の頭がおみ足を取つて盤に通し、自分の頭から帽子を取つて、その上に手綱をのせ、恭々しく差し出すのでございませぬ。すると、御前は長い鞭をこんな按配式に、ぱちりとお鳴らしになる。それを合圖に、獵犬係りがわつと聲を上げながら、お屋敷から繰り出して行く。お附きの勢子が伯爵様の後から馬を進めながら、御前様ご寵愛の犬を二匹、絹の綱で引き立てて、こんな風に油断なく眼を配つてゐる……このお附きの勢子といふのが、コザック鞍に高々と跨がつて、頬つべたを眞赤にしながら、大きな目玉をぎよ／＼動かしてゐるのでございませぬ……それに、こんな時はお客だつて、云ふまでもなく大勢集まつて見えまして、お遊びごとにしろ、お欺待にしろ、すべて式の如くに……あつ切りやがつた、こん畜生め！」彼は不意に釣竿をぐつとしゃくつて、かう云ひ添へた。

「どうだね、伯爵は一時大したおぼらしをしてゐられたさうぢやないか？」と私は訊ねた。

老人はみ、すにぶつと唾を吹かかけて、また絲を垂れた。

「そりや、華族の中でもばりくの方でしたからね、當り前の話でございますよ。よくペテルブルグあたりから、その、一流の貴族がたが訪ねて見えましたよ。水色の綬をかけて、食卓に向かつて召し上がつてゐる姿を、始終お見受けしたもので。御前様も何がさてお客様を欺待すことにかけては名人でしてな、よく私をお呼び寄せになつて、「霧、わしは明日までに生きた鰻鮫が要るのだが、届けるやうに云ひ付けてくれ、分かつたか？」と仰しやる。「長りました、御前様。」と私はお受けするわけで。金糸で繡ひとりした上着だとか、釐だとか、杖だとか、香水だとか、飛び切り上等のオーデコロンだとか、煙草入れたとか、こんなに大きな繪だとかいふものを、巴里からちきくにお取り寄せになるのでございます。宴會でもお開きになるといふと——いや、もうそれこそえらい騒ぎでしてな！ 花火をほんく上げるやら、三頭馬車を飛ばすやら、終ひには大砲までぶつ放すのでございますよ。樂隊だけでも年ぢゆう四十人からの人数が、ちやんと頭数を揃へてゐる始末、その指圖をする役目に獨逸人を抱へてをられました、この獨逸人め、すつかり増長しやがつて、御主人がたと同じ卓で食事がしたいなどと云ひ出したので、御前様も到頭一昨日來いと云つておん出しておしまひになりました。うちの樂隊連中はあんな奴がゐなくなつて自分のする事はちやんと辨へてゐる、とかう仰しやいましたな。何と云つても、地主様の勢ひには吐ひません。そこ

で、やがて踊りが始まると——それこそ夜が明けるまで踊り抜く。曲は主に蘇蘭曲とかなんとか云ふものでございましたよ……よう……よう……よう……奴さん掛かりやがつたぞ！（老人は小さな罐を水の中から引き上げた。）おい、どうだ、スチヨーバー？——さて、御前様は本當に殿様らしいお方でした。「老人はまた糸を垂れながら、言葉を續けた。「それにお心も至つてお優しい方でな、どうかして下々の者を殴りつけなさるやうなことがあつても、すぐにけろりと忘れてお了ひなさる。たゞ一つ困つたことには、側女を多勢お置きになつて居られました。いやはや、その側女どもときたら、お話にも何にもなつたもんぢやない！ つまりそいつ等が伯爵家の身代を叩き上げてしまつたのでございますよ。みんな大抵下々の方からお取り立てになつたのだから、それだけでも有難いと思ひさうなものだのに、中々どうして——奴等は歐羅巴中でも一番上等なものを貰はなけりや、承知することぢやない！ 尤も、一方から見りや、何分上つ方のことだから、御自分の好きな事をしてお暮らしになるのも一向さし支へない話だけれど……それがといつて、身上を潰してしまふつて法はありません。中でも一人アクリーナといふのが居りましたつけ。今ではもう亡くなつてしまひましたが——神よ、何とぞ天國を與へ給へ！——たゞの百姓上がりで、シートラ村の小頭の娘のくせに、手のつけられないやうな性わる女で、よく伯爵様の横面を引つぱたくやうな眞似をしやが

るんで！ すつかり御前様をまるめこんでしまつたのでございます。私の甥なども、その女の新しい着物にチョコロトをこぼしたといつて、頭をくりくり坊主にされた上、兵隊にほいやられてしまいました……しかも、そんな目に遭つたのは私の甥ばかりぢやありません。さやう……けれどなんと云つても、あの頃は結構な御時勢でございましたよ！」老人は深い溜息をつきながら、かう云ひ添へると、そのまゝうなだれて、口を噤んだ。

「話の様子では、お前の旦那は喧ましい方だつたらしいね？」暫らく無言の後、私は切り出した。

「あの時分はすべてがさういふ風でしたからね、旦那様。」と老人は頭を一振りして云ひ返した。

「今ぢやもうそんなことはしなくなつたよ。」相手から眼を放さないで、私はかう注意した。

彼は私をちらと横目に見た。

「そりやもう、當節の方がいゝに決まつてゐますよ。」と彼は呟いて、針を遠くの方へ投げた。

私たちは木蔭に坐つてみたけれど、その木蔭でさへも息苦しかった。熱し切つた重苦しい空気はまるで死んだもののやうにちつと澱んでゐるのであつた。顔は火のやうに燃えて、風のそよぎを憧れ求めたけれど、その風がまるでなかつた。太陽は黒ずんで見えるほど、蒼い空から容赦なく照りつけるのであつた。すぐ目の前の向かう岸には、燕麥の畑が黄色くひろかつて、ところどころに苦蓬

が頭を覗けてゐたが、燕麥の穂は一つとしてそよとも動かない。少し下手の方には、一匹の百姓馬が膝まで水に浸しながら、川の中にちつと立つて、濡れた尻尾を大儀さうに振つてゐる。水面に垂れかゝつてゐる藪の下で、時々大きな魚が浮かみ上がつて、ぶく／＼と泡を立てるかと思ふと、微かな小波を後に残して、また靜かに底深く沈んで行つた。蟋どもが赤茶けた色をした葉の中で、かまびすしく鳴き立ててゐる。鶉は何だか澁々といつた風な啼き聲をたて、禿鷹は野の上をふはふはと舞ひながら、のべつ尾羽を扇のやうに擴げ、翼を慌た／＼しく搏つて、一つ所にちつと靜止する。わたしたちは暑さにぐつたりしてしまつて、身動きもせず坐つてゐた。不意に後ろの谷で物音がして、誰やら泉の方へおりて來た、私は振り返つて見た。それは年のころ五十ばかりの埃だらけな百姓で、ルバーシカを着て、木の皮鞋を穿き、しなの木皮で纏んだ籠と百姓外套を肩に擔いでゐた。泉に近寄ると、食べるやうにがぶ／＼と水を飲み、さてやをら身を起こした。

「やあ、ヴラスぢやねえか？」と霧は男の顔をつく／＼と見て叫んだ。「ご機嫌よう。一體どこから舞ひ戻つたんだ？」

「ご機嫌よう、ミハイロ・サエーリツチ。」と百姓は、私たちの傍へやつて來ながら、かう云つた。

「遠方からだよ。」

「どこをうろくしてゐたんだ？」と霧は訊ねた。

「莫斯科まで行つて来たんだ、旦那のそこへよ。」

「何しに？」

「お願えごとがあつて行つたのよ。」

「なんのお願えだね？」

「年貢を負けて貰ふか、旦那の畑で使つて貰ふか、ほかの土地へやつて貰ふか、何とかして貰ふべえと思つてよ……悴がおつ死んだもんだから——おら一人ぢやもう手に合はねえだ。」

「お前の悴が死んだつてか？」

「おつ死んだよ。今ぢやもう故人だが、」百姓は暫らく黙り込んでゐたが、やがてかう云ひ足した。

「モスタワで辻馬車稼業をやつて暮らしてゐたのでな、正直な話が、おらに代はつて年貢を納めてくれたもんだよ。」

「一體、お前はいま年貢の約束になつてゐるのかい？」

「年貢の約束よ。」

「ところで、旦那の首尾はどうだつた？」

「どうもかうもねえ！ 玄關拂ひだあ。何だつて、俺のところへ来るなんて、出過ぎた眞似をする。そのために支配人ちゆうものがあるぢやないか、まづ一番に支配人に相談すべきだ……それにほかの土地なんて、どこに變はらせる所がある？ 貴様はそれより、まづ未納金ををさめるのが順だ。」

「ふん、それでお前は何かね、すこ〜後戻りかね？」

「後戻りよ。亡くなつた悴が何か金目のものでも残しちやめねえか、問ひ合はせでもしべえと思つたけど、何も取り止めたことが分かんなかつたよ。おら悴の親方に、實はフィリップの親父ですが、と云つただけんど、先方ぢや、そんなことが本當かどうか分かつたもんぢやねえ。それにお前の悴は何一つ残して行きやしなかつた。それどころか、俺に借金があつたくれえだ。」とかういふ返事なんで、仕方がねえ、そのまゝ後戻りよ。」

百姓はまるで他人事のやうに、にこ〜しながら、この話をして聞かせたが、その小さなくしやしくしやした目には一滴の涙が浮かんで、唇はびく〜引つ吊つてゐた。

「それで、これからどうする、家へ歸るのかね？」

「でなくつて、どこへ行くとこがある？ 知れたことよ、家に歸るのさ、嫌も今ごろは腹へこに

なつて、吠え面かいてゐるだへ。」

「それぢやお前は……その……なにしたらいいだらう……」と不意にスチョーバシカが云ひ出したが、妙にれて口を噤み、餌壺の中を掻き廻し始めた。

「で、支配人のところへ行くかい？」いくらか吃驚したやうにスチョーバを見やりながら、霧は言葉を續けた。

「あんな奴のところへ行つてどうするだ！……それではなくつてせえ、年貢の滞りがあるぢやねえか。悴は死ぬ前に一年ばかり患つてゐたもんで、自分の年貢さへ納められなかつたんだから……だけんど、俺ももう半分自棄くそだ。逆さに振つたつて鼻血も出やしねえ……もう、お前、どんなに智恵を絞つて、細工して見たつて、俺から何一つ取るこたあ出来やしねえ！（かう云つて百姓はからちと笑つた。）あのキンチリヤン・セモョーマイチがどんなに頭を捻つてみたつて、もうかうなつちや……」

グラスはまた笑ひ出した。

「そんな事いつたつて——それぢや困るぢやねえか、グラス。」と霧が一句一句間を置きながら、かう云つた。

「一體なにが困ると云ふんだ？ な……に……（グラスの聲は途切れた。）なんてえ暑さだあ。」袖で顔を拭きながら、彼は言葉を續けた。

「お前の旦那は誰だね？」と私は訊ねた。

「***伯爵でござえます。ヴレリファン・ベトロローギッチで。」

「ビョートル・イリッチの息子さんだね？」

「ビョートル・イリッチの息子さんで。」と霧は答へた。「亡くなられたビョートル・イリッチは、まだ御存命中に、グラスの村を息子さんにお願けになりましたんで。」

「どうだ、お達者かね？」

「い、按配に、お達者でいらつしやいます。」とグラスは答へた。「とても血色がよくなつて、顔なんか一皮かぶつたやうでござえます。」

「ときに、旦那様、私の方に向きながら、霧が言葉を續けた。「モスクワ近在なら好からうと思ひますが、こゝぢや年貢に苦勞いたしますよ。」

「一戸あたり幾らなんだね？」

「九十五留で。」とグラスは呟いた。

「まあ、かういふわけで、土地はまるで猫の額くらゐしかなくつて、せいごく御邸の森や林があるだけでございます。」

「それさへも賣つちまつたちゆう話ですがすよ。」と百姓が口を入れた。

「まあ、さういつたやうなわけなんで、……スチョーバ、餌をくれんか……おい、スチョーバ、なんだ、お前居眠りでもしてゐるのか？」

スチョーバシカはびくりと身體を慄はした。百姓は私たちの傍に腰を下ろした。みんなはまた暫らく黙り込んでしまった。向かう岸で誰やら唄を歌ひ出したが、それがひどく元氣のない調子だった……ヴラスは可哀さうに悄氣こんでゐた。……

三十分ばかり経つて、私たちは別れ別れになつた。

田舎医者

ある秋のこと、私は遠方の淋しい野原からの歸り途に、風邪を引いて弱り込んだことがある。仕合せと、發熱したのは郡役所のある町の宿屋だつたので、私は醫者を迎へにやつた。三十分ばかりして、郡役所附きの醫者がやつて來た。背の高くない、瘦せた、髪の中の黒い男である。ありふれた發汗劑を處方して芥子泥カイシドロを貼るやうに命じ、禮の五留札イッパツをいとも手際よく袖口の折返しへ突つ込んだ——尤も、その時えへんと空咳をして、外方ソウホウを見たものである。——そして、そのまゝ、歸り支度をしたのであるが、どうした事かつい話し込んで、腰を据ゑてしまった。私は熱に惱まされ、夜つびで眠れないものと覺悟してゐたので、いゝ話し相手と一喋りするのには、却つてもつけの幸ひだつたのである。茶が出た。醫者はそれからそれへと話が盡きなかつた。なか／＼氣の利いた男で、話し振りはき／＼して、可成り面白かつた。世の中には妙なことがあるものゝ、ある人とは長く一踏に暮らして、友達づきあひをしてゐながら、唯の一度も眞底から打ち明けたことが出来ないくせに、相手によると知り合ひになるかならないかに、もういきなり、此方ココからでなければ先方か

ら、まるで教會で懺悔でもするやうに、腹の底まで喋つてしまふことがある。私はどしてこの新しい友人の信頼を得たのか分からないが——とにかく彼は何といふことなしに、断「藪から棒に」可成り珍らしい出来事を聞かせてくれたのである。そこで私はこれからこの男の心、寛大な讀者諸君に御披露しようと思ふ。私は成る可く醫者自身の言葉で話すことにしよう。

「あなたは御存じないでせうね。」と彼はぐつたりしたやうな顔へ聲で（これは混り氣のないペロソフ煙草の利き目なのである。）云ひ出した。「あなたはこゝの判事のムイロフさんを御存じないでせうね。パーエル・ルキッチを？……御存じない……まあ、そんなことはどうでもよろしいので。（彼は一つ咳拂ひをして、目を擦つた。）さて、實のところ、そのお話といふのは、左様、なんと申したらよろしいか——出鱈目にならないやうに、はつきり云ひますと、大齋期の間のことで、雪解けの最中でした。私はその判事のところへ遊びに行つて、歌留多の勝負を戦はして居りました。この町の判事はいゝ人で、歌留多をやるのが大好きなんです。すると、俄然（この醫者は盛んに「俄然」といふ言葉を使つた。）下男が、私に用のある人が来たといふぢやありませんか。一體なんの用かと聞きますと、手紙を持つて來てゐるから、きつと病家からでせう、といふ返事です。ぢや、その手紙を寄越して下さい、と云つて、見ると案の定、病家からでした……いや、結構……これは御承知

の通り、我々にとつて飯の種なんですからね……さて、要件といふのはかうなんです。その手紙を寄越したのは、さる地主の未亡人で、娘が死にかゝつてゐますから、どうか人助けだと思つて、是非とも御來診を願ひたい、お迎への馬車も差し遣はしてあります、といふ文句なんです。なに、それだけならば何も大した事ではないのだが……その屋敷といふのは、町から二十露里もあつて、外は眞の闇夜だし、おまけにお話にも何にもならないやうな道なんです！ しかも、その未亡人は貧乏暮らしをしてゐるので、二留以上はどうも當てにすることが出来兼ねるし、それだつて至極あやしいくらゐるんです。悪くしたら麻の反物が、何かの緩き割りくらゐを、お禮に貰ふのが落ちかも知れない。しかし、何しろ義務といふやつが第一ですからね——人間ひとり死にかゝつてゐるといふ場合です。私は俄然、常任委員のカリオピンに歌留多を渡して、ひと先づ家に歸ることに致しました。みると、入り口の階段の傍に、やくざな、がた／＼馬車が待つてゐるのです。馬は百姓馬で、太鼓腹をしてゐるが、それも一通りや二通りの太鼓腹ではない。毛はもしやく／＼して、まるで荒毛氈をつくり、馭者は遠慮して、帽子も被らずに控へてゐる。そこで、私は腹の中で考へました。「どうやら見受けたところ、御主人がたもお強がるみで、馬車を乗り廻していらつしやる御身分ぢやないらしい……」あなた、お笑ひになりますね。けれど、私は率直に申し上げますが、われ／＼貧乏

人は、一應はなんでも頭に入れて、含んで置くものなんですよ……馭者が殿様然と坐り込んで、帽子もやたらに説がうとせず、おまけに鬚の中でのたいた笑ひをしながら、鞭をちよいと動かしてゐるといふ風だつたら、十留札二枚は必ず外れつこなし！とところが、いま見ると、それとは大分勝手が違ふらしい。が、どうも致し方がない。義務が第一だ、とかう考へましてね、どうしても無くてならない薬品類を持つて出かけました。あなたは想像もおつきにならないでせうが、やつとこのことで先方の家まで辿りついた始末です。道はまるで地獄のやうに非道いんですからね。小川がある、雪は溶け残つてゐる、泥濘はお話にならない程だし、水溜まりは到るところにある。おまけに、一とところでは俄然堤が切れてゐたりして、えらい騒ぎでした……が、とにかく無事に着きました。見ると、小つほけな藁葺きの家なんです。窓々に明りがさしてゐるところを見ると、私を持ち兼ねてゐるにちがひない。如何にも上品さうな老婦人が、レースの部屋頭巾を被つて、私を出迎へると、どうか助けて下さい、死にかゝつて居ります、と云ふ。そこで私は、御心配は要りません……御病人はどちらにいらつしやいます？と云ひますと、どうぞこちらへ、と案内されて行つてみると、小ざつぱりした部屋で、片隅には燈明がついてゐて、寢臺の上には、年の頃二十歳ばかりの娘が、昏睡状態である。その身體からは熱の臭ひがむん／＼して、息づかひがさも苦しさう……熱

病なのです。そこには姉妹らしい娘が他に二人ゐて——おろ／＼しながら、涙ぐんでゐる。「つい昨日までは丈夫でびん／＼してゐて、食事も大變すんだのですが、今朝になつてから、頭が痛いと言ひ出しました。それが夕方になると、出しぬけにこんな姿になつてしまひました……」と云ふのです。そこでまた私は、御心配は要りません——何しろ、これが醫者の務めですから、と云つて、診察にかゝりました。悪い血を出して、芥子泥を張るやうに指圖して、水薬を処方しました。さうしてゐる間に、私は病人の顔を眺めましたが、見ると、どうでせう——實に正直な話が、今までこれほどの顔を見たことがありません……美人なんですよ、一口に云へば！私はなんとも云へない可哀さうな気持ちになつて來ました。得も云はれぬほど気持ちのいゝ面ざしで、眼なんかと云つたら……やがてその中、いゝ按配に落ちついて來ました。うまく汗が出て來て、どうやら正氣づいたらしく、四邊を見廻すと、につこり笑つて、手で顔を一撫で致しました。兩人の姉妹はいきなり屈みこんで、一體どうしたといふの？と訊ねました。なんでもないの、と云つて、顔を反ける……見れば、もう寢入つた様子です。で、私は、さあ、これからは病人をそつとして置かなくちやなりませんと云つて、みんなでそつと足音を盗みながら、部屋を出てしまひました。たゞ小間使ひを一人だけ、萬一の用心に残して置きましたので。客間ではもうちやんとサモワールが卓の上に置い

であつて、ジャマイカ産の糖酒もすぐ傍に添へてある。私たちの商賣では、こいつがないと濟まされませんのでね。茶が出て、どうか泊まつて行つてくれといふ頼みですから……私も承知しました。この時刻になつて、何處へ行くわけにも参りませんからね！ お婆さんはのべつ溜め息のつき通しです。「まあ、あなたなんといふことですか？」と私は云ひました。「大丈夫、取り止めて見せますよ、御心配は要りません。それより一休みなすつた方が好いでせう。もう一時を廻りましたからね。」で先生、もしかの事がありましたら、起こすやうに仰しやつて下さいまし。「申しますとも、申しますとも。」そこで、お婆さんは引き上げました。兩人の娘も矢張り自分の部屋へ落ちついてしまひました。私の寢床は客間に用意してくれたので、私も横になりましたが——なか／＼寢つかれません——實に何とも奇妙な話で！ 身體はもうへと／＼に疲れてゐるのだから、こんな筈はないのだけれど、何時までも病人のことが頭を離れない。到頭、我慢し切れなくなつて、俄然とび起きてしまひました。一つ出かけて行つて、患者が何をしてゐるか見てやりませう、とかう思つたわけなので。病室は客間のすぐ隣りなのでした。さて、起き上がつて、そつと扉を開けましたが——心臓はどき／＼と早鐘をついて居ります。見ると、小間使ひは口をほかんと開けて、前後不覺の有様、しかも怪しからん奴で、扉までかいてゐるぢやありませんか！ 病人は私の方へ顔をむけて、横に

なつたまゝ、可哀さうに両手をぐつたり投げ出してゐるのです。傍へ寄つて行くと……突然ぱつと眼を開けて、ちいつと私を見据ゑるのです！……「誰？ 一體だれなの？」と問ひかけられて、私は間違つてしまひました。「どうか吃驚なさらしないで、お嬢さん。私は醫者ですよ、お氣分はどんなかと思つて、ちよつと拜見に上がったのです。」「あなたは先生ですか？」「さうですよ、さうですよ……お母様が私を呼びに、わざ／＼町まで使ひをお寄越しになつたので。お嬢さん、さきほど悪い血を出して差し上げましたから、これから少しお寝みなさいまし。かれこれ二日もしたら、きつと元の身體にしてさし上げますよ。」「あゝ、ほんとに、ほんとに、先生、私を死なさないで下さい……後生です、後生です。」「なにを仰しやるのです、滅相な！」さう云つてゐるうちに、また熱が出て来たなど、私は腹の中で考へながら、脈をとつてみると、案の定、熱がある。病人はちつと私を見てゐたが——突然、わたしの手を掴まへるぢやありませんか。「わたし云つてしまひますわ、なせわたし死にたくないか、云つてしまひますわ、云つてしまひますわ……今は二人きりなんですものね。たゞ、先生、お願ひですから、誰にも仰しやらないで……實はね……」私が身を屈めると、娘は髪の毛が私の頬にふれるほど、耳もと近く口を寄せました。——正直に白状しますが、私は頭がくら／＼として來ました。——そこで、娘はひそ／＼囁き始めましたが……さう、何が何やら少

しも分かりません……あ、可哀さうに、これは謠言なのでした。……ひそく、ひそくと耳打ちするのですが、それが恐ろしく早口で、まるで露西亞語ぢやないやうなんです。話し終ると、ほつと溜め息をついて、頭をぐつたり枕へ落とし、指を立ててちよつと脅かすやうな眞似をしました。「よくつて、先生、誰にも仰しやつたら承知しませんよ……」と云つたやうな具合なので、私はどうやらかうやらそれを落ちつかせて、水を飲みました上、小間使ひを起こして、部屋を出ました。「こゝで醫者はまたぞろ勢ひ猛に喫煙草を吸ひこんで、ちよつと氣の遠くなつたやうな風を見せた。「けれど」と彼は話を續けた。「翌る日病人は豫期に反して、容態がよくならないのです。私は考へに考へた揚句、俄然おもひ切つて腰を据ゑる事にしました。ほかの患者が待ち焦がれてはゐるたのですけれど……お察しでもありませんが、そつちの方も忽かせにするわけには行きません。そんなことをすれば、商賣の方にさし響きますからね。しかし、何よりも第一に、娘は全く危篤状態でしたし、それに第二としては、正直に申し上げなければなりません、私自身もこの娘にひどく心を牽かれたのです。その上、家族ぜんたいが私の氣に入りましたので、別に財産家といふではないけれど、全くのところ、珍らしく教養の出來た人達なんです……父親といふのは學者で、著述家だつたのですが、お定まりの話で、不自由勝ちの中に死んで了ひました。けれど、子供たちには立派な

教育を授けて、本なども夥しく残して行きました。私が何くれとなく病人の面倒を見たせるか、それとも外ほかに何かわけがあつたか知りませんが、この家の人達は私をまるで、云は、身内の者のやうに隔てなくしてくれるのです……とかくしてゐるうちに、雪解けは愈々ひどくなつて、交通の方法は、その、全く途絶してしまひました。藥品類でさへやつとの思ひで町から取り寄せるといふ始末……病人の容態は一向はかゞしくない……かうして一日一日、一日一日と過ごしてゐる中に俄然……その時……(醫者はちよつと言葉を休めた。)全く、どんな風にお話したらよろしいやら……(彼はまた喫煙草を吸ひ、空咳をして、茶をぐつと一口飲んだ。)ざつくばらんに申しますと、病人はえ、と、その……つまり、私に戀ひするやうになつたとても申しませうか……いや、戀ひしたといふわけでもありませんが……尤も……全くなんと云つたらいいか、え、と……(醫者は目を伏せて顔を赤らめた。)

「いや、」と彼は勢ひこんで語り續けた。「色の戀ひのといふ沙汰ぢやありません、第一、自分の相場といふものを考へなくちやなりません。その娘は教育もあれば、頭もよく、本もうんと讀んでゐるのですが、私はラテン語さへ、正直なところ、すつてんに忘れてゐるのですからね。風采からいつても(と醫者は薄笑ひを浮かべながら、自分の様子に流暢をくれた)。これはまた別に自慢の

種になりませんでな。とは云ふものの、有難いことに、まんざらの馬鹿に生みつけられたわけでもない。白いものを黒いと云ふやうなこともなく、これで多少は物の道理も分かつて居ります。早い話が、アレクサンドラ・アンドレーヴナが——その娘さんはアレクサンドラ・アンドレーヴナといふ名でしたよ——私に寄せて下さった気持ちは愛情などではなくて、友達としての好意と云ふか、尊敬と云ふか——さういふ風のものだったのは、私にもよく分かつて居りました。もつとも、當人はその點で感違ひをしてゐたかも知れませんが、何分場合が場合なんですから、その邊はよろしくお察しを願ひます……しかし、」醫者は息もつかずに、さもまごついたらしい様子で、この途切れ途切れな物語りを終つた後、更にかう云ひ添へた。「私はどうやら少々お調子に乗り過ぎたやうですね……こんな話し方では、一向お分かりにならないでせう。……御迷惑でせうが、こゝで何も彼も順序立て、お話し致しませう。」

彼はコップのお茶をぐつと飲み乾して、いくらか落ちついた聲で話し出した。

「さて、そこです。病人はだん／＼悪くなる一方でした。一日一日とよくないのです。あなたは醫者ではいらつしやらないから、お分かりにはなりませんまいけれど、我々の心の中がどんなものか、殊に病氣が手に合はないと感づき出した最初の間、我々の心の中は全く想像の外ですよ。醫者の體

面の持つて行き場がありませんやね！ 俄然、筆にも言葉にも盡くせないほど氣遅れがして来る。今まで知つてゐた事も、すつかり忘れてしまつて、病人が自分を信用してくれないやうな氣がするのです。傍の者もこつちが途方に暮れてゐるのに氣がついて来て、症状を話すのも澁りがちになり、何だか上目づかひに私をじろ／＼眺めて、頻りにこそ／＼耳打ちをしてゐる……全く、嫌な氣持ちですよ！ だつて、この病氣には適藥がある筈なんだから、唯そいつを見つけてさへすればいいのだ。あ、あれぢやないかしら？ かう考へて、試してみると、駄目だ、違ふのです！ 藥の利きめが本當に現はれて来るまで待ち切れなくて……あれぢやないか、これぢやないかと狼狽へてばかりゐる。時には處方原書まで取り出して見ることがあります……この中にこそ必ずあるに違ひない、と云つたやうな氣持ちなのです！ どうかすると、かけ値のない話が、當てすつほうに本を開けて、あはよくば紛れ當たりに當たつてくれと、そんな事を心頼みにするやうにもなります……ところがそんな事をしてゐるうちに、人間一匹死んでゆくのです。もしほかの醫者が手がけたら、生命拾ひをしたかも知れないんですからね。そこで、自分で責任を負ひかねるから、立會ひ診察にして貰ひたいと云ひ出すわけですが、さういふ時にどんな間抜け面をしてゐるか、我ながら情けなくなりませよ！ やがて、甲を経るに従つて、馴れつ子になると、案じる程のこともない。人が死んだつ

て——何も俺が悪いんじゃない、俺は出来るだけのことはちゃんとしたのだと、結構澄まして居られます。しかし、それでもまだ苦しいことがありますよ。自分が盲目的な信頼を受けてゐるのを見ながら、どうにも癒しやうがないのを腹の中で感じてゐる場合ですな。つまり、かういつた風な信頼の念を、アレクサンドラ・アンドレーヴナの家中の者が、私に捧げてくれたのです。——娘が危篤だといふことさへ忘れるやうな始末なので、私もまた私で、なに大丈夫ですと、安心させてはゐるものの、内々膽つ玉を縮み上がらしてゐました。運の悪い時には悪いもので、道路の雪解けは話以上で、馭者が薬を取りに行つて歸るまで、二日も三日もかゝるといふ有様。私は病人の傍に付きつきりで、一步も病室を出ないやうにしながら、なんですな、いろんな笑ひ話をして聞かせたり、歌留多のお相手をつとめたりするので。夜も枕もとに坐りつきりでした。老母は眼に涙を浮かべて禮を云ふのですが、私の心の中は、そんなお禮を云つて貰ふ値打ちはないといふ氣持ちで一杯でした。あなたには腹藏なく申し上げますが——今さら隠し立てしたつて仕様がありません——私は自分の患者に惚れてしまつたのです、アレクサンドラ・アンドレーヴナも、私に離れ難ない氣持ちを持つやうになりましたね、もう私よりほかには、誰ひとり病室へ入らせないので。私を相手に四方山の話を始め、どこで修業したかだの、どんな風に暮らしてゐるかだの、身内にはどんな人

がゐるかだの、どんな家へ往診に行くかだの、根掘り葉掘り訊ねるぢやありませんか。私は病人が話し込むのはよくないと思ひながら、これを差し止める——つまりその、きつぱりと禁じてしまふことがどうも出来ない。よく我れと我が髪を掻き撚りながら、この悪黨、貴様は一體なにをしてゐるのだ？ と自分を責めてもみましたが——また時によると、娘は私の手をとつて、自分の掌に握つたまゝ、長い間ぢいつと私の顔を見つめてゐる。暫らく見つめた後、顔を反けて、ほつと溜め息をつきながら、あなたはなんて優しい方なんでしょう！ と云ふ。その手は熱えるやうに熱くて、大きな眼は物憂げにとりとりしてゐるのです。「え、あなたは優しい方ですわ、いゝ方ですわ。あなたはこの近所の人達とはまるで違ひます……いえ、あなたはあんな風ぢやありません……どうして私は今まであなたを知らずにゐたのでせう！」と云ふから、私は「アレクサンドラ・アンドレーヴナ、氣を落ちつけて下さい……私は誓つて申しますが、お氣持ちはよく胸に應へます。一體なんの取柄があつてそんなに仰しやつて頂けるのやら……でも、どうか氣を落ちつけて下さい、お願ひですから、氣を落ちつけて下さい……萬事うまく行きますよ、あなたももとの身體におんなさいますよ。」——ところで、こゝでお断りしておかなければなりません、と醫者は身を乗り出して、眉をつり上げながら云ひ足した。「この一家は近所の人とあまり交際をして居りません。小地主連

は格が下がるし、物持ち連とつきあふのは、自尊心が承知しない。敢へて申し上げますが、並み外れて高い教養を持った家族なので。——従つて私としても、ねえ、悪い気持ちは致しません。病人はもう私の手からでなければ、薬を受けつけないのです……可憐しい様子で、私の腕を藉りて身を起こし、薬を飲み終ると、私の顔をちらと眺める……と、私は氣もそぶろになつてしまひます。ところが、病人の容態は次第に悪くなつて來ました。益々いけないのです。死んでしまふ、間違ひなく死んでしまふ、と私は心に思ひました。ねえ、さうぢやありませんか、自分が身代はりに棺の中に入つてもいい、くらゐな氣がしてゐるのに、周りでは母親や姉妹たちが様子を見てゐて、私の眼色を窺つてゐるのですからね……信用もだん／＼薄らいで來ます。「如何です？　どんな風ですか？」と聞かれると、「大丈夫です、大丈夫ですとも……」と答へはするものの、大丈夫どころか、頭の中がこんぐらかつてしまつてゐるのです。さて、私は或る時、夜中にたつた一人、例の如く病人の傍に付き添つてゐました。小間使ひは相變はらずそこに腰かけたまゝ、遠慮會釋なしに高駈なのです。勿論、可哀さうに、こんな小娘を責めてみたつて始まりません。この娘だつてすつかりまるつてゐるのですからね。アレクサンドラ・アンドレーヴナはその晩終夜大變調子が悪かつた。熱で弱り切つたのですね。丁度最夜中になるまで、のべつ寢返りばかり打つてゐましたが、その中にやつと寢

入つたらしい風でした。とにかく、身動きもしないで靜かにしてゐました。片隅の聖像の前では、燈明が細々と點つてゐる。ちつと坐つてゐる中に、つい頭が下がつて來て、私までうと／＼してしまひました。すると突然、まるで誰かに脾腹を突かれたやうな氣がして、はつと振り返つて見ると、ねえ、どうでせう！　アレクサンドラ・アンドレーヴナが双の眼を一杯に見ひらいて、私を瞞めてゐるではありませんか……唇は弛んで、頬はまるで燃えるやう。「どうしたのですか？」「先生、私はもう駄目なんぢやないでせうか？」「滅相な？」「いけません、先生、いけません、お願いですから私が助かるなんて仰しやらないで……そんなこと仰しやらないで……先生に私の氣持ちが分かつて下すつたら……ねえ、後生ですから、私の容態を隠さないで下さい！」かう云ふ當人は、はあく／＼と忙しない息づかひをしてゐるのです。「もし私がどうしても死ぬものだと、はつきり自分で分かつたら……その時こそ私、あなたに何も彼もお話しますわ、何も彼も！」「アレクサンドラ・アンドレーヴナ、飛んでもないことを！」「ねえ、實はわたし、ちつとも眠らないで、前からあなたを眺めてゐましたの……後生一生のお願い……わたし、あなたを信じます。あなたは親切な方です。正直な方です、この世にありとあらゆる神聖なものに賭けてお願いしますから——私に本當のことを聞かせて下さい！　これが私にとつてどんなに大事なことが、それをあなたが分かつて下すつたら……」

先生、後生ですから、教へて下さいな、わたし、危篤なんでせう?」「なにをお教へすることがあります。アレクサンドラ・アンドレーヴナ、滅相もない!」「後生一生のお願いですから!」「かうなつたら、もうあなたに隠し立ては出来ません、アレクサンドラ・アンドレーヴナ——あなたは全く危篤なのです。けれど、神様はお慈悲深いから……」「わたし、死ぬんだわ、死ぬんだわ……」と娘はさも嬉しうな調子で云つて、顔までなんだか浮き浮きして来ました。私はぎよつとした位です。「どうか心配しないで下さい。心配しないで。わたし、死なんていふもの、ちつとも怖がありませんわ。」娘は不意に身を起こして、片膝をつきました。「今こそ、え、今こそわたし、すつかり云つてしまへますわ。私は心の底からあなたに感謝してゐますの。あなたは優しい、い、方ですわ。わたし、あなたが好きなんですの……」私はきよんととして、相手の顔を見つめてゐました。なんだか息苦しいやうな気持ちでしてね……「ねえ、わたし、あなたを愛してゐますのよ……」「アレクサンドラ・アンドレーヴナ、一體わたしになんの取り柄があつて!」「い、え、い、え、あなたは私の気持ちがお分かりにならないのです……わたしの気持ちがお分かりなのよ……」「かう云ふなり、俄然両手を差し延べて、私の首に巻きつけると、いきなり接吻するぢやありませんか……御想像くださるでせうが、私はすんでのことと聲を立てないばかり……そのま、膝をついて、枕に顔を埋め

てしまひました。娘は黙つてゐましたが、その指先は私の髪を抑へたま、わな／＼と慄へてゐるのです。ふと気がつくと、泣き聲が聞こえるぢやありませんか。私はいろ／＼と慰めたり、誓つたりしはじめましたが……もう全くのところ、何を云つたのやら、自分でも覚えがありません。「小間使ひが起きてしまひますよ、アレクサンドラ・アンドレーヴナ……ありがたう……本當に……どうか氣を落ちつけて下さい。」と私は云ひました。「え、よして下さい、澤山ですわ。」と娘は繰り返すのでした。「あんな人たちなんか、どうだつて構はないぢやありませんか。よしんば眼を覺まして起きて来たつて——どうせ同じことですわ。だつて、わたしは死ぬ身體なんですもの……それになんだつてびく／＼なさるの、何を怖がつてらつしやるの? 頭を上げて頂戴……それとも、あなたはわたしを愛してはいらつしやらないのでせうか、わたしの心の迷ひだつたのでせうか……もしさうだつたら、どうか御免あそばせ。」「アレクサンドラ・アンドレーヴナ、何を仰しやるのです? ……私はあなたが好きなんです、アレクサンドラ・アンドレーヴナ。」娘はひたと私の顔をみつめて両手を大きく攢けました。「それなら、私を抱いて下さいな……」私は打ちまけて申しますが、どうしてあの晩氣が狂はなかつたか、我ながら合點が行かないほどです。私は自分の患者が、我れと我が身を滅ぼすやうな眞似をしてゐるのを承知してゐたし、完全に病人が正氣でないのも、見てとつ

て居りました。その上もし自分が末期まうごに近いといふことを覺悟してゐなかつたら、當人も私のことなど考へはしなかつたらう——この事も、私にはちやんと分かつてゐました。全く、なんと云つたつて、誰ひとり戀ひもしないで、二十五やそこいらで死んで行くのは、考へただけでも情けない話ですからね。つまりそれが苦しさに、娘は夢中で私に飛びかゝつて、救ひを求めたのです——これでお分かりになつたでせう？ いづれにしても、娘は私を抱き締めたまゝ、離さずとしません。「アレクサンドラ・アンドレトヅナ、少しは私も可哀さうだと思つて下さい。それに御自分の身體だつて、粗末になすつてはいけません。」と云ふと、「なぜです、何を大事がるんですの？ だつて、私はどうせ死ななくちやならないんですもの。」といふ返事です。これがのべつ出て来る口辭なのでした。「ねえ、もしわたしが生き存なぐさへて、いつばしのお嬢さま顔をするやうになると知れてゐたら、恥づかしくつて、それこそ恥づかしくつて、顔むけが出来ませんわ……さうしたら、どうしますの？」「一體、誰が必ず死ぬなんてあなたにさう云つたんです？」「い、え、駄目よ、およしなさい。わたし瞞まされやしないから。あなたは嘘をつくのが下手ね。まあ御自分の顔を見て御覽なさい。」「あなたは達者におなりになりますよ、アレクサンドラ・アンドレトヅナ。私がすつかり癒してお目にかけます。私たちは二人でお母様に祝福して頂いて……二世の赤繩あかじまを結びませう。さうして二

人は幸福に暮らすのです。」「いけません、いけません、私はあなたに誓つて頂いたんですもの。あたし、どうしても死ななくちやなりません……あなた、わたしに約束したでせう……ちやんとさう云つたでせう……」私は苦しがつた、いろいろな理由で苦しがつたのです。全く妙なもので、世の中には時々こんなことが持ち上がるものですよ。ほんのつまらない事のやうには思はれますが、しかし辛いものですよ。突然、娘は止せばいいのに、私の名を訊ねようなんて考へを起おこしました。つまり苗字ぢやなくて、名前なんです。ところが不仕合はせなことに、私の名前はトリーフォンと云ふのです。さやう、さうです、トリーフォン——トリーフォン・イワーヌイチなので。家ではみんなが私のことを、先生、先生、と呼んでゐましたがね。仕方がないから、お嬢さん、トリーフォンでございます。と申しました。すると、娘は眉を蹙しりぞめて、首を捻りながら、何やら佛蘭西語でほそほそ云ふのです——いやはや、どうも厭いとな氣持きもちちのものですね。それから俄然笑ひ出しましたが、これ又いゝ氣持きもちちのものぢやありません。さて、こんな風にして、私は娘を相手に殆ど終夜ゆうじや過すごしてしまひました。夜が明けて、部屋を出た時には、まるでほつとしてゐましたよ。それからもう晝ひるすぎにお茶を済ましてから、また病室へ入つてみますと、どうもはや、驚いたことには、まるで相恰あてが變はつてしまつてゐるのです。棺に納められる死骸しかいだつて、まだしも人間らしい顔をしてゐる

位です。正直、嘘のないところ。どうして私はあの責め苦を持ち堪へたか、今で、合點が行きません。ほとく合點が行かない程ですよ。それからまだ三日三晩といふもの、病人は苦しみ通しましだ……しかも、その夜々夜々の恐ろしさ！ 娘が私に口走る言葉といつたら、お話にもならない程なんです！……いよいよ最後といふ時に、まあお察し下さい——私は病人の傍に付き添ひながら、神様に向かつて、もう一刻も早くこの女を引き取つて下さるやうに、そして私も一緒に御召し下さいました、たゞそればかり祈つてみました……すると俄然、老母がさつと戸を開けて、部屋へ入つて來ました。私はもう前の晩からこの老母さんに、もう望みが少なくなつて、容態が面白くないから、坊さんを迎へるのも悪くないでせうと、注意しておいたわけなので。病人は母親を見るが早いか、「まあ、丁度來てくださつてよかつた……お母さん、私たちを見て頂戴、私たちお互ひに愛し合つてゐるのよ。私たちは二人で約束を交はしたの。」一體あの娘は何を云つてゐるんですの、先生、何を云つてゐるんですの？」私は死人のやうに冷たくなつてしまひました。「あれは謔言です、熱が高いので……」と云ひますと、娘は「よして、よして、あんたはたつた今まるで別なことを仰しやつたくせに。私から指環まで受け取つたぢやありませんか……何を白つばくれていらつしやるの？ 家のお母さんは優しい人だから、赦して下さいませぬ、察して下さいませぬわ。私は死んで行く身で

すもの、嘘なんかついたらつて始まりません。さあ、手を貸して頂戴……」私はいきなり席を躍り上がつて部屋を駆け出してしまひました。老母は云ふまでもなく、様子を悟りました。

「しかし、もうこれ以上あなたを悩ますのは遠慮しませう。それに、白状しますが、當の私だつて、かういふ事を一々思ひ出すのは苦しいですからね。病人はその翌日息を引き取りました。神よ、彼女に天國を與へたまへ！ (と醫者は早口に云ひ添へて、溜め息をついた。) 最後の際に、娘はみんなを人拂ひして、私と差し向かひになりました。「堪忍して頂戴。」とかう云つたものです。「わたしはあなたに對して、濟まない事をしたかも知れませぬわね……こんな病氣で……でも、信じて下さいね、わたしはあなたよりほか、誰も戀ひした事がないんですもの……私を忘れないでね……あの指環を大切に頂戴……」

醫者はつと顔を反けた。私はその手をとつた。

「いや！」と彼は云つた。「何かほかの話をしようぢやありませんか。でなければ、小さな賭けで歌留多でも一つ如何ですか？ 何せ、われ／＼風情がこんな高遠な感情に耽ける柄ぢやないですからね、我々風情の考へることは、どうか子供がぎやあ／＼泣かないやうに、女房ががみ／＼云はないやうにと、たゞそれだけより外にはありませんやね。その後わたしもまあ、正式に結婚しました……さ

うです……商人の娘を買ひましたよ。七千留^{セブン}の持参金つきで、名をアクリーナといふのだから、トリーフォンとは好一對ですよ。打ち明けたお話が、意地の悪い女房ですけど、まあ仕合はせなことは、一日寝てばかりゐましてな……ときに、歌留多は如何です？」

私達は一哥^{カイク}がけの歌留多を始めた。トリーフォン・イワーマイチは私から二留半^{ニリウ}まき上げて、自分の勝利に大満悦の態で、夜おそく歸つて行つた。

★トリーフォンもアクリーナも農民に多い名である。(註)

私の隣人ラヂーロフ

秋になると、山鶉はよく古い菩提樹の庭に寄つて来る。さういふ庭が、このオリョール縣には成り澤山ある。われ／＼の祖先たちは、永住の地を定める時に、必ず上等の土地を二町歩ばかり、菩提樹並み木のある果樹園にしたものである。五十年か、たか／＼七十年も経つうちに、かうした地主邸、云ひ換へれば「貴族の巢」は、だん／＼地表から跡を絶つて行つた。家は腐つたり、取り壊し家として賣り渡されたり、石を疊んで造つた長屋は廢墟と化してしまひ、林檎の木は立ち枯れになつたり、薪にされたりして、塀や編み垣は跡かたもなくなつた。たゞ菩提樹ばかりは相變はらず、時を得顔に生ひ繁つて、今は一面に耕された畑に取り巻かれながら、輕薄な現代の人々に「嘗てこゝに安らかなる憩ひを求めた祖先や近親たち」のことを語つてゐる。かうした古い菩提樹ほど美しい木はない……情け容赦もない露西亞の百姓の斧でさへ、かういふ木には刃を加へかねるものである。葉は細かくて、逞ましい枝が廣く四方に延び、その下には不斷の蔭を作つてゐる。

ある時エルモライと二人で、鶉鴉を追ひながら野原をうろつき廻つてゐる間に、私は向かうの方

に一つの荒れた庭を見つけ、そこを目指して歩いて行つた。木立ちの中へ足を踏み入れるか入れない中に、一羽の山鶉が藪の中から荒々しい羽音を立てながら、ぱつと飛び立つたので、私は直ぐさま火蓋を切つた。と、その途端に、五六歩離れたところで、きやつといふ叫び聲が聞こえた。若い娘の吃驚したやうな顔が木立ちの間から覗いたと思ふと、すぐにまた隠れてしまつた。エルモライが私の傍へ駆け寄つて「なんだつて、こんな所で鐵砲なんか撃ちなさる。こゝは地主の住居ぢやありませんか。」

私がそれに答へる間もなければ、また犬が氣取つた物々しい様子をしながら、射ち落とされた鳥を私のところまで唾へて来る暇もなく、輕快な足音が聞こえて、鼻鬚を生やした背の高い男が篋みの中から姿を現はし、不満げな顔付きで私の前に立ち止まつた。私は言葉を盡くして詫びを云つた後、自分の姓名を名乗つて、他人の領地で撃つた鳥を返さうと申し出た。

「よろしい。」と彼は笑顔でかう云つた。「その鳥は納めて置ませう。が、それには条件があります。あなたに宅で食事をして頂きたいので。」

正直なところ、私はこの招待をさして嬉しく思はなかつたけれど、辭退するわけにもゆかなかつた。「私はこゝの地主で、あなたとはお隣り同志になるラヂーロフといふ者です。お聞き及びかも知

りませんが。」と新らしい知人は言葉を續けた。「今日は日曜ですから、宅の食事もひどく粗末ではない筈です。でなかつたら、御招待もしなかつたでせうからね。」

私はかういふ場合に誰でも云ひさうな挨拶をして、主人の後からついて行つた。つい近ごろ掃除したばかりらしい小徑づたひに行くと、間もなく菩提樹の林を出はづれた。私たちは菜園へ入つて行つた。古い林檎の樹と、勢ひよく生ひ繁つたすぐりの藪の間に、淡青色をした甘藷カンショのまるい頭がまだら模様を描いてゐるし、つめ草(ホップ)は高い棒にうねくと絡みつき、畦には枯れ切つた豌豆の蔓を纏らした蔕色の棒がところ狭く立ち並んでゐる。大きな平つたい南瓜が、まるで地べたへ轉がしたやうに實つてゐるし、胡瓜は埃つほい刺々した葉蔭から黄色く見えて、編み垣の縁に沿つて丈の高い蕁麻アザミがゆらくと揺れてゐる。韃靼忍冬タチノハ、接骨木ハコブ、野茨などが、二ところ三ところ塊まつて生えてゐる。もとの「花壇」の名残りである。赤ちやけて粘々とした水を湛へた小さな生簀シバの傍に井戸があつて、まはりは一面の水溜りになつてゐる。その水溜りの中で家鴨が氣忙しさうにばちやばちやつて、しきりに方々つつ突き廻してゐる。一匹の犬が全身を慄けし、眼を細めながら、空地で骨を齧つてゐる。すぐ傍には産の牝牛が、時々瘦せこけた背中へ尻尾を振り上げながら、大儀さうに草を撈つてゐる。やがて小徑がうねりして、太い楊や白樺の間から、入り

口階段の曲がりくねつた、古いくすぶつた葎葎屋根の家が見えて来た。ラチーロフは足を止めた。「尤も、」人の好ささうな眼付きで、正面に私の顔を見つめながら、彼はこんなこと云ひ出した。「いま考へ直してみますと、あなたは私の家へなんか、ちつとも寄りたいとお思ひにならないでせうね。もしさうだとすれば……」

私は彼に全部まで云はせないで、飛んでもない、お宅で御馳走になるのは實に愉快です、と辯明した。

「では、どうぞ御隨意に。」

私たちは家の中に入った。青い厚地の羅紗で仕立てた長い上衣を着た若者が、入り口階段で私たちを出迎へた。ラチーロフは早速この男に、エルモライのところへ火酒を持って行つてやるやうに命じた。私の獵師は氣前のいい、この家の響應ひ主の背中に、恭々しく一禮したものである。いろいろな繪をこちや／＼と貼りつけて、鳥籠を方々へぶら下げた控へ室を通りぬけ、小さな一間へ入つて行つた——これがラチーロフの書齋なので。私は獵の七つ道具を外して、鐵砲を片隅へ立てかけた。裾の長い上衣を着た若者が、まめ／＼しく私の服に刷子をかけてくれた。

「さあ、これから客間の方へまゐりませう。」とラチーロフは愛想よく云つた。「母を紹介さして頂

きます。」

私は彼の後について行つた。客間の真ん中に置いた長椅子に、餘り背の大きくない老婦人が腰をかけてゐた。藍色の衣裳をつけて、白いレースの頭巾を被つてゐたが、その瘦せた顔は如何にも善良さうで、おつ／＼とした憂はし氣な眼付きをしてゐる。

「あの、お母さん、御紹介します。隣り村の……さんです。」

老婦人はちよつと腰を上げて、私に會釋をしたが、袋みたいな厚い毛糸の手提げを、しなびた手から離さうともしなかつた。

「もう、前からこちらの方へお見えになつていらつしやるのですか？」と彼女は眼をぱち／＼させながら、弱々しい小さな聲で訊ねた。

「いえ、つい近頃です」

「暫らくこちらに御滞在のおつもりで？」

「冬までと思つて居ります。」

老婦人はそれきり黙りこんだ。

「ところで、こちらは、」とラチーロフは、背の高い瘦せた男を指さして見せながら、すかさずかう

云つた。私は客間に入つて来る時、この男に気がつかなくつた。「この人はフォードル・ミヘーイチチ……さあフェーヂャ、お客様に得意の藝を御覽にいれろ、なんだつて、隅つこの方に小さくなつてゐるんだ？」

フォードル・ミヘーイチチは、すぐさま椅子から身を起こし、窓の上からやくざなヴァイオリンを持つて来て、弓を手にとつた——けれど、普通だれでもするやうに、端の方を持つのではなく、真中を握るのであつた。——それからヴァイオリンを胸にあてがつて、眼を瞑ると、歌を唄ひ唄ひ絃をぎいぎい擽りながら踊り出した。彼は見たところ七十ばかりで、かさ／＼に骨ばつた手足に裾の長い南京木綿の上衣が、いとも惨めにだぶついてゐた。その踊る様子といつたら、時には威勢よく小さな禿頭を振り立てたり、時には氣でも遠くなつたやうにその頭を動かして、筋ばつた頸をのばしながら、一つ所で足をばた／＼やつたりするのである。どうかすると、眼に見えて骨の折れるらしい恰好で膝を屈ける。齒のない口からは、さも老いほれらしい聲が洩れてゐた。ラチーロフは私の顔色から、フェーヂャの「藝」があまり私の御意に叶はないのを察したと見えて、

「いや、結構、もうい、よ、爺さん。」と云つた。「あつちへ行つて、御褒美にありつくがい。」

フォードル・ミヘーイチチは早速ヴァイオリンを窓の上に載せ、初の先づ客の私、それから老婦人、

其後にラチーロフといふ順で會釋をして、そのまゝ出て行つた。

「あれでもやはり地主だつたんですよ。」と新しい知人は言葉を續けた。「しかも裕福な方だつたんですが、すつかり落しちやつて——今ではこの通り、私の家で居候をしてゐる有様なのです……もと盛んな時代には、縣内でも一二と云はれる發展家でした、他人の細君を二人までも連れて逃げ出したり、唱歌隊を抱へたりして、自分も歌や踊の名人だつたんですがね……しかし、火酒を一つ加へます？　もう食事の用意は出来て居りますが。」

さき程ちらりと庭で見た例の若い娘が、部屋へ入つて来た。

「あ、これがオーリヤです。」とラチーロフはちよつと顔を反けながら云つた。「どうぞ、お心安く、可愛がつてやつて下さい……さあ、食事にまゐりませう。」

私たちは食堂へ入つて、座に着いた。まだ私たちが客間から出たり、席を決めたりしてゐる間に、もう例の「御褒美」の利き目で眼をぎら／＼させ、鼻をほんのり赤くしたフォードル・ミヘーイチチが「凱歌の雷轟き渡れ！」を唄つてゐた。老人は布もかけない片隅の小さな卓に別に食事の支度をして貰つてゐるのであつた。この可哀さうな年寄りには、決して身綺麗とは云へなかつたので、何時もみんなから少々離して置かれてゐたのである。彼は十字を切つて、一つ溜め息をつくと、

まるで饅頭のやうに、がつ／＼食べ始めた。食事は前觸れがあつただけに、可成り上等で、それに日曜でもあつたので、ぶりん／＼したゼリーや、「西班牙の風」と稱するケーキまでちゃんと附いてゐた。かれこれ十年も地方の歩兵聯隊に勤めて、土耳其戦役にまで従軍したといふラチーロフは、食事の間にいろ／＼な話を初めた。私は身を入れてそれを聞きながら、そつと内緒でオリガの様子を眺めてゐた。この娘は飛び離れて綴綴がい、といふ程でもなかつたけれど、きつぱりとして落ち着いた顔の表情、眞つ白な秀でた額、厚いふさ／＼した髪の毛、取り分け、小さいけれど惻愴さうに生き生きと澄み切つた鶯色の眼は、私でなくとも、見る人の眼を眩らしたに相違ない。彼女はラチーロフの話す一言一言に、耳を傾けてゐるらしかつた。その顔にはたゞの關心どころでない、一生懸命な注意の色が現はれてゐた。ラチーロフは年配から云へば、その父親といつてもいゝ位であつた。彼女に向かつて「お前」言葉を使つてゐたけれど、娘でないといふことは、直ぐに一眼で察しられた。話の間に彼はふと、亡くなつた細君のことを口に出したが、その時オリガを指さしながら、「これはその妹なんで、」と云ひ添へた。彼女は忽ち顔を赤らめて、眼を伏せてしまつた。ラチーロフは暫らく黙つてゐたが、やがて話題を轉じた。老母は食事の初めから終ひまで、一言も口を利かないで、自分も殆ど何一つ食べなければ、私に薦めもしなかつた。その様子には、なんとなくおど

おどした、頼みの綱を切られたやうな、諦めの色が滲み出してゐた。それは、見る人の心を痛ましく締めつけるやうな、彼の老いの悲しみである。食事の終り頃に、フォードル・マヘーイッチは主人と客に「祝辭」を述べようとしたが、ラチーロフは私の顔をちらと見て、老人に口を噤ませた。老人は片手で口を擦つて、眼をばくりさせ、一つお辭儀をして、また腰を下ろしたが、今度はもう椅子の突つ端に尻を載つた。食事が済んでから、私はラチーロフと一緒に書齋へ赴いた。いつも一つの思想や熱情に激しく捕はれてゐる人間は、どんなに持つて生まれた性質や、才能や、社會上の地位や、教育などが違つてゐても、何かしら共通なところを備へてゐて、その應待振りにどことなく外面的な類似が見られるものである。ラチーロフをつく／＼観察すればするほど、彼もやはりさういつた人間の一人だといふ氣がするのであつた。彼は領地のこと、作物の出来榮え、草刈りのこと、戦争のこと、郡内の噂ばなし、目前に迫つた選挙のことなど話したが、その話しぶりは極めて自然で、可成り身を入れてゐるやうにさへ思はれたけれど、だしぬけにほつと吐息をついて、過激な労働で疲れ切つた人のやうに、ぐつたりと眩椅子に身を沈めて、顔を撫で廻すのであつた。どうやら見受けたところ、彼の善良で暖い心はたゞ一つの感情に滲み渡つて、その中に浸つてゐるやうに思はれた。私は彼が何一つとして、熱心な愛着を持つてゐないのを見て、それだけでも

い、加減に吃驚した。食べる事にも、飲む事にも、獵にも、クルスタの駕にも、逆落としといふ飛び方をする鳩にも、露西亞文學にも、跳足の馬にも、匈牙利馬にも、歌留多遊びにも、球突きにも、舞踏會にも、大小の街々への旅行にも、製紙工場や硝子工場の工場にも、けばくしく塗り立てた四阿にも、茶を飲む事にも、養澤三昧に飼ひ馴らされた側馬にも、帯を腋の下邊に高々と締めた肥つちよの服者——どういふわけか知らないが、頸を動かす度に眼を横にひつ吊らして、今にも眼の玉が飛び出さうにする威容堂々たる服者にも——一切無興味なのであつた……「一體全體、この地主はなんといふ人間なのだらう！」と、私は腹の中で考へた。とは云ふものの、彼は運命を呪ふ人主義者を氣取つてゐるわけではさらくない。それどころか、たゞ見たばかりでも、無性やたらに人が好くて、害すまで、こちらが願になつてしまふくらゐ、相手かまはず誰とでも近附きになりたがる性質なのである。尤もそれと同時に、こんなことも感じないではゐられない——彼は本當に人と友達交際をしたり、隔てなく打ちとけたりすることは出来ない。それは一概に他人に用がなからではなくて、彼の生命が一時すつかり内部の方へ向けられてゐるからである。私はラヂーロフをつくつく見入りながら、いま現在にしても、これから先きにしても、彼が幸福になり切つた妻をどうしても想像することが出来なかつた。彼は美男子といふのではなかつたが、その眼付きにも、

微笑にも、その身體ぜんたいにも、何かしら非常に人を惹きつけるものが潜んでゐた——全く潜んでゐたのである。で、この男をもつとよく知つて、芯から好きになつてやりたいやうな氣がするのであつた。それはなんと云つても、時には曠野地方の地主らしい態度がちらつくけれど、とにかく愛すべき人物であつた。

私たちが新任の郡貴族會長の話を始めかけたところへ、突然戸口で「お茶の用意が出来ました。」といふオリガの聲が響いた。私たちは客間へ移つた。フォードル・ミヘーイチは、相變はらず自分の席と決めた小窓と扉の間の片隅で、殊勝らしく足を縮こめながら腰かけてゐた。ラヂーロフの母親は靴下を編んでゐた。開け放した窓越しに秋めかしい爽々しさと、林檎の匂ひが流れて来る。オリガは甲斐々々しくみんなにお茶を注ぎ分けてゐた。で、いま私は食事の時よりも氣をつけて、彼女の様子を眺めた。彼女は一般に田舎住まひの若い娘の例に洩れず、ごく口數が少なかつたけれど、それでも何か上手にうまい事を云はうと焦りながら、しかも惱ましいほど空虚と無氣力さを感じてゐると云つたやうなところは、一向眼につかなかつた。さも言葉に盡くせないほどの氣持が胸に溢れてゐます、とでも云ひたさうに溜め息をついたり、思ひ入れたつぷりで上目づかひをしたり、夢見るやうな、そこはかとない微笑を洩らしたり、そんな眞似は一切しなかつた。彼女はまる

で大きな幸福か、さなくば大きな不幸の後に一息いれてゐる人のやうな、落ちついたさり気ない様子をしてゐる。その歩きぶりも、身のこなしも、はきくとして自由であつた。私はこの娘がすっかり氣に入つてしまつた。

私はまたラチーロフと話した。どういふ道筋を辿つて行つたのか、もうまるで覺えがないけれど、ごくつまらない事が、非常に大きな事件よりも、反つて深い印象を與へることが始終あるといふ、分かりきつた意見の交換に行きついたのである。

「さやう、」とラチーロフは云ひ出した。「私はそれを自分で體驗しましたよ。私は、御承知の通り、家内を持つて居りました。僅かな間で……たつた三年きりです。家内は産で亡くなりましたので。私は一人で生き残れないやうな氣がしました。恐ろしい悲しみに打ちのめされて、まるで死んだやうになつてゐましたが、泣くにも泣けないで——氣狂ひのやうに、無性に歩き廻つたものです。家内の亡骸には式の如く衣裳をつけて、卓の上に安置しました。——そら、この部屋なのです。やがて司祭が來、香僧が來て、歌つたり、祈つたり、香を焚いたりし始めました。私は額を床につけて禮拜しましたが、涙ひと滴出ればこそ、心はまるで化石したやうだし、頭もそれと同じなのです。——私は全身が妙に重くなつたやうな氣がしました。かうして、先づ一日過ぎました。本當にはな

さらないでせうが、その晩はすやくと眠つたくらゐで 翌朝、家内の傍へ行つて見ると——折から夏のこと、太陽が死體の頭から足の先きまで一杯に照りつけて、眩しいくらゐ。ふと見ると……(こゝでラチーロフは思はず身慄ひした。)あなた、どうでせう? 片方の目がよく閉いでゐなかつたので、その眼玉の上を蠅が歩いてゐるぢやありませんか……私はそのまゝ、棒倒しに倒れてしまひました。それから正氣づくが早いか、いきなり泣き出して、止め度なく泣き續けました……」

ラチーロフは口を噤んだ。私は先づ彼の顔を眺め、續いてオリガを見やつた……その時の彼女の表情は、死ぬまで忘れることが出來ないであらう。老母は絹物を膝に置いて、手提から手巾を取り出し、そつと涙の露を押し拭つた。フォードル・ミヘーイチは、急に立ち上がつて、例のヴァイオリンを引つ摺むと、しや嘎れた奇妙な聲で歌を唄ひ出した。大方わたしたちの氣を浮き立たせようといふつもりなのだらう。けれど、一同は先づその一聲を聞くなり、思はずびくりと身慄ひした。ラチーロフは靜かにしてくれと頼んだ。

「しかし。」とラチーロフは云つた。「すんだ事ですからね、今さら取り返しがつくわけぢやありません。それに、なんといつても……この世のことは、すべてだんく／＼良くなつて行くものですよ、

* 當時の露西亞では親兄弟間の結婚は宗教と法律で禁じられてゐたのである。(譯者)

たしかヴォルテールだつたかが云つたやうにね。」と彼は急いで附け足した。

「さうです。」と私は相槌を打つた。「勿論ですとも。その上どんな不仕合はせだつて、我慢しきれないといふことはないし、血路を開き得ないといふ窮地は、決してないものですよ。」

「さうお思ひになりますか？」とラチーロフは問ひ返した。「いや、或ひはお説の通りかも知れませんが、今でも覚えてゐますが、私は土耳其戦争に従軍したとき、半死半生の有様で病院に暫らく居りました。創傷熱にやられたのです。そりやもう、設備は完全だとは云へませんでした——何しろ戦場のことですからね——それでも收容されただけがまだしもなんで——ところが、またぞろ病傷者が擔ぎこまれました。——何處へ臥かしたものでらうと、軍醫は彼方此方と走り廻つたが——

場所が見つからない。やがてその中に、私の傍へやつて来て、看護手に、「生きとるか？」と訊ねる。するとこちらは、「今朝は生きて居りました。」と答へるのです。軍醫は屈みこんで、耳を澄ますと、私がまだ呼吸をしてゐるものだから、奴さんたうとう我慢しきれなくなつて、「いや、人間つて何といふ始末の悪い代物だ。全く今にもまゐりさうになつてゐて、必ず死ぬに決まつてゐるくせに、いつまでもひく／＼しながら引つばつて、たゞ場所塞ぎをして他の者の邪魔になるばかりだ。」と、かういふ云ひ卓なんです。そこで、私は腹の中で、「ミハイロ・ミハイリチ、お前もいよく、駄目ら

しいぞ……。」と自分で自分に云ひ聞かしたものです。ところがこんなに達者になつて、御覽の通り、今でも息災にして居ります。だから、つまりあなたの仰しやるのが本當なんですよ。」

「いづれにしても、私の云つたことは本當ですとも。」と私は答へた。「よしんば、あなたが死んでしまはれたにもせよ、とにかく、それは一方の血路を開いたわけですからね。」

「勿論ですとも、勿論ですとも。」拳固でどんと卓を強く叩きながら、彼はかう云ひ足した。「たゞ、一思ひにやりさへすればいいんです……窮地なんて、そんな事は無意味です……何もぐ／＼引つばつてゐる事はない……」

オリガはつと席を立つて、庭へ出てしまつた。

「おい、フェーチャー一つ踊れ！」とラチーロフは叫んだ。

フェーチャは躍り上がつて、見世物熊の周りをはやして歩く例の「山羊」と稱する道化のやうに、乙に氣取つた一種特別な足取りで、部屋の中をぐる／＼廻りながら、「わたしの家の門きはで」を唄ひ出した……

車寄せの邊りで、輕快な馬車の轍の音が聞こえたと思ふと、間もなく部屋の中へ背の高い、肩巾の廣い、がっちりした老人が入つて来た。郷士のオフィシャニコフである……ところが、オフィシャニ

コフはなか／＼風變はりな面白い人物なので、讀者のお許しを蒙つて、この男の話は改めて次の章へ譲ることにしよう。今はたゞ、私事に渡るけれど、その翌日エルモライと一緒に、夜の引き明けに狩りに出かけ、そのまゝ、獵場から家へ歸つたと、これだけ附け加へて置かう。——一週間経つて後、又ラチーロフの家へ立ち寄つたところ、主人もオリガも不在であつた。二週間ばかり過ぎた時、彼が突然姿を晦ましたといふ噂を聞いた。老母を打ち棄て、例の義妹と手に手をとつて、何處かへ行つてしまつたとのことである。縣内一圓に大騒ぎが始まつて、皆この出來事を取沙汰した。私はそのとき初めて、ラチーロフが身の上話をしてゐたときのオリガの表情を、はつきりと間違ひなく覺つたのである。そのとき彼女の顔に溢れてゐたのは、たゞの同情ばかりではなくて、嫉妬の炎も燃えてゐたのである。

いよく、田舎を引き上げようといふ前に、私はラチーロフの老母を見舞つた。彼女は客間に坐つて、フォードル・ミヘーイチと、子供らしい歌留多の勝負を闘はしてゐた。

「御子息から何か便りがありますか？」到頭、私はかう切り出した。

老母はさめ／＼と泣き出した。で、私はもうそれ以上、ラチーロフのことを根掘り葉掘りしなかつた。

郷士のオフシャニコフ

親愛なる讀者諸君、ひとつかういふ男を想像して見て頂きたい。年の頃は七十ばかり、肥つて背が高く、顔は幾らかクルイロフの面差しかほざしに似通ひ、長く垂れかゝつた眉毛の下に、澄んだ俐巧れいこうさうな眼を輝かし、物々しい態度をして、話し振りに落ちつきがあり、足取りはゆつたりしてゐる。これが前にちよつと紹介したオフシャニコフである。何時も袖の長い、ゆつたりした青い上着を着て、釦を上から下まできちんとかけ、瑠璃色の絹ハンカチを頸に巻き、てらく／＼に磨き上げた房つきの長靴を穿いてゐて、全體の様子が裕福な商人然としてゐた。手が眞つ白で、ふく／＼として、如何にも綺麗であつた。よく話の間に、上着の釦に手をかける癖があつた。オフシャニコフはその物々しいどつしり構へた態度と云ひ、不精なところと云ひ、一本氣で強情なところと云ひ、すべてひんぴョートル大帝前期の露西亞貴族を想ひ起こさせるのであつた……袴はかま無官廷服むくわんていふくを着たらさぞ似合ふだらうと思はれた。彼は舊時代の最後の人の一人であつた。近頃の人たちは、みんな彼を一方な

らず尊敬して、その知遇を名譽と心得てゐた。同じやうな郷土仲間の兄弟は、彼を殆ど神様のやうに崇めて、道で出會つても、遠くの方から帽子を脱ぐといふ有様で、彼を自慢の種にしてゐた。おしなべて云ふと、この地方では今に至るまで、こんな風の郷土と百姓との區別はつけ難いのである。世帯向きも百姓よりましとは云へないくらいで、仔牛は可哀さうな位ちつほけだし、馬は生きてゐるとは名ばかりで、馬具も縄で作つたのを使つてゐる。オフシヤニコフは別に金持ちといふ評判はとつてゐなかつたけれど、しかしこの一般原則の例外になつてゐた。夫婦二人きりで、居心地のいい小ざつぱりした家に住み、召使ひも小人數にして、露西亞風の服装をさせ、働き手と稱してゐた。この召使ひ連中が、主人の畑仕事をするのであつた。彼自身も敢へて貴族ぶりもしなければ、地主顔もしなかつた。つまり、所謂「身の程を忘れる」やうな事がなく、他家へ行つても直ぐに二つ返事で椅子に腰をかけようとせず、新しい客が入つて来ると、必ず一應は席を立つ。けれど、それが如何にも品位のある態度で、愛想のいい中にも堂々たる感じを帯びてゐるので、客の方でも我れ知らず感歎な會釋をするのであつた。オフシヤニコフは昔ながらのしきたりを守つてゐたけれど、何も迷信からではなく（彼は可成り自由な精神を持つてゐたので）、たゞ癖になつてゐるからである。たとへば彈條つきの馬車ばしを乗り心地が悪いと云つて嫌ひ、競走用の馬車か、何かでなければ

皮のクッションをつけた綺麗な小馬車に乗つて、自分で栗毛の逸物を馭してゐた（彼は栗毛馬しか飼はなかつた）。馭者は青つほい百姓外套を着て、革の帯をしめ、羊の毛皮で作つた低い帽子を被り、頭をお河童に刈り込んで、赤い頬つべたをした若者であつたが、これが恭々しげに主人と並らんで控へてゐるのである。オフシヤニコフは、いつも食事の後で一寝入りし、土曜日ごとに湯屋へ出かけて行き、たゞ宗教方面の書物ばかり讀んで（本を讀むとき、丸い銀縁眼鏡をさも鹿爪らしく鼻の上にのせる）、そして、いつも早寝の早起きであつた。けれども、頭髪はすつかり剃り落として、髪を獨逸風に刈り込んでゐた。客が来ると、喜んで愛想よく迎へたが、悪丁寧にお辭儀をしたり、あたふたと騒ぎ立てたり、それ乾物、それ漬物と、ありつたけのもので御馳走したりするやうなことはなかつた。「おい」彼は立たうともしないで、軽く配偶の方へ顔を向けながら、悠々たる調子でいふのであつた。「お客さま方に何かお美味いものを持つて来なさい。」書類は神様の授かりものと稱して、他人に賣り拂ふのを罪だと信じ切つてゐた。で、一八四〇年に、地方一圓の大飢饉で、麥の相場が恐ろしいほど跳ね上がった時、彼は近在の地主達に、自分の貯蔵をすつかり分配してやつたので、翌年みんなは感謝の言葉と共に、借りた穀類を現物で拂ひ戻したものである。オフシヤニコフのところには、よく近所隣りの者が分別を借りに来たり、仲裁を頼みに駆けついたりした。そ

して、いつも彼の裁きに服従し、その忠告を用ひるのであつた。彼の骨折りで、はつきりと境界定めをした者も少くなかつた……けれども、二三ど女地主運と喧嘩をしてからといふもの、御婦人たちの仲裁をするのは一切お断りだ、と云ひ出した。彼はばた／＼急いだり、そは／＼したりするのが大嫌ひで、女どものお喋りや「取越し苦勞」が我慢できなかつたのである。或る時、どうした事か、彼の家が火事になりかゝつたことがある。傭ひ男が慌てふためいて、「火事だ！火事だ！」と嗷鳴りながら、主人の部屋へ駈け込んだ時、オフシヤニコフは「ふむ、一體なにを嗷鳴り立てるんだ？」と落ちつき拂つて云つた。「俺の帽子と杖を寄越しなさい……」彼は自分で馬を乗馴らすのが好きであつた。ある時、氣の荒い牡馬が彼を乗せたまゝ、眞つしぐらに坂道を谷へむけて駈け出した。「これ、やめなさい、やめなさい、若駒つて仕様のないものだ——生命が無くなるぞよ。」とオフシヤニコフは言葉やさしく宥めたが、あわやといふ間に、馬車は後ろに乗つてゐた少童や、馬もろともに、谷へ雪崩れ落ちてしまつた。仕合はせと谷の底は砂溜まりになつてゐたので、誰も怪我をした者はなく、たゞ馬が脚の關節を外したばかりである。「それ、見るがいゝ。」地べたから身を起ししながら、オフシヤニコフは落ちつき拂つた調子で言葉をつゞけた。「わしの云はんこつちやない。」彼は配偶も自分**に**びつたりしたのを貰ひ當てた。タチャーナ・オリイニチナ・オフシヤニ

コフは、背の高い、物々しい様子をした、口數の少い女で、何時も肉桂色の絹の布で頭を包んでゐた。彼女は何となく冷たい感じがしたけれど、それかといつて、誰も嚴重し過ぎると云つてとかくの苦情を唱へる者もなかつた。それどころかおつ母さんとか、恩人とか云つて慕ふ貧乏人も少くなかつた。輪廓の整つた顔かたち、大きな黒い眼、薄い唇などは、かつて評判の高かつた彼女の美貌を、いまだに物語つてゐるのであつた。オフシヤニコフには子供がなかつた。

讀者の既に承知して居られる通り、私はこの男とラチーロフの家で知合ひになつたのであるが、それから二日経つて、訪問に行つて見た。彼は折よく在宅であつた。大きな皮の肘椅子に腰をかけた、殉教者傳を讀んでゐた。灰色をした猫がその肩の上で咽喉をごろ／＼鳴らしてゐた。彼はいつもの辭で、愛想はいゝけれど、さも重々しい態度で私を迎へた。二人は心置きなく話し始めた。

「どうか、ルカー・ペトローギッチ、腹藏のないところを聞かして下さい。」と私は何かの話の序にかう云つた。「以前あなたなどの若かつた時の方が、今より世の中はよかつたでせうね？」

「そりや、中には全く今よりいゝこともありましたよ。」とオフシヤニコフは答へた。「世の中がしづかで、氣樂なことが多かつたですよ、全く……が、それにしても、今の方がやつぱりよろしいですな。これで孫子の代となれば、もつとよくなるでせうよ、きつとね。」

「ところが、わたしはね、ルカー・ペトロギッチ、あなたが昔のことを自慢なさるだらうと思つてましたよ。」

「いや、昔のことは取り立てて自慢するがものではありません。まあ、早い話が、あなたはいま現に、亡くなられたお祖父さまと同じやうに、れつきとした地主様であつしやるけれど、それでも、もうあれだけの威勢はお持てになれませんよ！ それに、あなたご自身からして、まるでお人柄が別ですからね。私たちは今でもほかの地主たちに壓されてをりますが、それはどうも致し方のないことらしいございます。辛抱してゐるうちに、何とかものにならうといふ道理でしてな。いや、何にしても、私が若い時分にさんく見て来たやうなことは、今ときもう二度と見るわけに参りませんよ。」

「例へば、どんなことでせう？」

「それでは物の譬に、またお祖父さまのことをお話しませう。實に豪いご威勢の方でしてな！ われわれ仲間は随分いぢめられたものです。いづれご承知でもありませうが——いや、ご自分の地所をお知りにならないといふわけはない——チェブルイギノからマリーニノへかけて、楔形に食ひ込んでゐる地所ですな……今、お宅では燕麦を作つていらつしやいますが……實は、あの土地は私ど

ものものなんで——そつくり私どもの持ち地だつたのを、お祖父さまが取り上げておしまひになつたのですよ、ある時、馬に乗つてお出かけになりますとな、あの地所を手でさして、これは俺の持ち地だ、と仰しやつて、そのまゝ、自分のものにしておしまひになりました。亡くなつた親父は（なにとぞ天國に安らはせ給へ！）やはり潤滑の強い質で、正直一途の人間でしたから、我慢しきれないで——それに誰にしたつて、みすく自分の財産を取られて嬉しいものはありませんでね——裁判所へ訴訟沙汰にしたのです。それをやつたのは親父ひとりで、ほかの連中は後難を恐れて、尻込みしてしまつた譯です。すると、「ビョートル・オフシャニコフがあなたを訴へた、地面をお取り上げになつたと云つて訴訟を起こした」……とお祖父さまに注進したものが……お祖父さまは早速わたくしどもの家へ、獵師のbauerシユに手下のものをつけてお寄越しになつたのです……bauerシユはいきなり親父を掴まへて、ご領地の方へ引き立てて参りました。私はその頃、ほんの餓鬼でしたが、跳足で親父の後を追つたものです。ところで、どうでせう？……親父はお邸の傍へ引いて行かれて、窓の下で打ち打擲されるぢやありませんか。お祖父さまはバルコンに立つて、それを見物です。お祖母さまもやはり窓の下に腰をかけて、眺めていらつしやる。親父は「奥さま、マリヤ・ヴशीリエヅナ、どうぞお取りなしを願ひます、せめてあなただけでも、私を可哀さうと

思つて下さいまし！」と喚くのですが、お祖母さまはたゞ首をさし伸べたまゝ、見物に餘念がないのです。かうして親父はあの地所から手を引くといふ約束をさせられて、無事に釋して貰つたお禮まで云はされたものですよ。かういふ風で、土地はそのまま、お宅のものになつてしまひました。まあひとつ、お宅の百姓どもに、あの地所をなんと云ふか、訊いてご覧なさいまし。「棍棒が原」と云つてをりますが、つまり棍棒で殴り取つたといふわけなんです。ま、かういつたやうな次第で、われ／＼小前の連中はあんまり昔の風習を、懐かしがるわけに行かないんです。」

私はオフシャニコフに何と答へたらいいか分からず、その顔を見る氣力さへなかつた。

「かと思ふと、その時分もう一人近所にコモフといふ地主がをりました——スチエバン・ニクトボリオーマイチといふ呼び名でした。これがすつかり親父を惱ましぬいたもので。あの手でなければこの手といふやり方でね。恐ろしい飲んでしてな、人に飲ませるのが好きでした。酔ひが廻つて來ると、佛蘭西語で「善哉」とか何とか云ひながら、べろ／＼と唇を舐め廻す——いやはや、お話にならぬ體たらくなんです！ 近所の地主連のところへ、どうかおいでを願ひたいと使ひを出し廻るので、三頭立がいつもちやんと用意してある。もし招待に應じなければ、すぐに自分で押しかけて來るのです……實に變はつた男でしてな！「素面」のときは大して法曝を吹くわけでもないけれど、一杯ひつかけるとさつそく、やれ彼得堡のフォンタンカに家が三軒ある、一軒は煙突のついた赤い家で、いま一軒は二本煙突の黄色い家、もう一軒は煙突なしの青い家だとか、やれ、息子が三人あつて（そのくせご當人、結婚したこともないので）、一人は歩兵で、一人は騎兵に勤め、あとの一人は自分で一本立ちになつてゐるとか、そんな話をはじめなのです……それから、云ふことがいゝでせう、三人の息子がそれぞれ一軒づゝの家に陣取つて、長男のところへは海軍の將官連がぞろ／＼押しかけて來るし、次男のところへは陸軍の將官連がわんさと訪ねて來るし、三男のところへは英國人が始終やつてくる、とかうなんです！ さうかうする中に、立ちあがつて、「長男の健康を祝して乾杯しよう、あれは一番親孝行なやつでな！」と云つて、おい／＼泣き出す。誰にもせよ、いやだなどと云ふものがあつたら、それこそ大變、「射ち殺してくれ、埋葬もさすことぢやないぞ！」と叫鳴る。かと思ふと、今度は跳り上がつて、「さあ、踊れ、皆の衆、自分も楽しみ、俺も娛しませて貰はう！」さあ、かうなると、踊らないわけに行かない、たとへ死んでも踊らなければなりません。百姓の娘どもはそれこそくた／＼になるほど、苛め抜かれるのです。よく懸け値なしに、朝までコーラスを歌ひ通して、一ばん高い聲を出した者にはご褒美が出る。みんなが疲れて來ると、

両手で頭をかへて、「あゝ、俺のやうに頼りない身の上はない、こんな可哀さうな人間をみんなが

構つてくれない！」と掻き口説く。すると早速、馬丁たちが娘どもに氣つけを食らはせる、といふ譯です。厄介なことに、うちの親父がその男の氣に入りましてね、なんとも始末がつかないのですよ！親父はお蔭で、危く棺の中へ突つ込まれないばかりの目にあひました。全く冗談でなしに、殺されてしまつたかも知れないのですが、有難いことに、當人の方がごろりと往つてくれました。酔つばらつて鳩小舎から墜つこちたので……まあ、こんな風の連中ばかりでしたよ、以前この近所にゐた地主連は——」

「ずるぶん世の中が變はつたものですね！」と私は云つた。

「さうですとも、さうですとも。」とオファシニコフは合槌を打つた。「が、さうはいふものの、昔の貴族たちは今よりすつと派手な暮らしをしてをつたものですよ。都會の大貴族のことなどは、改めて云ふがものではありません。私も莫斯科で、さういふ人たちを飽き飽きするほど見ましたからね。今ちやあちらでも、あゝいふ人たちが絶えてしまつたといふ噂ですな。」

「莫斯科へおいでになつたことがあるのですか？」

「ありますよ、昔、ずるぶん昔の話です。私は今年とつて七十三ですが、莫斯科へ行つたのは、十六の年でしたからな。」

「オファシニコフは溜め息をついた。」

「あちらでどんな人にお會ひになりました？」

「いろんな大頭株を見ましたよ——また誰でも見られましたのでな。みんな開けつびろけに、人が見て驚くほど派手な暮らしをしてをりましたよ。たゞ亡くなられたアレクセイ・ドリゴリーエギッチ・オルロフ・チエスマンスキイ伯爵だけには、誰も敵ふものがありませんでした。アレクセイ・ドリゴリーエギッチは私もよくお見受けしました。伯父が侍僕頭をしてをりましたのでな。伯爵はカルーガ門に近いシャイボロフカに、お邸を構へてをられました。あれこそ本當の大貴族でしたな！あの威風あたりを拂ふご様子、あの物柔らかなお愛想のいゝ態度は、筆にも言葉にも盡くせない程でした。堂々たるお身丈だけでも大したもの、力に充ちたお眼もと！——なんとも云へませんでしたな。お人がらを知らない中は、とても傍に寄れないやうな氣がするほどの方で——恐ろしくつて、氣おくれがするくらゐなのです。ところが、一旦お傍へ寄つてしまふと——まるでお日様に暖められてゐるやうな氣持ちで、すつかり浮き浮きしてまゐります。どんな人間でも必ずお身近へお寄せになりましてな、何でもお好きでいらつしやいました。競馬などでもご自分でお騎りになつて、みんなと競走なさるのです。決して一息に抜いてしまつて、相手に恥ぢを掻かしたり、氣落

ちさせたりするやうなことをなさらない。たゞいよくおしまひといふ頃に追ひ越しなされるのです。が、まことにお愛想がよくつて、相手を慰めたり、馬を賞めたりなさるのです。例の宙返りをする鳩なども、飛び切り上等のを飼つてをられましたな。よく庭へお出ましになつて、肘椅子に腰をお下ろしになると、鳩を飛ばしてみろとお云ひつけになる。まはりの屋根には、家來がたが鐵砲を構へて、大鷹が襲つて来るのを防いでゐる。伯爵の足もとに、銀の盥に水を入れたのを据ゑて置くと、御前は水に映る鳩の影をご覧になるといふ段取りです。貧乏人や乞食など、何百人といつて伯爵家のお寮所で食ひ扶持にありついてをりましたつけ……まあ、どれだけのお金も伯爵の手を通つて流れて出たことやら！ それで、一旦お腹立ちとなると——まるで雷さまでも落ちたやうで、それはそれは恐ろしいことでしたが、泣く程のことではない、見てる間に、もうにこ／＼顔になつていらつしやる。さて、宴會の催しとなると——それこそ莫斯科中のものを集めて大盤ぶるまひですよ……しかも、大した智者者でしてな！ 土耳其を征伐したのもこの方でした。相撲もやはりお好きでして、トゥーラとか、ハリコフとか、タムボフとか、所々方々から力士をお呼び寄せになる。御前様の方がお勝ちになつても、褒美が出るのですが、もし御前様を負かすものがあつたら、それこそ大變なお引き出もので、おまけに唇へ接吻までなさる……それから、これも私が莫斯科に滞在して

ゐるうちにあつたことですが、それまで露西亞で例のないやうな獵をお催しになりました。全国の狩獵家をありたけ残らずお招きになつて、日取りもちやんとお決めになり、三箇月の猶豫をお置きになりました。やがて、ぞろ／＼と集まつて来たわ、来たわ。みんな犬や獵師を引きつれてゐるの、まるで軍隊が乗り込んだやうな騒ぎでしたよ、全く軍隊ですな！ 初めまづ然るべく酒もりがあつて、さてそれから、見附け外へ繰り出しました。その總勢まるで雲霞の如き有様でしたよ！

ところで、どうでせう？……あなたのお祖父さまの犬が、一番がけの功名を立てましたぜ。」

「美貌ぢやありませんでしたか？」と私は訊ねた。

「その美貌です、美貌です……そこで伯爵が、お祖父さまを掴まへて、「どうか君の犬を賣つてくれないか、代は何ほどでも進呈するから」とご執心になつたものです。すると、「いけません、伯爵、私は商人ぢやございませんから、不用の襤褸一つだつて賣るといふ譯には参りません、尤も、意地づくなら、女房を譲るくらゐの覺悟はありますけれど、美貌だけは眞つ平です……あれを進呈するくらゐなら、いつそ自身が虜になつた方がましな程です。」といふご返事。すると、アレクセイ・ドリゴリーエギッチは大變感心なすつて、「いや、氣に入つた」と仰せになりました。お祖父さまは美貌を馬車に乗せてお連れ歸りになりましたが、その犬が死んだ時には樂隊に吹奏させて、

お庭に埋葬なすつたもので——たかが牝犬一匹、このやうにしてお葬ひになつて、その上に立派な銘を彫つた碑をお建てになりましたつけ。」

そらご覽なさい、フレクセイ・グリゴリーエギッチなどはその通り、誰も苛めはなさらなかつたぢやありませんか。」と私は口を入れた。

「さやう、それはいつもさうしたもので、浅いところを泳いでゐるやうな雑魚に限つて、空威張りをしたがるものです。」

「お話のバウーシユといふのは、一體どんな男だつたのです？」暫らく無言の後に、私はかう訊ねた。

「これは又、どうしたことです、美貌いさかひのことをお聞き及びで、バウーシユのことをご存じないとは？……あれはお祖父さまの獵師頭で、獵犬いぬの仕込み係りでしたよ。お祖父さまは美貌いさかひに劣らな
い程、この男をご寵愛になりました。向かう見ずの男でしたな、お祖父のお云ひつけでしたら、どんなことでも即座にやつてのけて、火の中でも水の中でも飛び込まうといふ質しつでしたよ……そいつが犬を咬かしかけると——それこそ森の中ちうが、獵犬いぬどもの唸り聲で鳴りどよよすといふ勢いきほひ。ところが、一旦やつが強情を張り出すと、もう馬から下りてしまつて、ごろりと横になる……かうな

ると、犬どもはやつの聲が聞こえないものだから——もう萬事休す！ みす／＼分かつてゐる獸の足跡も打つちやらかして、どんな餌で釣つても、獲物を追はうとしない。さあ、お祖父は腹をお立てになるのならないの！「あののらくら者を纏まとり首にしてやらなけりや、生きてゐる甲斐がない！」でも、とゞのつまりは、バウーシユのところへご家來をおやりになつて、一たい何が氣に入らないのか、どうして犬を咬かしかけないのか、お訊ねになる。すると、バウーシユは大抵かういふ場合に酒を註文して一杯ひつかけると、のこ／＼起き上がつて、また景氣よく掛け聲を始めるといふ寸法で。」

「あなたもやはり獵はお好きのやうですね、ルカー・ペトロギッチ？」

「好きなことは好きですけれど……全く——したが今はやりません。今ではもう私などの出幕は済んでしまひましたでな——ところが、若い頃は……しかしお察しでもありませんが、どうも具合が悪いですな、何しろ身分違ひなので、われ／＼風情が貴族がたの眞似をするわけにはゆきませんでな。成る程、我々の仲間でも、飲んだくれの能なしのくせに、大地主連と交際まじふやうなものも居りますが……さて、それが何の楽しみになりませうぞ！……たゞ、自分の恥ぢをさらすばかりですよ。」

狩り仲間に入つても、やくざな跋馬を當てがはれて、のべつ帽子を地べたへ跳ね飛ばされる、馬を打つやうな振りをして、しよつちう鞭の先きを食らはされる。そして當人はのべつえへらくと笑ひながら、みんなの笑ひ草になつてゐるのですからな。いや、全くのところ、身分が低ければ低いほど、わが身の態度も慎しまんと、反つて恥ぢをかくばかりですよ。」

「さやう、」とオフシヤニコフは溜め息つくく言葉が続けた。「私がこの世を渡つて來てからも、ずるぶん世間の様子が變はつてしまつて、すつかり別の時世になりましたよ。とり分け、貴方がたの變はりやうと云つたら、全く大變なものですわい。小地主連はお役所務めなんかして、ちつと自分の地所に落ちついてゐるものは少しいし、少し大きいところになると、まるで昔の面影はありやしません。私はこの連中、つまり大地主連を、境界定めの時につくく眺めて見ましたが、正直なお話が、その變はりやうを見て、芯から嬉しくなつたものです。態度が慇懃で、萬事鄭重なのでな。たゞ不思議に思つたのは、いろんな學問を納めて、話しぶりなど實に調子がよくて、聞いてゐても有難いくらゐるだが、さて、本當の仕事となると、空つきしお先き眞つ暗で、自分の得になることさへ分らないのですからな。現在、自分が百姓から取り立ててやつた番頭づれに、勝手放題な事をされて、いゝお玩具になつてゐる。現に御存じかもしれませんが、アレクサンドル・ウラヂー

モロキッチ・コロリョフなども、どこから見たつて立派な貴族でせう？ 押し出しも好しい、金は持つてゐるし、大學で勉強もしたらしいし、外國にも行つたことがある。辯舌も爽やかで、しかも威張つたところがなく、私どもにも一々握手して下さる。あなたも御存じでせう？……な、そこで一つ聞いて頂きますが、先週、私たちは仲人のニキーフォル・イリイチに招かれて、ペレゾフカへ集まつたことがあります。そこで仲人のニキーフォル・イリイチが云ふことには、「皆さん、地境はちやんと決めてしまはなければなりません。よその區ではみんなちやんと決まりをつけてゐるのに、當區だけが後れてゐるのは醜態と云ふものです。さつそく仕事にかゝらうではありませんか。」かういふわけで、仕事にとりかゝつて見ると、例の如く小田原評定や口論が始まつて、私どもの代理人などは打つ毀しまで始めるといふ始末です。しかし、一番に亂暴をおつはじめたのはボルフイ・イリイ・オベチニコフなんで、あの男、なんだつてあゝ暴れるんでせう？……自分は猫の類ほどの地面も持つてをらんくせに、兄貴の代はりに差し出がましい口を利くのですからな。」駄目だ！ お前らなんぞの手に乗つてたまるものか！ どつこい、少しばかり相手が違ふぞ！ 圖面を寄越せ！ 測量師を此處へ呼んで來い、あの圖々しいべてん師を呼びつけて貰はう！」と嗷鳴り出す。「まあ一體お前さん、どうして欲しいと云ふのだね？」へん人を馬鹿扱ひにして、見損なつちやいけな

「いーわしが直ぐこの場で、實はかういふ風にして貰ひたいのだと、いきなりお前さん方にぶちまけるとでも思つてゐるのか？……駄目だよ、とにかく圖面をこつちへ借して貰はう——これなんだよ」と云ひながら、拳固で圖面の上をどん／＼敲くといふ始末。マルファ・ドミートリエヅナなどは、手ひどい恥ぢをかゝれました。そこで「どうしてあなたは妾の評判を落とすやうな眞似をなさるんです？」と喚き出すと、「わしはお前さんの評判など、うちの栗毛馬にだつて眞つぴら御免蒙りたい位だ。」とやり返す。やつとのことで赤葡萄酒を飲ませて酔ひつゝしてしまひましたが、こつちを納めたかと思ふと、今度は他の奴等がこゝで始めるのです。例のアレクサンドル・ウラヂーミロキッチ・コロリョフ先生は隅つこにちつと坐り込んだまゝ、杖の握りを嚙みながら、しきりに頭を振つてござる。私は妙に氣がさして、終ひにはその場を逃げ出したいくらい、やり切れなくなつて來ました。一體この人は我々の事をどう考へてゐるのだらう？と思ひましてな。見ると、不意にアレクサンドル・ウラヂーミロキッチは何か一言ありさうな素振りをしてゐる。仲人は慌て出して、「皆さん、皆さん、アレクサンドル・ウラヂーミロキッチがお話をなさるさうです。」と云ふと、さすが貴族がたは感心なもので、直ぐにひつそりと靜まつてしまひました。さて、アレクサンドル・ウラヂーミロキッチが口を切つて申されますには、我々は何のために集まつたか、肝心の目

的を忘れてゐる、境界定めは云ふまでもなく、地主連のためになることには相違ないけれども、打ち割つた話、何のためにこんな事が始まつたかと云ふと——他でもない、百姓に樂をさせてやらう、働きたい、やうにしてやらう、義務労働に便宜を計つてやらう、といふのが目的だつたのだ。今のやうな有様では、百姓たちは自分の地所さへ知らないで、五露里も先きへ野良仕事に出掛けるやうな事も珍らしくない。——これぢや百姓を責めるわけにいかんぢやないか。それからアレクサンドル・ウラヂーミロキッチは、かうも云はれました。地主として農民の幸福を心配してやらないのは罪な事だし、第一、とつくりと考へてみれば、百姓の利益も我々地主の利益も、結局は一つもので、彼方がよければこつちもよし、彼方が困ればこつちも困る……だから、些細なことを楯にとつて、みんなが折り合はないのは、罪なことでもあるし、無分別なことと云はなければならぬ……といつた按配で、どこまでも際限なしにまくし立てる……しかも、その辯舌の達者なこと——まるで腹の底まで掻き廻されるやうな氣がしましたよ……貴族連中もみんな悄氣返つてしまふし、かういふ私なども、全くの話が、すんでの事で涙をこぼさないばかり。本當のところ、昔の本にだつて、ああいふ立派な話は滅多に載つてをりません……で、結局どうなつたと思ひになります？。その演説をした肝心の御當人が、四町歩の苔沼を譲らうとしないし、賣るのも厭だと來るぢやありません

んか。しかも、その云ひ草がかうなんです。「私はあの沼を自分の領地の百姓に濁し上げさせて、そこに何から何まで設備の整った羅紗工場を建てたんだ。あの地所はもうちやんと選定してあるの、それについては私にも自分相當の考へがあるから……」とかうなんです。それも筋道の通つた事ならまだしも、聞いてみれば何の事だ——アレクサンドル・ウラヂーミロキッチの隣り村の地主で、アントン・カラシコフといふ人が吝をして、コロリョフ家の番頭に百留のつけ届けをしなかつたが因なので。かういつた次第で、私たちは何一つ仕出来さないで、そのまゝ散會してしまひました。アレクサンドル・ウラヂーミロキッチは、今でもやつぱり自分の云ひ分が本當だと思つて、始終羅紗工場の話をして居りますが、沼を濁す方はまだ仕事にかゝつてをりませんよ。」

「ところで、その人は自分の領地内では、どんな遣り方をしてゐます？」

「後から後からと新しい事はばかり始めてをりますよ。百姓どもはとやかく申しますが、なに、あんな連中の云ふことに、耳を藉す必要はありません。アレクサンドル・ウラヂーミロキッチの遣り方が本當ですよ。」

「それはどうしたことです、ルカー・ペトロギッチ？　あなたは昔風を守つて　つしやるものと思ひましたが？」

「私は話が別です。私は貴族でもなければ、地主でもありません。私の世帯などお話になりませんよ！……それに、私は今よりほかの遣り方が出来ないのです。たゞ、道理と掟を踏み外さないやうに心がけてをりますが、それだけのことで、出来れば結構ですよ！　若い地主たちは昔風をお嫌ひなさるが、私はそれを結構だと思つてをります……そろ／＼頭を働かしてもいゝ頃ですかな。ただ困つたことには、若い人たちは恐ろしく理窟ばつたことが好きで、百姓をまるで人形同様に扱つて、さん／＼捻くり廻した揚句、こはしておつほり出すのが落ちなんです。で、百姓あがりの番頭か、でなければ獨逸生まれの支配人が、元々通り百姓どもを締め上げるといふ段取りです。今の若い人の中での一人でも、「それ、領地の経営はかういふ風にやるものだ！」と云つて、お手本を見せてくれる人がありますか？……これは結局どうなるんでせう？　一體わたしは新しい時勢といふものを見ないで、このまゝ死んでしまふのでせうか？……譬へにもさう云ふぢやありませんか——古いものは死に絶えたが、新しいものはまだ生まれなかつて！」

私はオフシャニコフに何と返事をしていゝか、分からなかつた。彼はあたりを見廻して、私の方へびつたり寄り添ひながら、聲を潜めて話し續けた。

「ときに、ヴシーライ・ニコライチ・リュボズヴォーノフの話をお聞きになりましたか？」

「いや、聞きません。」

「實に奇體なことで、一體どういふ譯か、よく納得のゆくやうに説明して頂きたいもので。ほとほと合點がゆきかねます。あの人の領地内の百姓が話して聞かせたのですが、その云ふことが腑に落ちかねます。ご承知の通りまだ若い人で、近ごろお母さんが亡くなられたために、遺産相続をなさつたばかりです。これが自分の領地へやつて來たので、百姓たちは新らしい且那を拜まうと思つてぞろ／＼集まつて來た。やがてグシーリイ・ニコライイチがお出ましになる。見ると百姓どもは驚いた！——且那さまがまるで馭者のやうな綿天鵞絨のズボン（綿天鵞絨）を穿いて、縁飾りのある長靴を穿いていらつしやる。それに赤い襦袢（襦袢）を着込んで、その上からこれもやはり馭者風俗の長上衣といふ粉装（粉装）。頰は長く伸ばして、頭には奇妙きつな帽子を被つてゐるが、その顔がまた挺妙來で、酔つぱらつてるのかと思へば、さうでもない。が、とにかく正氣とは見えないのです。」「ご機嫌よう、皆の衆！」と聲がかかる。「お前たちも變はりはないかね。」百姓たちは腰を二重に折つてお辭儀をするが、みんな歐（欧）りなのです。つまり、氣おくれがしたんです。且那の方もどうやらびく／＼ものらしい。やがて一場の演説が始まる。「私は露西亞人だ、またお前たちも露西亞人だ。私は露西亞のものなら何でも好きだ……私は露西亞魂を持つてゐるし、私の體の中を流れてゐる血も露西亞のも

のだ……」などと云つてる中に、突然かう號令がかつたものです。「さあ、皆の衆、一つ露西亞の民謡をうたつてくれんか！」百姓どもは足の筋が引つ吊つて、頭がぼうとなつてしまつた。一人だけ度胸のいゝのが、何やら歌ひ出したけれど、すぐに地べたに蹲み込んで、ほかの連中の蔭に隠れてしまつた……そこで、どうも不思議でたまらないのは、ほかでもない。この界隈には向かう見ずな亂暴者で、札つきの道樂者といつたやうな地主も偶々をりました。全く馭者と間違ひさうな服装をして、自分で露西亞風の踊りををどつたり、ギターを弾いたり、歌をうたつたり、下男どもと一杯やつたり、百姓相手に酒もりをしたり、といふやうな有様でした。けれど、グントリイ・ニコライイチはそれと事かはつて、まるで年ごろの娘のやうに音なしくつて、いつも本を讀むか書きものをなさるばかり、さもなければ、大きな聲で讚美歌をうたつてゐるといふ風で——誰とも一切話しをせず、人を避けるやうに避けるやうにして、たゞもう頻りに庭などを散歩してゐられる。その様子は氣分が淋しいのか、それとも悲しいのかと思はれるやうな按配。前々から勤めてゐた番頭などは、初めの間すつかり憎え上がったもので、グシーリイ・ニコライイチが村へお着きになる前に、百姓どもの家を一軒々廻つて歩いて、みんなにべこ／＼お辭儀をするといふ始末（始末）でしたよ。——つまり、脛に傷もつ足といふやつですな！——そこで百姓どもも新らしい且那を頼みにして、「く

そ、その手に乗るものか！ 今度こそ貴様にすつかり泥を吐かせてやるぞ。今に貴様、ぎょう／＼いふ目に遭はされるんだぞ、この古狸め！……」ところが、案に相違の結果となりました——さあ、何と申し上げたら宜しいか？ 神さまだつて、あれがどういふ事になつたのか、お判じがつかかねるくらゐでせうよ！ ヴシーリー・ニコライイチは番頭を居間へお呼び寄せになつたが、自分の方から顔を赤くしながら、こんな風に息をはずませ、何を云ひ出すかと思ふと、「必ず公平にやつて貰はなくちやいけない。誰も壓迫することはならぬぞ、いゝか？」とたゞこれきりで、それ以來ついで一度も番頭をお召しになつたことがない！ ご自分の領地に暮らしてゐながら、まるで他所の人間も同じことなので。そこで番頭はほつと息をついた。百姓どもはヴシーリー・ニコライイチのお傍などへ寄りつかうともしない、恐ろしいのでな。それから、こゝにもう一つ、不思議なことがあればあるもので、旦那さまの方が百姓に頭を下けて、愛想のいゝ顔つきをなさるのに、百姓は恐ろしさに鼻丸が縮み上がるといふ始末。一體なんといふ不思議な話でございませうな、一つご意見が伺ひたいもので！……それとも、私が年をとつて馬鹿になつたのでせうか——ふつ／＼合點が参りませんで。」

私はオフシヤニコフに、多分リュボズヴォーノフ氏は病氣なのだらう、と答へた。

「何が病氣なものですか！ 横の方が縦より大きいくらゐ肥つて、顔などもなか／＼堂々たるものでしてな、年こそ若いけれど、頭から頬へかけてぐるりと髯を生やしてゐるほどで……尤も、そんなことなど、どうだつて構ひませんよ」（オフシヤニコフはかう云つて深い溜め息をついた。）

「まあ、貴族連中の話はそれくらゐにして、」と私は口を切つた。「郷士のことについては、どういふ御意見をお持ちですね、ルカー・ペローギッチ？」

「いや、もうそれだけは御免蒙ります。」と彼はせき込んで云つた。「賢のところ……私の意見を申せば……なに、こんな話をしたつて始まりません（オフシヤニコフは片手を振つた）。それよりかお茶でも飲みませう……百姓はやつぱり百姓ですからな。尤も、正直なところを申し上げると、私どももどうしたら好いものかと迷つて居りますよ。」

彼は口を噤んだ。そこへお茶が出た。タチャーナ・イリイニチナは自分の席を立つて、私たちの傍に腰を下ろした。この晩彼女はのべつ何度も、そつと音のせぬやうに部屋を出ては、また物靜かに引つ返して來るのであつた。部屋の中には靜寂が立ち罩めてゐた。オフシヤニコフは勿體らしい様子で、ゆつ／＼とお茶を何杯もかへて飲んだ。

「ミートチャが今日まゐりましてね。」とタチャーナ・イリイニチナが低聲で教へた。

オフシャニコフは眉をひそめた。

「何の用だね？」

「お詫びにまわりましたので。」

オフシャニコフは頭を振つた。

「ねえ、一つ考へてみて下さい。」私の方へ振り向きながら、彼は言葉を續けた。「一體親戚の連中はどう始末したらいいのでせうな？ 知らん顔をして澄ましてゐるわけにも行かんし……現に私もなんの因果か、甥を一人持つて居りましてな、頭もいゝし、元氣のいゝ若い者で、學問もあり、申し分はないのですが、それでゐて一向に先きの見込みがありません。お役所で暫らく務めてゐたと思ふと、それも止めてしまひました。何分出世の道が塞がつてをりまして……もと／＼貴族とは違ひますからな。又その貴族がただつて、直ぐいきなり閣下にしてもらへるとは行きませんよ。かういふ譯で、いま職を離れてぶら／＼して居りますが……それだけならまだしものこと、三百代言の仲間入りをしてしまひましてな？ 百姓どもに願書を作つてやつたり、報告書を書いてやつたり、百姓監督に入れ智恵をしたり、測量師のあらを拾つたりして、居酒屋などを飲み廻り、町の職人や門番などと旅館あたりで懇ろにするといふ有様、これちや間違ひが起こるに決まつてゐます！ 村

の警部の町の署長さん方からお目玉を頂戴したことも、もう一度や二度ちやありません。ところが、仕合はせと奴は郵口が上手なので、警察の人たちを笑はした揚句、後では結局、みんなを手古摺らしてしまふのです……まあ、こんな話はこれくらゐにして、あいつは今お前の部屋に坐り込んでゐるんぢやないかな？」と、彼は配偶の方へ振りむいて、かうつけ足した。「なに、お前のやり口はちやんと分かつてゐる。お前は情に脆い性質だから、何かにつけて彼奴をかばふのだ。」

「タチャイナ・イリイニチナは眼を伏せて、につこり笑ひながら顔を赧らめた。

「あ、やつぱり圖屋だ。」とオフシャニコフは言葉を續けた。「やれ／＼、お前はどうも甘くて困るわい！ まあ、こゝへ来いと云ひなさい——仕方がない、珍客様に免じて、阿呆めを放してやらう……さあ、さう云つて來なさい、さう云つて來なさい……」

「タチャイナ・イリイニチナは戸の傍へ行つて、「ミーチャ」と呼んだ。

「ミーチャは背の高い、すちりとした、長い毛の渦巻いてゐる、二十八九の若者で、部屋へ入りかけて私を見るなり、鬨ぎはに立ち止まつた。獨逸風の服を着てゐたが、やけに大きい肩の鬘を見ただけで、これを仕立てたのがたゞの露西亞人でなくて、大時代の露西亞人だといふ事が、一目にそれと知れるのであつた。」

「さあ、傍へ寄らんか、傍へ寄らんか。」と老人は口を切つた。「何を含羞はにかんでゐるのだ？ 伯母さんに禮を云ふがい、お詫びが叶つたのだから……では、あなた、御紹介いたしますが、」とミーチャを指さしながら言葉を續ける。「これは私にとつて親身の甥なんです、けれど、何とも手に負へないやつで、世も末になつてしまひましたよ！」（私達は互ひに會釋を交はした。）「さて、一體どんな不しだらを働いて來たか、それを俺おれに話して聞かせなさい。なんだつて皆が尻を持つて來るのか、そのわけを云ひなさい。」

ミーチャは私を前にさし置いて、事情を話したり、云ひわけしたりする氣にならなしかつた。「後でしますよ、伯父さん。」と彼は口の中で云つた。

「いや、後ぢやいけない、いま話せ。」と伯父は言葉を續けた。「俺にはちやんと分かつてゐる、お前はこの旦那の手前が恥づかしいんだらう。それなら勿怪むづかの幸ひだ——い、懲らしめになるからな。さあ、さあ、話せ……みんなで聞いてやる。」

「私は何も含羞はにかむことなんかありませんよ。」とミーチャは元氣よく口を切つて、頭を一振りふつた。「まあ伯父さん、考へてもみて下さい。私の所へシェーチーロヴォの郷士連がやつて來て、「どうか加勢してくれ」といふんです。』どうしたのだ』と訊くと、『實はかういふ譯なのだ。わし等の村の穀倉

はちやんと規則通りになつてゐて、あれ以上きちんと出來ない位なのだが、そこへひよつこり役人がやつて來て、お上の命令で倉を檢査に來たと云ふ。見せてやると、お前たちの倉は規則通りになつてをらん、いろ／＼容易ならん手ぬかりがあるから、然るべき筋へ報告しなかりやならん、とかう云ふのだ。一體どんな手ぬかりで？ と訊ねると、それはこつちだけの知つた事だ、といふ挨拶なので……そこで、わし等は集まりを聞いて、その役人にうまく鼻薬を嗅がせようといふことに評議が一決した。ところが、ブローホルイチ老人が邪魔を入れて、それでは奴等を増長させるばかりだ。本當に何といふ事だ？ 一體わし等には正しいお裁きを受ける權利がないのか？……と云ひ出したので、わし等も老人の云ふ通りにしたわけさ。すると、役人はかん／＼に怒つて、報告を書いてお上に訴へた。そこで、今わし等はその申し開きをしなかりやならん事になつた。』で、私は「本當にお前さん方の倉は規則通りになつてゐるのかね？」と訊くと、『そりや神様も御照覽だ、規則通りになつてをらいでか。法律で定められただけの穀高も納まつてゐる……』「いや、それなら何もびくする事はないぢやないか。』と云つて願書を作つてやつたわけです……まだ今のところ、どちらの勝訴になるか分かりませんがね……この事件のどこが悪くつて、伯父さんの所へ私の尻を持つて來たんでせう——尤も、無理もない話ですよ。誰だつて我身が一番可愛い、んですからね。」

「誰だつてさうに遠ひないが、お前だけは別物らしい。」と老人は低聲で云つた。「それならシエトロ
トモゾの百姓連と、どんな小細工をやつてゐるのだ！」

「それをどうして御存じでせうね？」

「云ひ出すからには、知つてゐるのが当たり前だ。」

「それだつても私の方に理窟があるんです——もう一度とつくり考へて見て下さい。シエトロモ
ゾの百姓の借りてゐる土地へ、隣村のベスパンチンといふ地主が四十町歩ばかり鋤を入れたんで
す。これは俺の地所だと云つてね。シエトロモゾの百姓らは年貢で借りてゐたのですが、肝心
の地主が外國へ旅行に出でしまつたので、誰も百姓らの肩を持つてやるものがない譯でせう、さう
ぢやありませんか？ その地所は大昔からその邊中が作つてゐたもので、議論も何もあつたものぢ
やない。そこで、百姓たちが私の處へ来て、願書を書いてくれといふものだから、書いてやりまし
たよ。ところが、ベスパンチンがそれを聞きつけて、おどし文句を並べ立てるんです。「俺はあの
トチヤの附足を、腰の附け根から引つこ抜いてくれる。さもなければ、首をそつくり捻ぢ切つてや
る」……などと吐かしやがる。どんな風にこの首を捻ぢ切るつもりか、一つ拜見したいものさ。ま
あ、今のところ、ちゃんと臺についてゐますがね。」

「ふん、大きなことを云ひなさんな。お前の首も今に碌なことはないぞ。」と老人は云つた。一本當
にお前は向かう見ずな人間だなあ！」

「だつて、伯父さん、あなたが自分でさう仰しやつたぢやありませんか……！」

「分かつてゐるよ、お前の云ひ草はちゃんと分かつてゐるよ。」とオフシヤニコフは遮つた。「そりや
その通りさ。人間は正直な暮らしをして、他人を助けてやらにやららん。時と場合によつちや、わ
が身を粉にしてもやらにやららん事がある……ところが、お前はいつもそんな風にしてゐるかい？
始終居酒屋へ引つ張り込まれてゐるのは誰だ？ ふるまひ酒で拜み倒されてゐるのは誰だ？ ドミ
トリー・アレクセイイチ、どうかお助け下さい——お禮は前金で致します——などと云つて、
一留銀貨か、五留紙幣を、そつと袖の下から掴まされるのは、一體だれだらう？ え？ さう
いふことは無かつたかな？ どうだ、白状せい！」

「そりや、なるほど私も悪うござんしたが、」とミーチャは伏し目になつて答へた。「しかし、貧乏人
から金なんか取らないし、曲がつた事はこれつから先きもしませんからね。」

「よしんば、今取らないにしろ、都合が悪くなつてくると、おひく取るやうになるだらうよ。曲
がつた事をしないつて……なにを、この野郎！ その云ひ分を聞いてると、いつも聖者様のやう

な連中の辯護ばかりしてゐるやうだが……お前はあのポリカ・ペレホードフの事を忘れたのか？……
 ……彼奴のために骨を折つたのは一體だれと思ふ？ 彼奴を庇つてやつたのは何者だい？ え？」

「ペレホードフが酷い目にあつたのは身から出た錆だ、そりや確かにその道理だが……」

「お上の金を明けやがつて……飛んでもないことだ！」

「だつて、伯父さん、察してもみてやつて下さいよ。貧乏暮らしで、女房子はあるし……」

「貧乏暮らし、貧乏暮らしだつて……彼奴は呑んだくれの博奕打ちぢやないか——さうとも！」

「あれは自棄酒から始まつたんですよ。」とミーチャは聲を低めて云つた。

「自棄酒だつて——ふん、お前にそんなに親切気があるなら、そんな呑んだくれと一緒に居酒屋などでのらくらしてゐないで、本當に力になつてやつたらいいぢやないか。口先ばかり巧いことを云やがつて——へん、そんな文句は珍らしくもないわい！」

「あれはこの上もない善人なんで……」

「お前に云はせりや誰でもみんな善人さ……ときに、「つれあひの方へ振り向きながら、オフシャニコフは言葉を續けた。「あいつに送つてやつたかい……な、そら、お前わかつてゐるだらう……」」

タチャーナ・イリイニチナは頷いてみせた。

「この二三日、お前はどこに妾を晦ましてゐたのだ。」

「町に行つて居りましたんで。」

「いづれ玉突きをやつたり、茶を飲んだり、ギタァをほろんくく鳴らしたり、方々の役所を駈けずり廻つて、奥の方の曖昧な部屋で願書の文句を考へたり、商人の小倅どもと伊達競べでもしてゐたんだらう？ なあ、さうだらう？……白状せい！」

「そりやまあね、さうかも知れませんが。」とミーチャはにこ／＼しながら云つた。「あつ、さうだ！ すんでの事で忘れるところだつた。あのフンチコフが、アントン・バルフェエイチが、日曜日にお出でを願ひ度い、食事をさし上げるからと云ふことでしたよ。」

「誰があんなどん腹の所へ行くものか。魚といつたら一束いくらといふやうな奴を喰はすし、バターは少しまゐりか、つたのを出すんだからな。あんな奴は眞つびら御免だ！」

「それから、フェドーシヤ・ミハイロヴナに逢ひましたぜ。」

「誰だ、そのフェドーシヤといふのは？」

「ガルベンチェンコ、ほらあのミクローリノ村を競賣でせり落とした地主の妾ですよ。ミクローリノ在のフェドーシヤでさ。一時莫斯科で仕立屋に住み込んで、年貢は金で拂ふことにしてゐましたが、

年に百八十二留五十哥といふ金を、几帳面に納めておましてね……仕事の方も確かりした腕を持つて、莫斯科でもいゝ所から注文を貰つておりましたよ。今ではガルベニチュンコが呼び戻して、別に何ていふ仕事も決めないで、たゞいゝ加減に抱へてゐるんです。女は身代金を拂つて、すつかり自由になりたいといふ氣があるので、旦那にもその話を持ち出したけれど、こつちはなんとも決まつた返事をしないのです。伯父さん、あなたはガルベニチュンコと知り合ひなんでせう？

「つあなたから口を利いてみてくれませんか……フェドローシヤはなんまり身代金を出しませう？」

「そりやお前が出す金ぢやないか？ うむ？ なに、よし、よし、云つてやらう、俺が彼奴に云つてやらう。しかし、當てにはならんぞ。」と、老人は不満さうな面持ちで言葉を續けた。そのガルベニチュンコといふ男は、かう云つちや悪いが、怒の皮の突つ張つた奴で、手形を買ひ占めたり、高利の金を廻したり、競賣に出た領地をせり落したりしやがつて……全體だれがあんな奴をこの土地へ引つ張つて來たのだらう？ いや、あゝいふ所は閉口だ！ あんな奴と話したつて、ななかな急には埒があくまいで……だが、まあ當たつて見ようよ。」

「一言折つて下さい、伯父さん。」

「よろしい、やつて見よう。だが、お前も氣をついて、憤まなけりやならんぞ！ まあ、まあ、云

ひ譯はいらん……お前の勝手にしなさい、お前の勝手に……しかし、さきくはよく氣をつくと、確なことはないぞ、いゝか、ミーチャ——本堂に身の破滅になるぞよ……いつまでも俺の腰を嗜つてもをれまいぢやないか……それにこの位だつて、しがない身の上なんだからな。ぢや、もういゝから氣をつけて行きなさい。」

ミーチャは出て行つた。タチャーナ・イリイニチナはその後につづいた。

「まあ、彼奴に茶でも飲ましてやるが、この甘い伯母さん。」とオフシヤニコフはうしろから聲をかけた。「なか／＼氣の利いた若い者で、」と彼は言葉を續ける。「それに氣立ても至つて好いのですが、どうも私はあれの身の上が心配でしてな……いや、失禮しました、詰まらん事を長々とお耳に入れて。」

このとき、控へ室の戸が開いた。天鵞絨の上衣を着た背の低い、胡麻鹽頭の男が入つて來た。

「や、フランツ・イワーマイチ！」とオフシヤニコフは叫んだ。「こんにちは、無禮嫌いか、ですな？」

親愛なる讀者諸君、この紳士をも紹介させて頂きたい。

フランツ・イワーマイチ・レジョン (Lejune) は、私とは近所同志に當たるオリョール縣の地主、ちよつと並み外れた無類で、光榮ある露西亞貴族の肩書きを獲得した人である。オルレタンの町で、

佛蘭西人を兩親として生まれ、ナポレオンの露西亞遠征に鼓手となつて従軍した。初めの間は萬事調子よく行つて、この男も昂然と首を上げながら莫斯科に乗り込んだ。けれど退却の途中、可哀さうにムシウ・レジョンは半ば凍えて太鼓をも失ひ、スモレンスク在で百姓どもの掌中に落ちたのである。スモレンスクの百姓はその晩、彼を空屋になつた羅紗工場に閉ぢこめ、夜が明けてから、堤の傍の氷孔に連れて行き、この *La grande armée* (偉大なる軍隊) の鼓手に向かつて、俺たちの顔を立ててくれと云ひ出した。つまり、その孔から氷の下へ潜り込んでくれと云ふのである。ムシウ・レジョンは、さういふ申し出をおいそれと承知することが出来ないで、こちらも負けずに佛蘭西語で、オルレアンへ歸してくれと、スモレンスクの百姓たちに談判を始めた。「そこには諸君」と彼は云つたものである。「私の母親が住んでゐるのだ、優しい母親が。」けれど百姓たちは、オルレアン市の地理學上の位置を知らなかつたためだらう、相變はらず、ダニロチョールカの流れに沿ふ水底旅行を勤めて、しまひには頸筋や脊骨をちよ／＼突きながら、實行を迫るやうになつた。と、不意に小鈴の音が響き渡つて、レジョンを驚へやうもないほど喜ばした。堤の上には、頑丈さうな葦毛の三頭立てに曳かせた大きな櫓が現はれた。後部を大仰に高く上げて、派手な毛氈をかけてゐる。その中に乗つてゐるのは、狼の毛皮外套を着こんだ赤ら顔の肥つた地主である。

「お前たちはそこで何をしてゐるのだね？」と彼は百姓に訊ねた。

「佛蘭西の野郎を沈めてゐるので、旦那。」

「は、あー」と地主は氣の無い調子で云つて、そつほを向いてしまった。

「ムシウ！ ムシウ！」と不仕合はせな男は叫んだ。

「おい、おい！」と狼の毛皮外套は嗜めるやうに云つた。「多くの國の軍勢を引き連れて、露西亞に攻め寄せ、莫斯科を焼き拂ひ、イワン大帝鐘樓の十字架を引き摺り下ろした太い野郎どもぢやないか。それが今更……ムシウ、ムシウもないものだ！ 今になつて尻尾を捲いたつて後の祭りだぞ。悪黨にそれ位の報いは當たり前だ……さあ、やれ、フィリカー！」

櫓は動き出した。

「だが、しかし待てよ！」と、地主は云ひ足した。「おい、お前、ムシウ、音楽の嗜みはあるかい？」

「お助け下さい、お助け下さい、お慈悲深い旦那様！」とレジョンは繰り返した。

「ちよつ、なんといふ奴等だ！ 露西亞語が分かる奴は一人もゐやしない！ ムシウ、ムシウ、サヴェエ・ミージック・ヴー？ サヴェエ？ (音楽だよ、音楽だよ、お前、音楽を) さあ、返答しろ！ コンブルネ？ (おねえ) サヴェエ・ミージック・ヴー？ ピアノを、ジュエ・サヴェエ？ (聞いて)」

レジョンは地主の苦心惨憺して眠ねてゐる事がやつと分かつたので、首を縦にふつて見せた。

「はい、旦那様、はい、はい、わたしは音楽師です。わたしはどんな楽器でも弾けます！ はい旦那様……どうかお助け下さい、旦那様！」

「いや、お前は運のいい奴だ。」と地主は答へた。「皆の衆、そいつを放してやれ。それ、二十哥、これがお前たちの酒手だ。」

「有難うございます。旦那、有難うございます。では、お渡し致します。」

レジョンは櫓に乗せられた。彼は嬉しさに息をつまらせ、身をふるはせて泣いたり、お辭儀をしたりして、地主や、取者や、百姓たちに禮を云ふのであつた。彼が着てゐるものは薔薇色のリボンをつけた緑色のジャケツ一枚きりで、しかも寒さは牙え返る厳しさであつた。地主は無言のまま、その紫色になつたこちくちの手足を見てゐるが、やがて自分の毛皮外套を不仕合はせな男の身體に纏んでやつて、我が家へ連れて歸つた。召使ひ一同が忽ち馳せ集まつて、この佛蘭西人を手早く温めた上、食へ物や着物を當てがつてやつた。地主は彼を自分の娘たちのところへ引つ張つて行つた。

「さあ、みんな、」と彼は云つた。「到頭お前たちの先生が見つかつたよ。いつもく、音楽を教へて頂戴、佛蘭西語を教へて頂戴と、うるさく強請つてゐたものだが、ほれ、この通り、佛蘭西人の先

生が出来たぞ。ピアノも弾けるし……さあ、ムシウ、五年前にオーデコロンを商つてゐる猶太人が買ったほろピアノを指さしながら、彼は言葉を續けた。「一つお手並みを見せて貰はう、弾きなさい」

レジョンは人心地もなく椅子に腰をかけた。彼は生まれ落ちてから今まで、ピアノに觸つた事もないのである。

「ジッエ、ジッエ、と云つたら！」と地主は繰り返した。

可哀さうな佛蘭西人は、まるで太鼓でも敲くやうに、自棄に鍵盤を撲りつけながら、出任せに弾き出した。……「私はその時、せつかく生命を救つてくれたあの人が、いきなり私の襟髪を掴んで、邸から追つほり出してしまふだらうと観念しましたよ。」と彼は後でよく云ひ云ひした。けれど、心ならずも即席音楽家にされたレジョンの驚き入つたことには、地主は暫らくしてから、感心したやうに、彼の肩を叩きながら、「結構、結構、如何にも腕が有りさうだ。それではもう行つて休んでもよろしい。」と云つた。

二週間ばかりして、レジョンはこの地主の手もとを離れて、それより一段金持ちで教養のある地主のところへ移つたが、陽氣で温順しい性質が氣に入られて、その家の養ひ娘と結婚し、勤め口に

もありついて、いつばしの貴族になり済まし、退職龍騎兵で詩作などもやつてゐるロボ・ザニエフといふオリョールの地主に娘を嫁入らせ、自分も永住の目的でオリョールの町へ移つた。つまり、このレジョン、或ひは一般の呼び方に従へば、フランツ・イワーヌイッチが、私の訪問中にオフシャニコフの部屋に入つて来たのである。この二人は親しい友達同志であつた……しかし、恐らく讀者諸君も私の相手をして、郷士のオフシャニコフのところへ長居するには、もう飽きて來られた事と思ふから、私はこの邊で雄辯なる沈黙を選ぶことにしよう。

リゴフ

「リゴフへ行つてみませんか。」もう讀者諸君にお目通りした事のあるエルモライが、或るとき私にかう云つた。「あすこなら鴨が思ふ存分撃てますぜ。」

本當の銃獵家にとつては、野鴨など一向になんの魅力もないものであるが、目下のところ、ほかに獲物がないので（それは九月初めのことで、山鶴はまだ飛んで來ないし、鷓鴣を追ひ廻して畑の中を駆けすり歩くのも、いゝ加減あき／＼してゐたので）、私は獵師の云ふことを聞いて、リゴフへ出かけた。

リゴフは曠原地方の大きな村で、圓屋根をたつた一つ聳えさせた至つて古い石造りの教會堂があつて、ロソタといふ泥つほい川の畔りには、水車場が二軒たつてゐる。この川は、リゴフから五露里ばかり先きの方で、一つの大きな池になつてゐて、周りばかりでなく、ところによると、池心の方までオリョールで「マイエル」と云はれてゐる葦が、びつしりと生ひ繁つてゐた。この池の入り江や、葦の間のひっそりした所には、眞鴨、蒼頭、尾長鴨、島阿治、小鴨など、ありとあらゆる種

類の野鴨が無数に棲んでゐた。ちよつとした群れは始終水の上を飛び廻つてゐたが、一發の銃聲が聞こえようものなら、それこそ雲霞のやうな大群が舞ひ上がるので、狩獵家も思はず片手で帽子を抑へ、「うわつー」と言葉尻を引きながら、嘆息を發する位である。私はエルモライと二人で、池の縁に沿つて歩き出したが、第一、鴨は用心ぶかい鳥で、岸の傍などは泳いでゐないし、第二に、よしんば仲間にはぐれたほんやりの小鴨などが、うつかも彈丸を見舞はれて、生命を落とすやうな事があつても、葦が一面に生えてゐるので、その間から取つて來る事は、私達の犬には出來ない藝當であつた。どんなに立派な自己犠牲の精神があるにもせよ、泳ぐことも出來なければ、底を踏んで歩くことも出來ず、たゞ葦の鋭い葉で大事な鼻を切るくらゐが落ちである。

「駄目だ。」到頭エルモライもかう云ひ出した。「こいつは具合が悪いや。小舟を手に入れなくちや……先つりゴフへ引つ返させう。」

私たちは引つ返した。まだ幾度も歩かない中に、向かうのこんもりした楊の蔭から、可成りやくざな獵犬が一匹飛び出して、その後から中背の男が姿を現はした。ひどく草臥れた青い上着を黄色つほいチョッキの上に重ね、グリ・デ・レン色だか、ブルー・ド・アムール色だかわからないズボンを、穴だらけの長靴の調へぞんざいに押し込み、赤いハンカチを首に巻き、單發銃を肩にかけてゐる。

私たちの犬どもは、持ち前の支那人流の禮儀作法を守つて、新顔の犬と互ひに嗅ぎ合つてゐたが、先方はどうやら怖氣づいた様子で、尻尾を捲き、耳を立てて、膝も曲けずに齒をむき出しながら、目まぐるしいほどくるくゝ廻つてゐた。——その間に、見知らぬ男は私たちの傍へ寄つて、馬鹿丁寧にお辭儀をした。見たところ年は二十五ぐらゐで、クワスの匂ひがぶん／＼するほど浸みこんだ長い薄色の髪を、ところ／＼にびん／＼とおつ立たせ、小さな驚色の眼を愛想よくばちつかせてゐる。——まるで齒痛に悩んでゐるやうに、黒い布で頤を縛つた顔は、一面に甘つたるい微笑を漲らしてゐた。

「不躰ですが、名乗りを上げさせて頂きます。」と彼は物柔かな、忍びよるやうな聲で云ひ出した。「私はこの土地の獵師で、ウラヂーミルと申します……あなたが當地へお見えになつて、この池の岸へお出向きになつたと聞きました、もし御不承くださいますれば、お役に立たして頂かうと決心いたしましたわけです。」

獵師のウラヂーミルは、主役の二枚目をやる田舎廻りの若い役者そつくりの言葉遣ひをした。私はその申し出を肯き入れた。そしてまだリゴフまで行き着かない中に、早くも彼の身の上を聞いてしまつた。この男は主人から自由にして貰つた邸づとめの農奴で、物に感じ易い年頃に音楽を習ひ

覚え、その後侍候頭を務めるやうになつたので、読み書きの術も心得え、私の観察したところでは、多少は物の本も讀んだ事があるらしい。今では多くの露西亞人の例に洩れず、一錢の現金も持たず、定まる仕事もなしに暮らして、天から降つて來るマオで口過ぎしないばかりの有様であつた。ウラヂーメルは竝み外れて雅びた言葉遣ひをし、明らかに自分の話しぶりを自慢にしてゐるらしかつた。それに、間違ひなく妻腕の色事師で、どうみても決してやり損ひがないらしかつた。露西亞の女は口説上手を好くものである。さうかと思ふと、時には近所の地主たちを訪ねたり、町へ遊びに行つたり、歌留多の相手をしたり、都の人たちとも近附きがあるといふ事を、私に匂はすのであつた。笑顔の名人で、笑ひ方が千變萬化を極めてゐた。とりわけ、他人の話に耳を傾けてゐる時、彼の口邊に漂ふ控へ目な、つ、まし氣な微笑が、殊のほか似つかはしかつた。他人の話を聞いて、びんからきりまで合槌を打ちながら、それでゐて、自己の品威といふ氣持ちを失はず、いざとなつたら自分の意見を洩らすことも出来るぞと、暗々裡に仄めかすやうな具合であつた。エルモライはあまり教育もないし、まるで細かい所に氣のつかない男だつたので、この男に「お前」よばはりを始めた。ウラヂーメルがなんとも云へない微笑を浮かべながらエルモライに「あなた」と云ふ時の顔は、それこそ見ものであつた……

「なぜ君は頭を縛つてゐるんです？」と私は訊いてみた。「齒でも痛いのかね？」

「いゝえちがひます。」と彼は打ち消した。「これは、もつと寒心すべき不注意の結果なのでございます。私には友達が一人ありまして、いゝ男なんです、よくある話で、まるで獵の心得がございけません。ところが、ある日わたしに申しますには、「君、お願いだから、僕を獵に連れて行つてくれないか。一體、どういふものか知りたいのだから。」私は申すまでもなく、友達の頼みを無下に断りたくなかつたので、自分で鐵砲のことまで心配してやつて、この男を連れて獵に出かけました。さて、いゝ加減撃つて歩いた揚句、いよゝ一休みといふことになつて、私は木蔭に腰を下ろしました。ところが、友達は却つて銃の操法などを稽古しだして、おまけに私を的にするので、私は止してくれと頼んだのですが、相手は素人だものですから、一向に肯かうともしません。その中に、どん、と云つたと思ふと、私は下顎と右の人指し指を無くしてしまひましたので……」

私たちはリゴフに辿り着いた。ウラヂーメルもエルモライも二人ながら、小舟なしには獵は出來ないと決めてしまつたのである。

「スチークのところは平底舟がありますが、」とウラヂーメルが云つた。「彼奴、何處へかくしたのか、私も存じません。一走り行つて來なければなりませんまい。」

「それは誰のことだね？」と私は訊ねた。

「……に或る男が居りましてね。通り名をスチョークと申します。」

ウラヂーミルはエルモライを連れて、スチョークの所へ出かけた。私は教會の傍で待つてゐるかと云つた。墓地の墓石を見廻してゐるうちに、ふと黒ずんだ四角い碑に行き當つた。表には佛蘭西文字で「Ci est Théophile Henri vicomte de Bantey」と彫つてあり、裏には「佛蘭西臣民ブランジイ伯爵の遺骸、この石の下に眠る。一七三七年生、一七九九年歿、享年六十二歳」とあり、一方の横には「この亡骸に安らひあれ」と誌され、もう一方の側には、

「この石の下に佛蘭西の亡命の客眠る。」

名門の家に生を享け、才智も人に優れしが

妻子を人に殺されて歎きのあまり

逆賊に踏み蹂られし祖國を見棄て

露西亞の國の境に入りぬ

年老いて情けの宿に世を送り

＊ 小枝の墓。(譯者)

子等を導き父母の意をば安めつ……

いま……に神の恵みに安らひぬ。」

と書いてあつた。

エルモライとウラヂーミル、それにスチョークとかいふ妙な綽名を持った男が姿を現はしたので、私の臆想は破られた。

ほろ／＼の着物を着て、髪をおどろに振り亂した跣足のスチョークは、年の頃六十前後で、見たところ、隠居した門番といった風であつた。

「お前んとこに小舟があるかね？」と私は訊ねた。

「舟はありますが、」と彼は妙に籠もつた毀れたやうな聲で答へた。「とてもひどくなつて居りますん
ど。」

「どんな風なのだ？」

「權ぎ目がみんな離れてしまつて、それに、方々の穴に填めたものがすつかりとれてしまひました。」
「何も大した事ぢやない！」とエルモライが引き取つた。「麻屑を填めさへすりやいよ。」

＊ 家裏教師になつた事が知られる。(譯者)

「そりや、いゝに決まつてるさ。」とスチョークが合槌を打つた。

「一體、お前は何者だ？」

「お邸の漁師でさ。」

「それはどうした事だ。漁師のくせに、舟がちゃんとしてゐないなんて？」

「でも、この川にや魚がゐないんで。」

「魚は沼地の鋪を好かないからね。」と、私の獵師は勿體らしく註を入れた。

「ぢや、」と私はエルモライに云つた。「何處かへ行つて、麻屑を手に入れろ。そして舟を修繕するんだ、さあ、早く。」

エルモライは出かけた。

「したが、こんな有様ぢや、みんな土左衛門になりやしないかしらん？」と私はウラチーミルに話しかけた。

「まさかそんな事もござんすまい。」と彼は答へた。「どつちにしても、池はさして深くなさうに思はれますが。」

「さうですよ、深かありません。」とスチョークは口を入れたが、その話しぶりはまるで寝呆け

てでもゐるやうに、なんとなく奇妙なところがあつた。「おまけに底は泥と草で、一面に草がびつしり生えて居りますよ。尤も、深い穴も所々にございますがね。」

「それにしても、草がそんなにひどかつたら、」とウラチーミルは云つた。「漕ぐことだつて出来ないぢやないか。」

「だれが平底舟を漕ぐ者があるかい？ 竿をさすんだよ。わつしが御一緒にまゐりませう。うちに手頃な棹がありますよ——でも、鋤だつてやれますがね。」

「鋤ぢや具合が悪いだらう。場所によつちや底まで届かないかも知れない。」とウラチーミルが云つた。

「そりや、その通りで、具合は悪いに違ひない。」

私はエルモライを待つ間、墓石に腰を下ろした。ウラチーミルは遠慮して、少しばかり小脇へ離れ、同じやうに腰を下ろした。スチョークは頭を垂れて、昔からのくせで両手を後ろに組みながら、相變はらず一つ所に立つてゐた。

「ときに、どうだね、」と私は口を切つた。「お前は古くから此處で漁師をしてゐるのかい？」

「もう今年で七年目になりますよ。」と彼はびくりと身慄ひして、かう答へた。

「その前には何をしてゐたい？」

「前には馭者をやつて居りました。」

「誰に馭者の仕事を免職させられたんだね？」

「新しい奥様で。」

「奥様とは？」

「わつし共を買ひ取りなすつた方で。御存じありませんかね、アリオーナ・チモフェーヴナといつて、こんなに肥つた……もう年の若くない。」

「どうして又、お前を漁師なんかにしようつて気を起したんだらう？」

「そんな事が誰に分かりますもんで。タムボフの御領地からおいでになつてね、邸中の召使ひを集めた上で、みんなの前へ出て來られました。わつし共は先づお手に接吻しましたが、奥様は別にお怒りになる様子もございません……やがて順々に一人一人、お前は何をしてゐたか、どういふ役目を當てがはれてゐたか、とお訊ねになる。その中に順番が廻つて來て、お前はもと何をしてゐたか、とわつしにお訊ねになるものだから、馭者をして居りましたと申し上げると、「なに、馭者をしてゐた？ ふん、お前が馭者なものか、自分の面を見るがい、そんな馭者があつてたまるものか、お

前なんか馭者をする柄ぢやないから、聲を刺つて漁師におなり。私がこゝへ來た時にはお臺所へ魚を届けるやうにするんだよ。い、かい？」とかう仰つしやつて、それ以來わつしは漁師といふ事になつて居ります。「い、かい、うちの池が何時もきちんとしてゐるやうに氣をつけるんだよ……」と云はれましたが、どうしてあれをきちんとして置かれるもんですかね？」

「お前たちはもと誰に抱へられてゐた？」

「セルゲイ・セルゲエキッチ・ペフチェレフ様で。わつしら、相續ゆづりでその方の手に渡つたのでございますが、それも永く保たないで、たつた六年きりでお終ひになりました。つまりこの人の時分に、わつしは馭者を務めたものでございますが、それも町ぢやございません——そつちの方にや、ほかに馭者がゐましたので、村の方だけで致しましたよ。」

「で、お前は若い時から、始終馭者をやつてゐたのかい？」

「なんの、始終馭者なんかしちや居りません！—わつしが馭者になつたのは、セルゲイ・セルゲエキッチ様の代になつてからで、その前は料理場の方をやつて居りました。——でも、町のお邸ぢやなくつて、やつぱし田舎の方でございました。」

「誰のどこの料理人をしてゐたのだね？」

「先代のアフナーシー・ネフェードイチ、セルゲイ・セルゲエキッチの伯父様のことなので。リゴフを買ったのもその方で、つまりアフナーシー・ネフェードイチがお求めになったのでございます。ところが、伯父様が亡くなられたので、自然とセルゲイ・セルゲエキッチの手に入ったといふわけです。」

「伯父さんは誰の手から買ひ取つたんだね？」

「タチャーナ・ワシリエヅナからで、」

「タチャーナ・ワシリエヅナつて誰のことかい？」

「それ、一昨年、ボルホヴォ在……ではない、カラチエヅォ在で、娘のまゝで亡くなられたお方でございますよ……一度もお嫁に行かず終ひでしたが、御承知ではございませんかね？ わつし共はその方のお父様のワシリイ・セモイイチから娘御の手に譲られたわけなので。この方は随分ながい間、わつし共を抱へて居られましたよ……かれこれ二十年ばかりも。」

「それで何かね、お前はその人の處で料理人をしてゐたのかい？」

「初めの間は、なるほど、料理人をして居りましたが、やがて珈琲係りにされました。」

「なんだつて？」

「珈琲係りで。」

「そりやまた、どんな役目だい？」

「分かりません、旦那様、食堂の方の係りで。クジマーと云はないで、フントンと呼ばれて居りましたよ。さういふ奥様のお云ひつけでございますよ。」

「お前の本名はクジマーなんだね？」

「おやうで。」

「で、ずつと珈琲係りをやつてゐたのかね。」

「い、え、ずつとぢやございません。役者も致しましたよ。」

「まぢか？」

「どういたしましたして、本當なので……劇場たらで芝居をしました。奥様がお邸の中にその劇場をお作りになりましたな。」

「一體お前は、どんな役をやつたんだい？」

「なんと仰しやります？」

「お前は劇場で何をしたのだ？」

「おや、御存じありませんかね？ なに、みんながわつしを掴まへて、衣裳をつけてくれますので、わつしはその衣裳をつけたまま、その時の都合で、歩いたり、立ったり、坐つたりして、それ、かう云へ、と云はれ、ば、その通りに喋ります。一度は盲人をやつた事もありましたつけ……両方の眼瞼の下に、ゑんどう豆を二つづ、くつ附けまして……本當のことですと……」

「それから何になつたね？」

「それからまた、料理人になりました。」

「なんだつて料理人などに貶されたんだい？」

「弟が逃げてしまつたからでございますよ。」

「ちや、初めの奥様のお父さま時代には、どんなことをやつてゐた？」

「いろいろ様々な役目を勤めましたよ。初めは使童をやつて居りましたが、それから馭者をやつたり、庭師になつたりして、一度などは獵犬の係りになりました。」

「獵犬係りになつた？……ちや、犬を連れて騎りまはしたのかい？」

「犬を連れて騎り廻しも致しましたよ。ところが、たうとう怪我をしてしまひました。馬がぶつ倒れて、馬も足を挫いたやうな始末で。大旦那はとても喧しいお方で、わつしを折檻した揚句、莫斯科

へ靴屋の年季奉公にやられました。」

「え、年季奉公？ だつて、まさかお前は子供の時に、獵犬係りになつたわけでもあるまい？」

「さやう、え、と二十歳餘りの時でございますか。」

「二十歳にもなつて、年季奉公に行く奴があるものかね？」

「なに、旦那様がお云ひ付けになる位だから、別に構はないわけでございますよ。それに仕合せと、間もなくお逝れになりましたな、わつしは村へ呼び戻されましたよ。」

「いつ料理なんか習つたんだね？」

「ステーキは蒸じた黄色い顔を上けて、にたりと笑つた。」

「誰がそんなことを習ふもんですか？……女でも煮糞きぐらゐりませうね！」

「ふむ、」と私は云つた。「クジマー、お前は一生の間に、随分いろんな事を見て来たわけだな！」

「ちや、いま漁師になつてから、一體なにをしてゐるんだね、魚もゐないのに？」

「なに、旦那様、わつしは別に苦情を申しませんよ。漁師にして頂いただけでも、有難いくらゐるで。なにしろ、わつしと同じくらゐる年を老つたアンドレイ・ブイリなどは、紙漉き工場へやられて、汲み出し役をやらされて居りますからな。奥様のお云ひ付けだもんで……たゞで食はして置くのは

勿體ない、と仰つしやつてね……ブアイリの奴、もつと甘い口にありつけると當てにしてゐたんですよ。また甥に當たるのが、お邸の事務所で手代をやつて居りますので、そのうちに折を見て、奥様にお願ひしてやると約束したものですからね。ところが、お願ひしてやるところか……それでもブアイリの奴は、現にわつしの見てゐる眼の前で、甥の足もとに頭を摺りつけたものでございませぬがね。」

「お前、女房子はあるのかね？ 世帯を持つたことは？」

「いゝえ、旦那様、ございませぬ。亡くなられたタチャーナ・ヅシーリエヅナは——どうか天国にいらつしやいますやうに！——誰にも女房を持つことはお許しになりませんでしたよ。」とんでもない！ 現に私だつて獨り身で暮らしてゐるのに、そんな我儘な話つてあるものぢやない！ そんな事をするわけではないよ。」と仰しやいましたね。」

「いまお前はなんで糊口くちぐちしてゐるね？ 給金でも貰つてゐるのかい？」

「なんの、旦那、お縁金なんか……食べる物だけ寄越して下さるので、まあそれだけでも有難いと思つて、わつしや満足して居りますよ。どうか神様のお恵みで、奥様が長生きなさいますやうに！」
エルモライが歸つて來た。

「舟の繕ひが出来ました。」と、彼は氣難かしけな調子で云つた。「おい、お前、棹を取つて來んか！……」

スチヨークは棹を取りに駈け出した。私が可哀さうな老人と話してゐる間、獵師のウラヂーモルは、始終馬鹿にしたやうな微笑を浮かべながら、スチヨークをじろ／＼見廻してゐた。

「馬鹿な奴だ。」老人が行つてしまふと、彼はかう云ひ出した。「まるつきり無教育な奴で、つまり土百姓ですね。それつきりのものですよ。あれはお邸に奉公する人間とも云はれませぬよ……そのくせ法螺ばかり吹いてやがる……あんな奴に役者が出來てたまるものですか、まあ考へても御覽なさいまし！ あんな奴とお話なんかなすつて、とんだ御酔興でございませぬ。」

十五分ばかりしてから、私たちはスチヨークの平底舟に乗つた（犬は小屋に残して、馭者のイエルグデールに監督させて置いた）。私たちはあまり居心地が好くなくかつたけれど、獵をする人間は氣さくたから、別に文句も云はなかつた。先きの尖つてゐない體の方にはスチヨークが立つて、棹をさしてゐた。私はウラヂーエルと一緒に胴の横木に腰をかけ、エルモライは船のとつ先きに陣取つた。麻屑をつめてはあつたけれど、水は忽ち足もとに流れこんで來た。幸ひ天氣は穏かで、池はまるで假睡かすみんでゐるやうであつた。

舟尾はかなりのろかつた。老人は、一面に青い絲のやうな藻のからみついてゐる長い棹を、やつとのことで粘つこい泥の中から引き抜くのであつた。びつしり茂り合つた睡蓮の圓い葉も、小舟の行く手を妨げた。私たちはやつとの事で蘆の茂みまで漕ぎよせて、そこでいよいよ楽しみが始まつた。鴨は自分たちの領分に突然私たちが姿を現はしたのに驚いて、騒々しく水面を離れながら、がや／＼と舞ひ上がるのであつた。私たちはその後から銃音を揃へて火蓋を切つた。あの尻尾の短い鳥どもが、空中でもんどり打つて、ばさりと重々しく水の上に落ちて行くのは、なかく／＼愉快な眺めであつた。弾丸を受けた鴨を獲らず拾つてしまふことは、むろん出来ない相談であつた。手傷の輕いのは水の中に潜つて行つた。一撃ちに殺されたのでも、あのひどい葦の茂みの中へ落ちたのは、山猫のやうな目をしたエルモライですら、見つけることが出来なかつた。それでも晝頃までには、私たちの小舟は縁から溢れさうなほど獲物で一杯になつてしまつた。

ウラヂーミルは鐵砲打ちがからつ下手だつたので、エルモライはそれを酷く痛快がつた。彼は一發撃ち損する度に鐵砲を檢めたり、吹いてみたりして、如何にも合點が行かぬといふやうな顔をして、最後に自分のやり損つた譚を、私たちに説明して聞かせるのであつた。エルモライはいつもの通り得々として撃ち續けてゐた。私は例によつて、餘り上手と云へなかつた。スチョークは、若い

時から旦那がたの世話をしなれた人間のやうな眼付きで、私たちの様子を眺めながら、時々、「それ、それ、あそこにもう一羽！」と嗷鳴る。——そして、のべつ背中を掻いてゐたが、それも手を使はないで、肩をもぞ／＼動かして掻くのであつた。天氣は引き續き快晴で、白いまる／＼とした雲が高く靜かに頭上を流れながら、はつきりと水に影を映してゐた。四邊では葦がさ／＼やき交はしてゐる、池の面はところどころまるで銅鐵のやうに、日光を受けて輝いてゐる。私たちはそろ／＼村に引つ返さうとしたが、そのとき思ひがけなく、かなり不愉快な事件が持ち上がった。

私たちが乗つてゐる平底舟に水がだん／＼溜まつて來るのには、もう大分前から氣がついてゐた。ウラヂーミルは柄杓でそれを汲み出す役目を命じられてゐた。この柄杓は用意周到な私の獵師が、何かの場合のために、ほんやりしてゐる百姓女の所から盗んで來たものである。ウラヂーミルが自分の役目を忘れないである間は、何事もなく無事に済んだが、獵も終りに近づいた頃、鴨どもがまるでいよいよお別れだといふやうに、夥しい群れをなして飛び立つたので、私たちは弾丸をこめる暇がない位であつた。夢中になつて續け打ちするのに紛れて、私たちは舟がどうなつてゐるかといふ事に、氣をつけようとしなかつた。——と、不意にエルモライが激しく身を動かしたので（射止めた鳥を拾はうと一生懸命になつて、全身を絏にのしかけたのである）、私たちの乗つてゐた

ほろ舟はぐいと傾いて、水を被つたと思ふと、そのまゝ悠々と沈んで行つた。たゞ仕合はせと、深い處ではなかつた。私たちはあつとばかり叫びを上げたが、もう遅かつた。我に返つた時には、水の中に首まで浸つて、ぶかぶか浮いてゐる鴨の死骸に取り囲まれてゐた。今でも私は、吃驚して眞つ蒼になつた仲間の連中の顔を思ひ出すと、聲を立てて笑はずにはゐられない。私たちはみんな鐵砲を頭の上に差し上げてゐた。スチョークは旦那がたの眞似をする癖が出たものらしく、棹を高々と差し上げたものである。まづ一番に沈黙を破つたのは、エルモライである。

「ちよつ、くそ、忌々しい！」彼はべつと水に唾を吐きながら呟いた。「なんちゆうことだ！これといふのも、みんな手前のお蔭だぞ、老いほれめ！」と彼はスチョークに向つて、いま／＼しざうに云ひ足した。「手前の舟はなんちゆう代物だ？」

「済みませんこつて。」と老人はへどもどしながら云つた。

「それにお前もお前だ。」と私の獵師はウラヂーミルの方へ顔を向けて、言葉を續けた。「何をほんやりしてゐたんだ？　なんだつて水を汲み出さなかつたんだ？　お前は、ほんにお前といふやつは……」

けれど、ウラヂーミルは口答へどころではなかつた。彼は木の葉のやうに慄へて、齒の根も合は

ず、まるつきり無意味にや／＼笑つてゐた。あの雄辯も、あの優美な禮儀作法も、自己の尊嚴を意識する氣持ちも、すつかりどこかへけし飛んでしまつた！

いま／＼しい平底舟は私たちの足もとで、弱々しく揺れてゐる……難船した瞬間は、水が度はづれに冷たいやうな氣がしたが、すぐ馴れて苦にならなくなつた。最初はつとした驚きが過ぎたとき、私はあたりを見まはした。十歩ばかり離れた邊には、ぐるりと葦が生ひ茂つて、その高い葉越しに遠く岸が見えてゐる。「こりやいけない！」と私は考へた。

「どうしたものだらう？」と私はエルモライに相談した。

「まあ、今に何とかしませう。こゝで夜明かしも出来ませんや。」と彼は答へた。「さあ、お前、鐵砲を持つて、くれ。」とウラヂーミルに云つた。

ウラヂーミルは唯々諾々と命に服した。

「ひとつ行つて、淺いところを捜して來ませう。」とエルモライは、どこの池にも必ず淺瀬はあるものと決めこんだやうに、自信ありげに言葉を續けた。——スチョークから棹を取ると、用心ぶかく足で底を探りながら、岸の方をさして歩き出した。

「一體お前、泳げるのかい？」と私は聲をかけた。

「い、や、泳けません。」といふ聲が葦の茂みの蔭から聞こえた。

「ふん、それちや土左衛門になつてしまふに。」とスチヨークは平氣な調子で云つた。この男は、前に吃驚したのも危険を恐れたからでなく、私たちに怒られるのが心配だつたのであるが、今はすっかり落着いてしまつて、たゞ時々ふうつと深い息をつくばかり、現在の状態を變へなければならぬなどとは、てんから考へてもゐないらしかつた。

「しかし、全くの犬死にでございますよ。」とウラチーミルは憐れつほい聲で云ひ添へた。

エルモライは一時間以上も歸つて來なかつた。この一時間が私たちには永劫の長さに思はれた。初めの間は、根氣よく互ひに呼び交はしてゐたが、やがてエルモライの「おう」と答へる聲が次第に間遠になつて、つひには全く聞こえなくなつてしまつた。村では晩禱の鐘が鳴り出した。私たちはお互ひ同志、話もしなくなり、顔すら見合はせないやうにしてゐた。鴨は私たちの頭上を飛びめぐつて、中には私たちの傍ちかく止まらうとするものもあつたが、急にはゆる「眞一文字」に舞ひ上がつて、啼き聲たかく飛んで行くのであつた。私たちの體はだん／＼硬ばつて來た。スチヨークはそろ／＼寢支度でもしようかといふやうに、目をばち／＼させてゐた。

やつと、筆にも口にも盡くせぬ嬉しさ、エルモライが歸つて來た。

「おい、どうだつた？」

「岸まで行つて來ました。淺瀬が見つかりました……さあ参りませう。」

私たちはすぐに出かけようとした。けれど、エルモライはまづ水の中で衣囊から繩を取り出して、射殺めた鴨の足を縛り、兩端を口に唾へ、先頭に立つて歩き出した。ウラチーミルがそれに續き、私はウラチーミルの後に従つた。スチヨークが殿りをつとめた。岸までは二百歩ばかりであつた。エルモライはずん／＼と足も止めずに進んだ（よくも道を覺えたものである）。たゞ時々、「左へとつた——その右手には穴があるぞ」とか「右へよつた——その左手は泥が深いぞ」とか嗚鳴るだけであつた。どうかすると、水が喉まで來ることがあつた。誰よりも一番背の低いスチヨークは、可哀さうに二度ばかりぶく／＼やつて、あぶくを吹いた。「おい、おい、おい！」とエルモライは賑ついで嗚鳴りつけた——すると、スチヨークは足をばたつかせたり、跳び上がったたり、もがいたりした後、どうやらかうやら背の立つところへ出る。けれど、どんなに切迫つまつた時でも、私の上衣の裾にだけは遠慮して濡まらうとしなかつた。へと／＼に疲れて、泥だらけの濡れ鼠になつて、私たちはやつと岸に辿り着いた。

二時間ばかり経つたとき、私たちはみな出来るだけ着物を乾かして、大きな乾草小舎に尻を据ゑ、

夜食の支度が出来るのを待つてゐた。馭者のイエルグチールは竝みはづれてのろ／＼した尻の重い、理窟つほいことを云ふのが好きな、寝ほけ面をした男であつたが、門のところ立つて、一生懸命にスチヨークに嗅ぎ煙草をふるまつてゐた。(私の観察によると、露西亞の馭者同志は忽ち仲よしになるものである。) スチヨークは恐ろしい勢ひで、胸が悪くなるほど煙草を吸ひ込んでゐた。唾を吐いたり、咳をしたりして、如何にも大満悦らしい様子である。ウラチーミルはもの憂けな顔つきをして、首を横へかしかたまゝ、あまり口敷をきかなかつた。エルモライは私たちの鐵砲を磨いてゐる。犬どもは燕麥粥を待ちかねて、わざとらしい程せか／＼尾を振つてゐるし、馬は掛け庇の下で、蹄をとん／＼鳴らしたり、嘶いたりしてゐる……陽はまさに没せんとして、最後の光線が茜色の縞をさつと投げかけてゐる。金色のちぎれ雲が、さながら洗ひ淨めて梳き上げた羊の毛のやうに、いよ／＼細かく空に擴がつてゆく……村の方では歌の聲が聞こえてゐる。

ページンの草野

それはすつかり天候が決まつてしまつた時でなければ見られないやうな、明朗な七月のある日のことであつた。空は朝早くから晴れ渡つて、明け方の東の紅も火事のやうに燃え立つのでなく、もの柔かな赤らみを漲らすのである。太陽も焼きつくやうな早魃の頃のやうに、赤熱した火の塊りを想はせるやうでもなければ、嵐の前のやうに鈍い茜色でもなく、明るい樂しげな輝きを放ちながら、細長い横雲のかけから、にこやかに浮かび上がつて、朗かな光りを漲らした後、また薄紫いろの霧の中に没してしまふのである。横に長く延びた雲の上の方の端が、小蛇のやうにちら／＼と閃めき始める。その輝きは、鍛へ上げた銀のかゝやきを想はせる……けれども、又やがて揺れ動く光りがさつと迸り出る——と、樂しげに、おほどかに、さながら舞ひ上がるかのやうに、日輪が芳づよく昇つて来る。正午ころになると、大抵黄金色を帯びた灰色の圓い高い雲が、白い華奢な縁をつけて、いくつもいくつも現はれて来る。はてしなく溢れ擴がる川の面に、深く透き通つた紺青の水に抱き包まれながら、點々と撒き散らされた島のやうに、雲は殆ど動かうとしない。たゞ、遙か地平

線に近いあたりでは、雲は互ひにひしと寄り合つて、その間にはもう空の青が見られない。けれど、雲そのものが空と同じやうに瑠璃色をして、光りと温みを一抔に吸ひ込んでゐる。うつすりと軽い紫色をした地平線上の空は、終日ずっと變はりもしなければ、また四方八方すべて一様である。どこにも、夕立雲の影もなければ、雷氣の集まる様子もない。たゞこゝかしこに碧みが、つた條が、上から下へすつくと引かれる——見えるか見えなにかの雨が篩ひ落とされるのである。夕方ちかくなると、この雲も消えてしまふ。ただ幾つか消え残つたのが、黒ずんだ煙のやうにそこはかとなく、入り目の前に薔薇色の玉かたばかり懸かつてゐる。太陽が昇つた時と同じやうに静かに渡したところには、狸々緋の夕焼けが暫らくの間、動ずんで行く大地の上に照り映えて、その中にはそつと大切に運ばれる燭の火のやうに、夕星がたつた一つ静かに睡きながら、覺束なげに光り始める。かういふ日にはすべての色が柔かく、明るいけれどけばくしくなくて、萬物の上には、何となくいぢらしいやうな、つ、ましい感じが投影されるのである。かういふ日にはどうかすると、暑さが、ことのほか酷しく、野づらの傾斜になつたところなどは、「陽炎」が立つことさへもある。けれども、やがて風が起つて、鬱積した苦熱を追ひ拂ひ吹きつける。すると、天氣のつゞく間違ひのない兆候とされてゐる埃の渦が、白い龍卷きのやうに高く舞ひ上がつて、街道を傳ひ畑を越えて狂ひ歩く

のである。乾いて澄んだ空中には、苦蓬や、刈り取られた裸麥や、蕎麥の匂ひが漂つてゐる。夜になる一時間前あたりまで、濕氣などは少しも感じられない。農夫は作物の種り入れにかうした日柄を望むのである。

丁度かういつたやうな日に、私はトゥーラ縣のチュルン郡で松雞の獵をした事がある。獲物は澤山に見つかつて、獵の首尾も上々だつたので、一杯になつた藪は情け容赦もなく肩に食ひ込んだ。けれども、夕焼けは色あせて行つて、落日の光りこそ射さね、まだ明るみを湛へた空には、そろそろ冷たい影が次第に濃く擴がり出したので、私もいよく歸らうと腹を決めた。長々と續いた灌木の「原つば」を足早に過ぎて、とある丘の上に登つた。すると、右手にちよつとした櫛の林があつて、遠くの方に低い白聖の教會のある馴染の平地が目に入ることと思ひきや、意外にもまるで見覚えのない別の場所が眼前に展けた。足もとには細長い谷が連らなり、眞向ひには、高い壁のやうに、こんもりした泥楊の林が聳えてゐる。私は合點のゆかない氣持ちで足を止め、四邊を見廻した……「おや！」と私は考へた。「どうもこれはまるで見當違ひのところへ迷ひ込んだらしい。餘り右へ右へと取り過ぎたのだな。」我ながら自分らの間違ひに呆れながら、急いで丘を下りて行つた。すると、まるで穴蔵の中へでも入つたやうに、澁んで動かない厭な濕氣が私の全身を包んだ。谷の底にびつ

しり生ひ茂つてゐる濡れた高い草が、一面に布でも擴けたやうに白々としてみて、その中を歩くのがなんとなく薄氣味が悪かつた。私は大急ぎで向かうの岸へ登つて、泥楊の林に沿つて道を左へとりながら進んで行つた。蝙蝠どもは薄明かりのさしてゐる空に神祕めかしく、慄へるやうな輪を描いて、もう眠りに陥ちた梢の上を飛び交つてゐる。歸り遅れた一羽の鷹が時をさして急ぎながら、まつしぐらに勢ひよく空の高みを飛んで行つた。「やがてあの林の端れまで出たら」と私は心の中で考へた。「すぐに道が見付かるだらう——いやはや、一露里ばかりも餘計な廻り道をしてしまつた！」私はやつと林の端れまで辿りついたが、そこには道らしいものは更になかつた。草刈りが刈り残したらしい何かの低い灌木が、廣々と眼前に開けて、その先きには茫漠とした原が遙かに見渡された。私は又もや足を止めた。「これは一體どうしたといふのだ？……どこへ迷ひ込んだのだらう？」私はこの日朝から晩まで、どこをどんな風に歩いたかといふ事を、記憶の中から呼び醒まさうとした。「やつ！これはバラヘインの藪だ！」たうとう私はかう叫び聲を上げた。「ちがひない！あそこに見えてゐるのがシンチェーフの森らしい——だが、どうしてこんな所へ来てしまつたのだらう？……こんな遠いところまで？……不思議だ！これからまた右の方へとつて行かなくちやならぬぞ！」

私は灌木の原を通つて右の方へ足を向けた。その間に夜はまるで夕立雲のやうに迫つて、次第に濃く擴がつて行つた。闇は夕べの水氣と共に到る處から立ち昇るばかりか、上の方から降り注ぐやうにさへ思はれた。私はいつしか、人の足に踏み固められてゐない草茫々たる小徑へ出た。氣をつけて前の方を見透しながら、踏み外さぬやうに歩いて行つた。四邊は見る見る中にすつかり黒一色に包まれて、鳴りを靜めて行つた。——たゞ鶉がとき／＼啼き聲を立てるばかり。小さな夜鳥が、やはらかい翼を音もなく搏ち交はして、低く飛んで來たかと思ふと、危く私に打つかりさうになつて、憎えたやうに横へはづれて、闇の中に没した。私は藪の端れへ出て、畦道づたひにとほ／＼と進んだ。もう速くのものを見分けるのに骨が折れるやうになつた。まはりには畑がほのかに白く見えるばかりで、それから先きは刻一刻、不愛想な闇が大きな團塊のやうに湧き起こり、迫り寄つて來るのであつた。私の聴音は、冷たく凝つて行く空氣の中に鈍く反響した。色褪せてゐた空は、再び青味を帯びて來た。しかし、それはもう夜の青味である。その中に星屑がちら／＼と光りながら微かに揺れはじめた。

私が森と思つたのは、暗く圓味を帯びた丘であつた。「一體これはどこへ來たんだらう？」と私はまた聲に出して同じ事を繰り返し、三たび足を止めて、相談でも持ちかけるやうに、黄色い斑のあ

る英國種の獵犬チアムカを見やつた。これは四つ足類の中では、間違ひなく一番伶俐い動物であつたけれど、四つ足類の中で一番伶俐いこの犬も、たゞ尻尾を申し譯に振つて、疲れたやうな眼を、物憂げにほちりとさせたばかりで、一向にいゝ分別も授けてはくれない。わたしは自分の飼犬に對して氣まりが悪くなつたので、自分の行くべき道が忽然と分かりでもしたやうに、自棄半分にすんずん先きへ歩き出した。丘の裾を廻ると、すつかり耕地になつてゐる餘り深くない窪地へ出た。私は突然妙な氣持ちに襲はれた。この窪地は縁の傾斜になつた鑛子に、殆どそつくりそのまゝの形をしてゐた。その底には幾つかの大きな白い石が突つ立つてゐる。——まるでそれらの石は、密談のためにこゝまで這ひ下りたかのやう——それ程この窪地は囁聲のやうにがらんとして、おまけに上からは平つたい空が佗しげに垂れかゝつてゐるので、私は心臓をしめつけられるやうな氣がした。何やら小さな野の獸が石の間で、弱々しい物哀れ氣な鳴き聲を立てた。私は急いで丘の上に引つ返した。それまでは、まだ歸る道を探し當てる望みを失はないでゐたけれども、この時いよく完全な道を踏み迷つたものと觀念してしまつた。で、もう殆ど霧の中に沈みつくした四邊の地形をまるで見究めようともせず、たゞ星をたよりに、當てもなくすんずん歩き出した……ものの三十分ばかり、私はやつとの事で足を引き摺りながら、こんな風に歩き續けた。私は生まれてこの方、こん

な淋しい處へは、後にも先にも來た事がないやうに思はれた。どこにも灯影一つ見えないし、物音一つ聞こえなかつた。たゞ傾斜のゆるい丘が後から後からと現はれ、野は涯しなく野に連らなり、藪は丁度わたしの鼻先まで忽然と地から湧き出ると疑はれるのであつた。私は絶えず歩き續けたが、もういよく何處かで夜の明けるまで身を横たへようかと考へ始めた頃に、思ひがけなく恐ろしい切り岸の上に出てしまつた。

私は踏み出した足を咄嗟に引いた。仄かに透いて見える夜の薄闇をとほして、足下に廣い平地がはるばると見渡された。大きな川が半圓形にその縁をうねつて、視界から次第に遠ざかつて行く。鋼鐵いろをした水の反射が、ときん／＼鈍く光りながら、川の流れてゆく道を示してゐる。私の立つてゐる丘は、殆ど屏風を立てたやうな切り岸になつてゐて、その逞ましい輪廓が、蒼味が、つた塵しい空を背景に、くつきりと黒く浮き出してゐる。私のすぐ眞前に當たる、斷崖と平地の交叉した片隅では、川がこのあたりだけ動かない暗い鏡のやうにちつと澱んでゐて、そのかたはら丘の斷面の眞下には、二つの火が赤い焰を立てて燃えつ、煙りつしてゐた。その周りには人の齋めく姿が見え、その影が揺れ、時をり房々とした捲き毛の頭の前面が、あか／＼と照らし出される……

私はやつと自分の迷ひ込んで來たところが分かつた。この草野は、私たちの地方でベージンの草

野と呼ばれて、名の響いたところなのであつた……しかし、家へ歸ることなどは考へも及ばなかつた。殊に夜分のことではあり、足は疲れて膝頭ひざかぶががく／＼してゐた。私は焚き火の傍へよつて、家畜商人らしく思はれる人たちの仲間に入つて、夜が明けるのを待たうと腹を決めた。私は無事に崖をおりたが、最後に掴まへてゐた小枝をまだ放しもしないうちに、思ひがけなく老毛の大きな犬が二匹、意地わるさうな吠え聲を上げて飛びかゝつて來た。子供らしい甲高な聲が火のまはりに響いて、二三人の男の子が素ばやく地べたから身を起こした。私は彼らの不審さうな呼び聲に應じて叫んだ。子供らは私のそばへ駆け寄つて、すぐ犬どもを呼び戻した。二匹の犬は私のつれてゐたヂャンカの出現に、格別吃驚したらしかつた。私はみんなの方へ近づいた。

焚き火のまはりに坐つてゐた人たちを家畜商人と見たのは、私の思ひ違ひであつた。これはたゞ馬の群れを番してゐる近在の百姓の子供たちなのであつた。私たちの方では夏あつた頃、馬を追ひ出して一晩野飼ひする習慣があつた。晝間は蠅や虻がうるさくて堪らないがらで。馬の群れを夕がた追ひ出して、夜の引き明けに追つて歸るのは、百姓の子供たちにとつてこよない楽しみなのである。轡子を被らずに、古い半外套を着て、恐ろしく威勢のいい百姓馬に跨がり、楽しさうな叫びを上げたり鬨の聲を立てたりして、手や足を振りながら駆け出し、高く跳び上がったたり、聲高く笑つ

たりする。輕塵が黄色い龍卷きのやうに立ち昇つて、街道づたひに流れて行く。よく揃つた蹄の音が遠くの方まで響き渡り、馬は耳をびんと立て、駆け行く。まつ先には縫わぬ藍に牛蒡の實をつけた老毛の栗毛くりげか何かが、尾を高々とふり上げて、絶えず足どりを變へながら、まつしぐらに駛つてゐようといふもの。

私は道に迷つたことを子供たちに話して、その傍に腰をおろした。子供らは私にどこから來たのかと訊ねて、暫らくおし黙つたまゝ、少し片寄つてくれた。私たちはちよつと言葉を交はした。私はぐるりを馬に警られた灌木の下に身を横たへて、あたりを見廻しはじめた。それは實に素ばらしい情景であつた。焚き火の周りには圓い赤みが、つた光りの反射が、闇に凭りかゝるやうな風情で慄へながら、いまにも消えるかとばかり。焰は折々ばつと燃え上がつて、光りの圓の外まで反射を投じてゐる。かほそい光りの舌は、あらはな楊の枝を一舐めしては、すぐに痕もなく消えてしまふ。

——尖つた長い影が、今度は自分の方から、ほんの束の間光りの中へ流れこんで、火のすぐ傍までとゞく。闇が光りと争つてゐるのであつた。をり／＼焰の力が弱まつて、光りの圓が狭められると、襲ひかゝつて來る闇のすから、眞ん中に白い斑のある栗毛や、眞つ白の馬の首がぬつと突き出て、素早く長い草を噛みながら、鈍い眼付きで私たちを眺めるかと思ふと、又うなだれてすぐに隠れて

しまふ。たゞ、いつまでももぐくと嘯みつゞけて、鼻を鳴らす音が聞こえるばかりであつた。灯に照らされた場所からは、闇の中でしてゐることが容易に見分けられなかつた。で、すぐ傍のものまで何も彼も、殆ど眞つ黒な帷でもかけられたやうに思はれる。けれども、遙か地平線に近いあたりに、丘や林が長い斑點のやうに、ほんやりと見えてゐた。暗いまゝに澄み渡つた空は、一面に神祕めかしい美を湛へながら、私たちの頭上に涯しもなく高く、嚴かに擴がつてゐる。この一種特別な、惱ましいまでに爽やかな香り——露西亞の夏の夜の香りを吸ひ込むと、胸が甘く締めつけられるやうな氣がする。あたりには殆ど何の物音も聞こえない……たゞ、間近かの川で、だしぬけに高く水音を立てながら、大きな魚が飛び上がるのと、岸邊の葦が寄せ来る波にゆられて、かさこそとしめやかな嘯きを立てる……たゞ、焚火ばかりが、靜かにばらばらと燃せてゐる。

子供たちは火のまはりに坐つてゐた。私に嘯みつきさうな勢ひを示した先程の二匹の犬も、やはりそこに坐つてゐる。二匹ともまだ永い間、私が傍にゐるのが氣になつて堪らないらしく、睡さうに眼を細めて、焚火を流眈に見ながら、時々いかにも自分の威嚴を示すやうに、怒り聲を立てる。初めの中はたゞ唸つてゐるけれど、終ひには自分の望みが叶はないのを悲しむやうに、いくらかきいゝ聲で泣き出すのであつた。男の子はみんなで五人、フエーチャ、バヴルーシヤ、イリユーシヤ、

コスチャ、ワーニヤであつた。(私は彼等の話でみんなの名前を知つたので、これからこの少年たちを讀者に御紹介しようと思ふ。)

先づ一番年かさのフエーチャは、見たところ十四ばかりの年配と思はれる。背恰好のすらりとした少年で、華奢で美しいけれど、少し小づくりの顔立ちをして、白っぽい髪はふさふさとして渦巻き、眼は薄色で、いつも半ば愉しげな、半ばほんやりしたやうな薄笑ひを浮かべてゐる。すべての様子から察したところ、裕福な家庭に育つたらしく、野飼ひに出たのも暮らし向きの必要のためではなく、たゞ何となく慰み半分らしい。身には黄色い縁を取つた派手な更紗の襦袢を着け、軽く羽織つた新しい小さな外套は、僅かにそのほつそりした肩に載つかつてゐた。淺黄色の帯には櫛がぶら下がつてゐる。胸の淺い長靴は、僅かに自分が拵へて貰つたもので、親父譲りではなかつた。次のバヴルーシヤといふ少年は、黒い髪をくしやくに纏らして、灰色の眼をし、頬骨が廣く、蒼白い顔には痘痕のあとを見せ、口は大きいけれど尋常で、頭は俗に云ふ麥酒釜のやうに大きく、身體はすんぐりとして不恰好である。この少年はいゝ子振りとは云へなかつた——それは辯解しやうがない——それでも私はこの子が氣に入つた。圖抜けて俐巧さうな、黒びれない眼付きをして、聲には力が籠もつてゐた。身なりも人前で威張れるやうなものではなかつた。身につけてゐるのは粗末な太

麻の襯衣と、補布はぎだらけの股引だけであつた。三番目のイリュージョの顔は可成り貧弱な方で、釣鼻にしよほくした眼、間のびのした輪廓、すべてが一種愚鈍らしい病的な不安を現はしてゐた。引き締めた唇はまるで動かさず、八の字に寄せた眉はいつかな開かうとしない。——まるでいつも火が眩しくて、顔を曇めてゐるやうである。殆ど白く見えるくらゐ黄色な髪は、のべつ両手で耳の上まで引つ張り下ろしてゐる低いフルト帽の下から、びん／＼とはみ出してゐる。彼は新しい木の皮靴と脚絆を穿き、胴を三つ巻いてゐる太い縄は、小ざつぱりした黒の長襦袢をきつちり締めつけてゐる。この子もバズルシーシャも、見たところ、十二を越してはゐないらしい。四番目のコスチャはまだ十才そこ／＼の少年で、その考へ深さうな愁ひを帯びた眼付きが、私の好奇心をそゝつた。瘦せた小さな顔は雀斑だらけで、栗鼠のやうに下の方が尖つてゐる。唇は殆ど見わけがつかない位であつたが、その代はり瑞々した光りを湛へて輝く大きな黒い眼は、不思議な印象を與へる。その眼は、何か物云ひたけな風であつたが、それを表はさうにも、言葉では——慥くとも彼の言葉では盡くせないのである。背が小さくて弱々しさうな體格、身なりも可成り見すほらしい。殿りに控へたワニーヤは、初め私の眼に止まらなかつた。彼はごつ／＼した蓆の下に大人しく丸まつて、地べたの上に寝ころがつたまゝ、たゞ時折り亞麻色をした捲き毛の頭をのぞかせるばかりである。この

子はやつと七つばかりであつた。

かういふわけで、私はやゝ離れた灌木の下に身を横たへて、子供たちの様子を眺めてゐた。一つの方の焚き火には小さな鍋がかけてあつて、その中では「馬鈴薯」が煮えてゐた。バズルシーシャは鍋の番について、膝をつきながら、沸え立つて來た湯の中を木切れで突つき廻してゐる。フェーチャは外套の裾を擡げ、眩づきをして横になつてゐた。イリュージョはコスチャと並らんで坐つてゐたが、相變はらず一生懸命に眼を細めてゐる。コスチャは稍々うなだれ氣味に、どこか遠くの方を眺めてゐた。ワニーヤは蓆を引つ被つたまゝ、身動きもしない。私は眠つてゐるやうな振りをした。子供たちは又ほつ／＼話を始めた。

初めの中は明日の仕事のことや、馬のことなど、あれこれと取り止めのない話をしてゐたが、急にフェーチャがイリュージョの方へ振り向いて、仕さしになつてゐた話の端を戻すやうに、かう問ひかけた。

「ぢや、何かい、お前はほんとに家魔を見たのかい？」

「いんや、俺は見やしない。第一、そんなものを見るわけに行かないさ。」と、イリュージョは噎れた弱々しい聲で答へたが、その響きはこの上もなく顔の表情に相應しかつた。「俺は聲を聞いただけ